

平成 23 年度文部科学省「日本／ユネスコ パートナーシップ事業」

ASPUnivNet によるユネスコスクール地域拠点形成と
フラッグシップ・プロジェクトの展開

Education for Sustainable Development

ESD・ユネスコスクール研修会

岡山2011

報 | 告 | 書

平成24年1月

岡山大学

平成23年度文部科学省「日本/ユネスコパートナーシップ事業」
ASPUnivNetによるユネスコスクールの地域拠点形成とフラッグシップ・プロジェクトの展開

「ESD・ユネスコスクール研修会 岡山2011 報告書」

目次

1. プログラム	1
2. 開会式	2
3. 講演1	4
井村 隆 (文部科学省国際統括官補佐 (日本ユネスコ国内委員会事務局)) 「持続発展教育 (ESD) とユネスコスクールの活用について」	
4. 講演2	8
柴尾智子 (ACCU(ユネスコアジア文化センター)) 「ESDとユネスコスクール」	
5. 講演3	21
鈴木克徳 (金沢大学) 「北陸におけるユネスコスクールへの取組み」	
6. 学校の取組み事例紹介	
(1) 福山市立駅家西小学校	28
(2) 岡山県立岡山一宮高等学校	34
7. 意見交換	39
8. 閉会式	43

付録：プレゼンテーション資料

1. プログラム

平成23年度 日本/ユネスコパートナーシップ事業

ESD・ユネスコスクール研修会 岡山2011

主催：文部科学省、岡山大学

後援：岡山市教育委員会

日時：平成23年8月27日（土）14：00～17：00

場所：岡山大学 自然科学研究科棟2F大講義室（岡山市北区津島中3-1-1）

プログラム：

14：00-14：10 開会式

14：10-14：40 講演

「持続発展教育（ESD）とユネスコスクールの活用について」

井村 隆（文部科学省国際統括官補佐（日本ユネスコ国内委員会事務局））

14：40-15：10 講演

「ESDとユネスコスクール」

柴尾智子（ACCU（ユネスコアジア文化センター））

15：10-15：40 講演

「北陸におけるユネスコスクールへの取組み」

鈴木克徳（金沢大学）

15：40-15：50 休憩

15：50-16：30 学校の取組み事例紹介

福山市立駅家西小学校

岡山県立岡山一宮高等学校

16：30-16：55 意見交換

16：55-17：00 閉会式

2. 開会式

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

それでは皆様、お待たせいたしました。ただいまより平成23年度日本ユネスコパートナーシップ事業ESD・ユネスコスクール研修会 岡山2011を開催したいと思います。

まず、今回の開催に当たりまして、日本のESD、そしてユネスコスクールの推進の拠点でありました宮城県をはじめとした地域で、多くの人々の生活と命を奪いました東日本大震災で亡くなられた方がたを悼み、参加者一同で1分間の黙祷をささげたいと思いますので、よろしくご協力ください。

黙祷。

〔黙祷〕

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

ご協力ありがとうございました。

それでは、ESD・ユネスコスクール研修会 岡山2011の開会式を始めたいと思います。開会にあたり、これまで岡山大学環境学研究科長を務められまして、この4月から岡山大学理事、副学長に就任されました阿部宏史先生からごあいさつをいただきます。

○阿部宏史（岡山大学副学長）

失礼いたします。ただいまご紹介いただきました岡山大学の教育研究担当の副学長を務めております阿部と申します。

先ほどご紹介にありましたが、昨年度まで環境学研究科長をしておりまして、岡山大学のESD推進組織でありますユネスコチェアの代表を務めております関係で、こういったユネスコスクール研修会を過去2回ほど開催させていただきました。

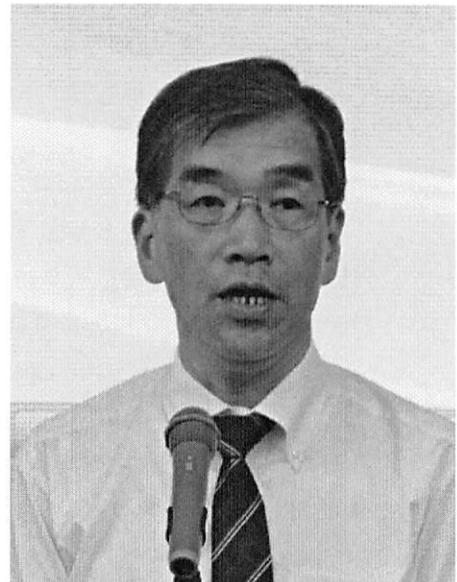
今回は岡山大学を代表いたしまして、一言ごあいさつをさせていただきます。

本日は、ESD・ユネスコスクール研修会を開催いたしましたところ、多数の方々にご出席いただきまして、大変ありがとうございました。

また、本日は大変お忙しい中を、研修会の講師として岡山大学にお越しいただきました文部科学省国際統括官付の井村隆様、財団法人ユネスコアジア文化センターの柴尾智子様、そして金沢大学の鈴木克徳先生に対しまして、講師の労を快くお引き受けいただきましたことに対して、厚く御礼を申し上げたいと思います。

本研修会は、ESDとユネスコスクールに理解を深めていただくということをテーマとして開催しております。この2つにつきましては、後ほど講師の方がたから詳しくご紹介があらうかと思っております。

岡山では、ユネスコスクールの加盟が大分遅れておりまして、数年前は2校程度しかなかったのですが、最近は徐々に浸透してまいりまして、加盟校が増えております。ユネスコ



アジア文化センターではユネスコスクールのホームページを運営しておりますけれども、それを見ますと2011年6月時点で、全国で308校ということになっております。この数字は、2009年10月には106校ということでありましたので、1年強の間に200校余り増加しているということで、全国の中でユネスコスクールの加盟校が急速に増加しているということでございます。

岡山地域はご承知のように、2005年に国連大学からESDの推進地域でありますRCEに認定を受けておりまして、岡山市を中心に公民館を拠点とするESDを進めてまいりました。最近になりまして、岡山市はユネスコスクール事業にもかなり力を入れておりまして、先頃新聞で報道されたところによりますと、2013年までに岡山市内の市立の小・中学校32校程度をユネスコスクールに加盟させたいということを表示しております。

このようにユネスコスクールは、数は増えてきているのですが、それとともに活動の質的な向上ということが求められておりまして、このためには大学関係者等による助言ですとか協力ということが不可欠になってきております。こういったことを踏まえまして、2009年9月にユネスコスクール支援大学間ネットワークが結成されまして、現在では全国15大学が加盟いたしまして、ユネスコスクールの加盟促進ですとか、ユネスコスクールの活動に対する支援に当たっているところでございます。

本日のESD・ユネスコスクール研修会は、このネットワークに加盟している本学が、日本／ユネスコパートナーシップ事業の一環として実施するものでございます。

過去2年間に引き続いて3回目の開催ということであります。

今日は17時までの短い期間でありますけれども、講師の方々のお話を通じて、ユネスコスクールの概要ですとか、あるいはESDの先進事例について学んでいただくとともに、関係校間で活発な意見交換を行っていただくようお願いしたいと思います。

以上、簡単でございますけれども、開会のごあいさつとさせていただきます。本日はよろしくお願いたします。

3. 講演1「持続発展教育（ESD）とユネスコスクールの活用について」

井村 隆（文部科学省国際統括官補佐（日本ユネスコ国内委員会事務局））

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

ありがとうございました。

それでは、これより3人の先生にご講演いただきたいと思います。

最初は、文部科学省国際統括官補佐の井村隆先生です。

井村先生は、文部科学省で長くユネスコの仕事に携わり、日本のユネスコスクールを増やしていく、その先頭に立ってご活躍していただいております。

では先生、よろしくお願いいたします。

○井村 隆（文部科学省国際統括官補佐）

皆さんこんにちは。ただいまご紹介いただきました文部科学省国際統括官付、本件ですと日本ユネスコ国内委員会の事務局をやっておりますが、こちらで補佐をやっております井村と申します。先生と言われるのになれてないので、先ほどのご紹介でかなり緊張してしまっているのですが、よろしくお願いいたします。

今日は、私のほかACCUの柴尾先生、金沢大学の鈴木先生と3人でお話することになっておりますので、私のほうからは全体的な話をさせていただき、だんだんと話が進むにつれて、学校現場に近い話になっていくのかなというふうに思っております。皆さんもそういう感じで聞いていただければよろしいかと思います。

研修を始めるに当たって、まず皆さん、ESDという言葉をご存じなのでしょうか。ユネスコスクールやユネスコについてどれぐらいの方がご存じなのでしょうか。まず、ユネスコがどういうものかについて、皆さんご存じですか。皆さん、ご存じのようですね。

ただ、話を進める前提として日本とユネスコとの、やや特別な関係というのを先に頭に置いておいていただいたほうがいいかなと思います。

というのも日本が戦後初めて加盟した国際機関がユネスコなのです。ユネスコとは国際連合教育科学文化機関のことですが、日本では、仙台で始まった民間の方がたのユネスコ運動から始まって、加盟にいたった経緯があります。ちょうど日本が国連に加盟する前にユネスコには加盟しました。

そういうこともあり、ユネスコをみんなが知っているものかといいますと、そうでもないみたいで、文部科学省の中でも本当にユネスコのことを知っているかという、なかなかこれまでは浸透していないというのが現状でした。

今回このESDを進めるに当たって、いろいろな省内での動きもありますので、その辺も含



めて紹介したいと思います。

まず、E S Dについてですが、これもご存じだと思いますけれども、ここでとくに申し上げたいのは、E S Dとは持続可能な社会を構築するための人づくりであるということです。例えば環境教育とか、国際理解教育とか、エネルギー教育とか、そういう何とか教育という中の一つとしての持続発展教育ではなくて、その上に立つ、上というより、その基盤となる新しい概念、考え方だというふうに理解していただくとよろしいかと思います。

2002年のヨハネスブルクサミットで、実はこれは日本が言い出しっぺということで、その後、国連決議で2005年から2014年の10年をE S Dの10年とするということになりました。ユネスコがその主導機関に指定されました。

ユネスコはこれを受けて、国際実施計画をつくりました。それを受けて各国でも国内実施計画をつくることになるのですが、そもそもこのE S Dの考え方やアプローチとしましては、ここに挙げたようないろいろな切り口があるということで、既にそれぞれの学校でなされていることから入っていただければいいのかなというふうに思っております。

E S Dに関する取り組みなのですが、日本政府内では内閣官房室に関係省庁連絡会議を設置しました。ここで国内の実施計画を策定しております。E S Dは持続可能な社会づくりの担い手となるよう、個人を育成する教育であるといえます。特に、個個人が他人との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性の中で生きていくとすること、その中で「関わり」とか「つながり」を尊重できる個人を育むというところが、このE S Dの特徴的な考え方なると思います。

文部科学省に設置された特別な機関である日本ユネスコ国内委員会は、そもそも日本が加盟したときにできたユネスコ活動に関する法律というもので、設置することになっているものです。けれども国連機関の中で国内委員会はユネスコの日本支部というわけではないのです。各国にこのような委員会をつくるのが、ユネスコ憲章の中で推奨されておまして、それぞれ各国でつくっているのです。ユネスコにも日本政府代表部というところがありますから、ユネスコと日本との関係には、日本政府とのつながり、この国内委員会とのつながり、NGOやNPOとのつながりという、ユネスコと日本という3通りぐらいのつながりがあります。それ以外にも、民間企業や大学とのつながりなどもあります。このように幾つものタイプつながりが、ユネスコとの間にはあるということで、その中でユネスコ国内委員会というほかの国際機関と違うちょっと特殊なものがあるわけです。ここがユネスコ活動の国内の推進をしているわけですが、具体的に何をやっているかという、フォーラムを開催したり、ウェブサイトの運営、こちらは現在ACCUをお願いしてやっていただいておりますユネスコスクール事務局と、ウェブサイト運営をしていただいております。それから、ユネスコスクールの全国大会も開催しております。今度2014年にE S Dの10年の最終年会合を日本で開催するということが決まっております。今どこでやるかというのをいろいろ検討しているところです。文部科学省としては、学習指導要領の中に、E S Dの考え方を織り込んだり、教育推進基本計画の中でも、E S Dの推進や、ユネスコスクールの活用などを織り込んだりしています。

というのも、ユネスコ日本国内委員会が、文部科学大臣に対して2008年にこういう活動をするよう提言いたしまして、それを受けていろいろ実際に活動しているわけです。

本日の日本／ユネスコパートナーシップ事業も実際予算を確保して、皆さんに活動していただいているということなのです。

それから2008年3月公示の学習指導要領と中央教育審議会答申にESDに関する記載が入りました。

今までユネスコ活動と実際の日本の教育制度とにつながりをつくることができなくて難しかったのです。現在の国内委員会の会長が、田村先生という方なのですが、実はACCUの理事長でもあり、実際に学校経営されている方ですので、今までの歴代の国内会の会長の中でも、一番教育現場に近い方ではないかなと思います。その方が中教審のメンバーでもありましたので、強力に推進していただきまして、学習指導要領の中に入りました。今では初等・中等教育局長が、こちらから言うまでもなく、ESDをもっとやっていかなければいけないではないかというぐらいになって、以前は余り考えられないような状況で、びっくりするほどです。担当もおかれていますのですが、すごく行き届いているような状況です。

また教育基本計画でも、特にESDを主導するユネスコの世界的な学校ネットワークであるユネスコスクール加盟校の増加を目指して支援するということになっています。

これは国の計画ですが、これを受けて都道府県、または市町村でも同じような形で教育計画が策定されて、どんどんESDが浸透していくようにということで進められていると思います。

こちらといたしましては、ESDを推進していく形は一応つくられたらということではESDをやるということ自体は、学習指導要領を変えましたので、いわば当たり前というか、これを推し進めていくということが、皆さんそうですねということになりました。その中でユネスコスクールということですが、ユネスコスクールという名前自体は日本特有の言い方ですけど、これについて詳しくは後で聞いていただければいいと思います。このユネスコスクール活動とESDの考え方がすごく似ているというか、ほぼ同じような形になっていますので、ESDを広げるツールとしてユネスコスクールを増やすという形でやっています。また、ESDを進めるためにもあって、国立教育政策研究所等も支援や研究をしています。

ユネスコスクールが就学を要するというので、幼稚園から教員養成課程のある大学もが加盟していらっしゃる。数も大分増えていまして308校で、一応目標500校という感じで進めておりますが、これも近々達成されるのではないかと考えております。世界中にユネスコスクールはありますので、世界に発信するネットワークのメンバーになるということで、本当に広いグローバルな考え方で活用していただければと思います。

こちらのほうは、ACCUのほうでやってもらっているのですが、それを支援する大学間のネットワークということで、大学の先生方の協力も得ながら、これもユネスコスクールになる前からずっと、いろいろ仲間として関係持って一緒に進めていこうという話になっていたと思います。

また、企業からの支援もあります。ユネスコスクールになりますと、三菱UFJのほうから、スクールプレートが贈呈されます。ほかに、いろいろな教材とか、助成金が出るなどの形もあります。また、企業としてもCSRという活動の1つとしてESDをすすめるというようなことでよく活動しています。

申請の流れはこのような形になっておりますが、最終的に教育委員会等から出て、こちらにもって申請するのはいいのですが、ここが今ちょっと人が足りない状況らしく、これは書類を審査しているのですが、出してもなかなか返ってこないという状況で、かなり時間がかかってしまっています。ただ、これをネガティブにとらえるよりは、準備期間としていろいろ事

前準備に充てていただければよろしいかと思います。私どもも一日も早く加盟証明書が来るようにということは、機会あるごとに執行部のほうには申しあげているところです。

今後の展開としましては、やはり世界につながるということもありますので、いろいろなプロジェクトを通じてとか、国内もそうですが学校間の交流からまた世界へも広げていっていただければいいかなと思っております。

例えばということで、ライスプロジェクトというお米を核にしたプログラムが、日本政府がユネスコのバンコク事務所のほうに資金等を出していろいろ協力してやっているということのようです。このようにどんどん教育研究ネットワークを広げていっていただきたいなと思えます。

あとは、各地域でも縦のつながり、横のつながり、また教育機関以外とのつながりもどんどん広げていただき、このつながることによるいろいろな気づきがこのESDを形づくるということになっていきます。

私のほうからは以上です。何かありましたら、ご質問等伺いたいと思えます。どうもありがとうございました。（拍手）

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

井村先生、どうもありがとうございました。



4. 講演2「ESDとユネスコスクール」

柴尾智子（ACCU(ユネスコアジア文化センター)）

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

それでは引き続きまして、財団法人ユネスコアジア文化センターの柴尾智子先生からお話をいただきたいと思います。

ACCU、財団法人ユネスコアジア文化センターは、アジア太平洋地区でのESDの推進を担うだけではなく、先ほどの井村先生の話の中にもございましたが、文部科学省の委託を受けて日本のユネスコスクールの事務局的な役割も担ってくださっております。

それでは、よろしくお願いいたします。

○柴尾智子（ACCU（ユネスコアジア文化センター））

こんにちは、ユネスコアジア文化センターの柴尾です。

昨日金沢で、井村さんや、今からお話の鈴木先生たちと一緒に「金沢におけるユネスコスクール交流会」というのをやってきて、とてもいい話をたくさん伺いました。

それで、今日お配りしていただいた資料と若干スライドは変わっている部分もあります。多くは変わっていないんですけど、昨日聞いたすばらしいお話をもとに、若干スライドに加わっていたり、文字や数字が訂正してあります。

それから、今いろんなことが行われていて、奈良ではユネスコスクールキャンプが先生たち、教育委員会の手づくりで行われているし、先週は大阪で3日間、フィリピン、タイ、韓国、中国、日本から200人ぐらい、日本でも全国からいろいろな生徒さんたちが来て、子ども同士の合宿というのが行われて、本当にすばらしい会議でした。こちらからも行かせていただいたんですけど、とてもすばらしいことがたくさん全国で起こっているんで、そういうことがいろいろもっと交流していけるようになるといいなというふうに思っていて、今日は話を進めさせていただきます。

今日の私の話はこういう内容なんですけれども、先ほどの井村先生の内容に含まれる部分は、ちょっと割愛させていただきながら、岡山がESDの先進地でもありますので、お話ししてみても、それは違うじゃないかというふうに先生たちのご批判を受けながらやってみたいと思います。

今日はたくさんお話ししたいことがあって、これは新しいスライドなんですけれども、時間が足りなくなるかもしれないので、先に結論というか、私の仮説なのですが、ESDというのは、すべての教育と学びはSDのために。SDというのは持続可能な発展とか開発とか、そうなんですけど、そういうことから。これは私が勝手に言っているのではなくて、後に出てくるリオデジャネイロでの地球環境サミットで、アジェンダ21に、その教育と研修の必



要性を書き込んだジョンズ・ホプキンスさんという人が言っていたことなんですね。そのメッセージはすごいシンプルで、すべての教育と学びがESDのために貢献するのだという、そこが基本だよということがまずあると思うんです。

さらに、質の高い教育と教育環境。まず質の高い教育のほうなんですけど、こんなことを聞いたことがあります。ある大阪のユネスコスクールです。大変進学率が高く、また大変エリート校で、日本ではもう知らない人がいないくらいのところなんですけども、フィリピンと交流したいと思ってフィリピンに出かけました。そうしたら、そのフィリピンのほうが、いや、もう日本の高校生は未熟だから交流なんかしたくないよというふうに言ったらしいんですね。語学の問題はさておきと言ったのですって。ということは、英語の問題はさておいても、日本の高校生は未熟だから、うちの高校生と交流するには足りませんということを言って、大変ショックを受けて帰られてきた。本当、日本のもうトップのエリート校の話です。

そのことがきっかけになって、うちの学校を何とかしなきゃということで、その学校のユネスコスクールの活動が始まっています。

だから、質の高い教育って何をやっているのというのがあると思うのですが、例えば一例として、受験とは違う部分でそういうものがあるのではないかというのが1点です。

もう一個の教育環境なんですけど、教育環境は別に学校だけじゃなくて、公民館とか社会教育施設とか企業教育とかいろいろあると思うんですけど、学校に限って言ったら、校長先生はユネスコスクールやESDをがんがんやりたい。職員はそんなのやるのやめといて思っているとか、学校は頑張っているけど教育委員会の理解がないとか、教育委員会はやらせたいけど学校はやりたくないとか、学校は頑張っているけど地域は無関心とか、そんなのは全部やはり教育環境としてどうかなと思うのですけど、やはりESDはみんながみんなのためにやることなので、そういった意味での教育環境が整っていないと本当にESDって言えるのかなというふうに考えてみるのはどうかというふうに思っています。

ただ、それだけだと質の高い環境、教育がすばらしい教育環境の中で行われるだけなので、ESDではないのではないかと思うのですね。どういうことかといったら、ESDが今こんなに世界で取り組まれているというのは、やはりこのままじゃだめだというような危機感があるから始まっているわけで、私たちにとってみたら、まず自分たちのコミュニティー、それからそのコミュニティーの先にある日本が、いずれにしてもずっと孤立して鎖国の中ではいられないので、世界の中でのコミュニティーと日本人が世界の中でどうあるべきなのか。それが現在どうで、将来どうなのかというような、このままではだめなんじゃないかというような危機感と、それからその、人に対する危機感とコミュニティーそのもの、その延長にある日本というのが世界の中でどうなっていくのかなという、そういう危機感、こういうものがあってESDかな。

ただ、またそれだけでもESDではないと思うんですよ。危機感に裏づけられた教育というのは、その危機感だけでは教育そのものがもうしょげてしまうというか、長続きしないというか、教えているほうも教わっているほうもしんどいので、やはりESDには希望、頑張ればできるとか、頑張らなくてもできたらもっといいんだけど、みんなで力を合わせたらできるとか、いや、きっと自分たちの未来は、つくっていったら明るいものになるんだとか、そういう希望がなかったらやはりESDじゃないんじゃないかと思うんですね。今日私がお伝えしたいのは、要するにこういうことです。お伝えできないかもしれませんが、頑張ってみます。よ

ろしく願います。

先ほど井村さんからお話がありました。ユネスコスクールのユネスコでの始まりは1953年です。これは先ほどお話がありましたように、日本はユネスコに1951年に加盟しているんですけど、それは何と戦後のあのGHQがまだいた占領の当時なんですね。占領されている、主権を回復していない国が、国際機関に加盟するってどういうことなかなど、今でもちょっとイメージがわからないんですけど、やはりそれはもう熱狂的な民間ユネスコに支えられて、そういう加盟が恐らくすごく例外的に、すごく例外的に行われたんじゃないかと思っていて、いざれ暇ができたらちょっと、その当時の新聞なんかも見てみたいなと思っっているんですけど、ユネスコ親善大使を長くされた、それからユネスコ国内委員会の会長もされた日本画家の平山郁夫先生が、長くユネスコにかかわられた方ですけども、広島で被爆をしていらっしゃることも含めて、この当時の日本がユネスコに加盟したときのことを物すごく熱く語られているんです。

それから2年たって日本は、これを見てください。世界中でたった15カ国しか参加していないときに、日本は入っているんですね、参加しているんです。この地図の黄色いところはどこだかわかりますよね。パキスタンですね。パキスタンも独立直後ですね。

まだこの頃は、日本は国連にも加盟してなくて、1956年に国連加盟だと思えます。だから、本当に熱い、ユネスコ加盟直後の熱気の中でこれに加盟しているし、一方ユネスコもまたできてほやほやで、もう6,000万人も第2次世界大戦で亡くなってしまった。そういう中で、学校が平和づくりのためにやっっていけることが多いんだということで、このプロジェクトをスタートさせたとかかかれています。

今といたしますか、2009年のデータですけど、こんなに広がって、ユネスコの加盟国と地域は、今世界で193ですけども、ほとんどの地域でユネスコスクールの活動が行われています。

アジアで白いところは、ちょっと残念なことにアフガニスタンとブータンですけど、ブータン、アフガニスタンについても、2010年、2011年、ユネスコスクールができるような動きがあるというふうに聞いています。

これがユネスコ憲章ですね。有名な「戦争は人の心の中に生まれるものであるから」という文です。

今申し上げましたように、現在、今年6月のデータですけれども、世界81の国で1,168校ユネスコスクールに加盟をしています。ユネスコは、先ほど申し上げましたように1953年、昭和28年開始のプログラムで、日本は初期から参加している。それは何かというと、時代の要請にこたえ、また現在及び将来の社会をよくしていく児童・生徒を育てるために発展してきました。ユネスコの言葉です。だから、ESDという言葉ができるずっと前から、今と将来の世界をよくしていくということが、このユネスコスクールの理念に盛られています。

順調に発展をしまして、1953年が43校、3,000校、6,000校が2003年、そして今9,000校以上ということなので、ユネスコの中でも大変成功しているプログラム、長続きしているプログラムです。

ちなみに皆さんがよくご存じだと思う世界遺産、これはスタートが1971年、日本の参加は1991年ですので、それよりもずっとずっと古い歴史があると言えます。

ユネスコの定義によると、世界中の子ども、青年の直面する教育ニーズにこたえるため、平

和・自由・正義と人間開発、これを求めて質の高い教育の強化と普及を實踐する学校であるとされておりまして、日本では、皆さんのスライドには書いておりませんが、近年という言葉ですね、近年ユネスコスクールはESDの推進拠点として位置づけられて、文科省、日本ユネスコ国内委員会などが中心になって加盟校増加に、そしてその質が高まることに取り組んでいます。

これは、文科省のデータからつくった加盟校の増加なんですけど、世界はビヤッと伸びたんですけど、日本を見てください、これ。1956年、1960年、1965年、1970年、この辺は同じような数が並んでいて、2005年、2007年、2008年、この辺が急にバツと増えていますよね。ここでいろんなことが起こっているんですね。そして、今はその延長上であって、先ほどお話がありましたように、今現在308ということになります。

実は、この辺でもちょっと大切なことが起こっていて、ここで大阪のさっきの学校なんかも含めて、33年ぶりに日本で新規のユネスコスクールができています。

先ほどの井村さんの資料ですね。地域的な分布、それから学校種別ごとの分布です。

日本では小学校がとても多いのが特徴で、お隣の韓国なんかは逆に高校のユネスコスクールというのが多いのが特徴というふうに伺っています。

これがユネスコスクールにどうやってなれるのかを示したもので、すごく話を単純にしたら、これは世界遺産と同じなんです。国が推薦をして、審査をして、でユネスコが登録して、そのプレートが登録みたいな、本当に世界遺産と同じようなものなので、そんなにサッササッサとか行ってもらったら逆にちょっと困るといえるか、それくらいの価値があるものだなというふうに、みんなで大切に育てたいプログラムなんじゃないかなというふうに思っています。

先ほど急に学校の数が、ユネスコスクールの数が増えたので、この辺で何かが起こりましたよと、その何かの一つなんですけど、先ほど井村さんの話にもありましたように、国内委員会で提言が出されたりしまして、その提言を付される形で、平成20年4月22日に都道府県と政令指定都市に、文科省の国際統括官と初等中等局の局長連名の文書が出ています。これが、私の知る限り、国の施策と地方自治体がつながっていく、とても重要なターニングポイントだったと思うんですけど、ここではこういうふうなポイントが説明といいますか、通知されていません。

ESDは既存の取り組みに持続可能な社会の構築という共通の目的を与える。学習指導要領の改訂を契機として、ESDの意義を学校現場に浸透させる必要がある。ESDは学校現場にとどまらず、保護者や地方自治体、教育委員会に同趣旨の周知を図る必要がある。ESDの推進には、ユネスコ協同学校ネットワークの活用が有効。ユネスコ協同学校というのがユネスコスクールと今言われているものの、その前の名前です。

この頃はまだ・があって、その後とれるんですけど、ユネスコ・スクール参加のメリットの明確化と登録システムの改善が必要。それまでは学校が直接国に申請してたんですけど、この時点で学校種別によって市町村、県、国というふうな順番の整理がなされました。そして各自自治体には登録の窓口とホームページにそのことを載せてねみたいなのが依頼をされています。

ここは、先ほど触れていただいた教育振興基本計画のところで、もう一つESD実施計画というのを国で定めていて、これは関係省庁連絡会議というのを文科省、環境省その他、内閣官

房の下に置かれていまして、国土交通省、厚生労働省とか、農林水産省とか、そういうところが入っています。法務省とかもオブザーバー参加だったと思います。

その中で、実は平成18年、2006年にこれできたときには、ユネスコスクールのことはまだ書かれていませんでした。まだそういう段階ではなかったのです。ですけど、先日6月3日に改訂された改訂版においては、今後進めていく3つの重点取り組み、普及啓発、教育機関による取り組み、地域の実践の一つの中で、ユネスコスクールがここにあるように、大変大きく取り上げられるようになりました。これがこの5年間の大きな変化だったといえると思います。

よくESDは2002年から語られることが多いですけど、もちろんその前段があって、リオサミットですね、1992年。それからもっともつとつと1972年の国連人間環境会議、そして日本の提案で、そのときも日本の提案で環境と開発に関する世界委員会というのが発足をされていて、まず日本は提案をするんだから、やはりその成果も自分たちで上げていきたいんじゃないかなというふうに思います。なので、いろいろこういうような動きがあり、先ほどの岡山RCEというのも2005年にスタートをしています。

それから、議員連盟等もできましたし、2011年国内実施計画の改定を経て、2014年終了といいますか、10年の締めくくり、もっと頑張ろうねという会議を日本のどこかで開催するというので、今そのどこでやるかということを選定中というふうに伺っています。

こちら辺のスライドはお配りしたものと変化がなくて、飛ばします。

大変立派なことが書かれていて、これは皆さん、お持ちなんではないですか。「ESDとユネスコスクール」という黄色い冊子、こういうところに書かれていて、その黄色い冊子はユネスコスクール公式ウェブサイトからもダウンロードいただけます。今日の配付物には入っていないんですけど、これが順々に改訂されていて、ユネスコスクールとESDをすぐに理解しようと思ったら、大変よくできている冊子です。わかります、この黄色い。よかったです。それを是非ご覧になってください。そこから抜粋したものです。

それから、今出しているスライドは、先ほどのESD国内実施計画、その中でどう書かれているかなんですけど、ESDをやっているのはもちろんユネスコスクールだけじゃないので、国民全体でESD普及促進を図りますというふうに書かれています。そのために教育機関も協力するんだというふうなことも書かれていますし、ESDはじゃあ誰がやるんですかということに対しては、このESD実施計画でほぼ尽くされていると思うんですけど、こんなたくさんの中の学校、教育委員会もその中の1つだよというふうに書かれています。

ちょっと字が小さいんですけど、こんなことも書かれています。学校、教育委員会、幼稚園から大学まで、教育活動の全体を通じて、発達段階に応じてESDをやしましょう。それから、常に生きる力を通してやっている活動は、もうESDの取り組みともほとんど同じですよ。その中で社会的問題を取り上げたり、体験活動を行うことにより、学ぶ側の意欲が向上することが期待されます。

さらに、総合的な学習を効果的に使うのもいいんじゃないですか。

それから、教科横断的な教育活動も、総合的な学習時間で効果的につなぎ合わせて、知の統合化を実践することが可能になります。

ESDの実践に当たって、学校全体の運営の中でESDを位置づけるには、これまでのカリキュラムや教育内容をESDの視点でとらえ直して、ESDカレンダーみたいなものですね。

とらえ直して再構築することが考えられます。

また、総合的な取り組みであるESDは、地域と連携するなど、外部の人材や機会を有効に活用することにより、教職員に過度の負担を強いることなく、質の高い教育を実践することも可能になります。とあります。

こういうのは、本当はおもしろいのは、先生とか教育委員会とか国の人とかみんな、学者さんとかみんな、本当にこれがどういう意味を持っているのかって語り合えたら、すごくおもしろいと思うんですよ。

例えば最後のほうに、外部の人と連携したら、教職員は余りつらいこともなく、いいことをできますよと書いてあるんですけど、外部の人と連携するってめちゃくちゃ時間と手間とかかりませんか。だから、そういうことは、やはり書かれていることと現実というのを見比べながら、じゃあどうすることが本当にいいのかというのが、本当にいろんな人たちのかかわりの中で話し合っていくことそのものがESDではないかなと思います。

この実施計画の中では、具体的にはこんなやつたらどうですかということが書かれていません。

それから最後に注目すべきは、教育委員会などの教育関連部局においては、ESDの所見を取り入れた各種研修会の開催、参加促進、ESD、ユネスコスクールの担当窓口云々と、教育現場へのESDの浸透を図ります。井村さん、あれですかね、「図ります。」の主語は何なんですかね。国ですか。

○井村 隆（文部科学省国際統括官補佐） 教育委員会。

○柴尾智子（ACCU（ユネスコアジア文化センター）） 教育委員会だそうです。なので、各教育委員会はこういうことをすることに国内実施計画ではなっています。

ほかにもいろんな主体が何をしたらいいんじゃないですかということがここに書かれていますので、ESD実施計画というふうに検索すると、これの全文がビュッと出てきますので、ご関心のある方はどうぞご覧になってください。

これ、中教審は先ほど出ましたね、新学習指導要領。このあたりはちょっと余りほかの資料に載ってないかもしれないので、ちょっと早口ですが言います。

ESDの特徴として書かれているもの、これはユネスコが定めた国際実施計画であり、国連総会で承認を受けたものです。このような幾つかのポイントで、ESDが説明されています。

ただ、もっとおもしろいのは、これにまとまる前のドラフト文書なんですね。ドラフト文書のほうが、私たちみたいな者が読んでいたら、より人間的というか、よりわかりやすいというか、より具体的というか、そんな感じがしますが、だんだんやはりユネスコも巨大な環境組織であり、多くの国が関与しているので、そぎ落としたり、いろんなことを配慮するうちに、ちょっとかための文章で最後はまとまっているんですけど、ESDはとにかく学際的でホリスティック、特別な科目じゃなくて全部のカリキュラムでやっていくんですよということとか、その価値が大切だという。そのときにその価値を、明確にしてなきゃいけないんじゃないですか。その明確にできなかったら、つまりESDでどんなもの、Sustainable Developmentってどんなことだかわからないままに、ESDやりましょうと言われても、みんな混乱したりするので、まず明確にしましょう。その上で、明確にしたら、してこそ、それが本当にそうなのとか、そのためにどうしたらいいのとか、じゃあ実際にどうしたらいいんだとか、そんなことの議論ができるようになるので、明確にすることが重要、それがそのESDの価値を支えますと

ということが書かれています。

次も、クリティカルシンキングという、代替思考力って日本語で訳される、さっきの国内実施計画にも出てきますけど、それは何のために必要なのかとか問題解決能力。ESDに伴うジレンマや困難に対処できる自信につながるようにはっきり書かれていて、ジレンマや困難というのは、英語ではdilemma、challengesと書かれていましたけど、もっと平たい日本語で言ったら、持続可能な開発とか言っているけど、こちらを立てればこちらが立たず、もう世の中矛盾だらけ。声の大きい人、お金のたくさんある人、いっぱいまじっている中でESDって考えるときには、もうジレンマと困難の連続だったと思うんですよ。そういうことがもうそこにあるから、それに対して自分が対処できるよって自信を持つがあるようにするために、クリティカルシンキングとか問題解決能力というのが必要なんじゃないですかという、ちょっと解説がわかりやすいなと思うんです。

それからほかにも、ドラフトなんですけど、演劇とか言葉とかディベートとか、岡山ではESDの劇団とか、ESDの映画とか、いろんなものができていて、すごくいいと思うんですけども、まさしくこういうことですね。

それと大切なこと、知識を伝達する教え方というのも、ちょっとESDには向きませんってはっきり書かれていて、教師と学習者が共同して知識を獲得し、どこかに知識があるんじゃないで、その一緒に知識を獲得して、そして教師と学習者自身の教育機関の環境を形づくっていく役割を果たせるような方法論、これじゃないとESDじゃないんじゃないですかということ、このドラフト文書でははっきり書かれていたのが、最終文書のほうでちょっともやもやとしてしまうんですけど。

それから、この参加型の意味決定の仕組みについても重要で、学習者自身がどうやって学ぶのかというような決定に参加するということが重要だとされています。これも今では、大学の一部ですとか、岡山大学でも学生が提案して、こんなことをこんな講座がやりたいということができるようになるように伺っているんですけど、そういうのはすごくESD的かな。

それから、地域に根差す。難しい言葉で語らない。外来語で語らないで、いろんな言葉や言語によって表現が違って来るから、地域に根差したESDの表現方法。地域課題と地球規模の課題については、そのような言葉を使いましょうねと書かれていて、それぞれの言語も新しい概念も表現する創造的なものを持っているとあります。

で、見てみました。いろんな言語で、そのESDを何と呼んでいるか。これは中国語、最初のやつですけど、本当は簡体字で持続発展教育と書きます。スーチア・パーティエン・チャウユーとか、そんな感じの中国語。

韓国語はハングルでこんな感じで、シソカヌーン・パルチョン・キョウヨク、持続発展教育です。

日本語は不思議なことに2つ公式な訳がありまして、もっとあるのかな。持続可能な開発のための教育、持続可能な発展のための教育、略称持続発展教育、この下の段は日本ユネスコ国内委員会が勧められているものなんですけど、開発と発展とどう違うのとか、そもそも開発、発展って何か、いろんな議論がもちろんあると思うんです。

フランス語も、これもあれですね、持続可能な開発みたいな文字の意味ですよ。

スペイン語も、ほぼ同じ。

アラビア語は、ちょっと何て書いてあるのか、ここにエエという言葉があることしかわから

ないです。

マレー語、これはE S Dって先進国だけでやっても全然意味がないんで、途上国でも、どんな人でもE S Dに入っていたかないと、地球の将来を語れないということで、私たち、この間補助金をいただいて調査をしたのがあるんですけど、学校に全然行けなかった大人の方たち、少数言語の人たちなんですよ。その人たちが、文字は書けないけど、豊富な民話があるので、その民話を文字を習って本にしましょうというプロジェクト、すごいすてきなプロジェクトがあって、それが3年たったら学校教育の現場で使われているという話があったので、それを調べに行ったんですけど、そこで聞いた話です。英語に訳するとマレー語でも継続するディベロップメントのための教育と呼んでいるけど、少数言語のほうではこんなふうです。長いこと書いてあったんで、何と書いて書いているんですかと言ったら、あなたが、人がディベロップし成長することが続けられるように、現在持っているもの、持っているって、環境とかも含めて持っているものを持ち続けることができるように、あなたが学ぶことがあなたの血と肉の、体と血の一部になるような教育と訳していました。

でも、長いけど、何か感じがすごくわかる気がして、山奥の電気のない村でしたけれども、そういう言葉でE S Dを理解しているのかというのは、とても感動的な形で私たちは受けとめました。

これは、ACC Uが皆さんに今日お配りいただいた冊子の中で使った「E S Dとは」というところの文章です。

こういうかたい形の政府のE S D実施計画等の言葉もあるんですけど、かみ砕いて言えば結局どうということなのというのを考えていくこと、そのものがE S Dだなというふうに、ますます思います。

これは、ドラフトの中で最終文書では消えてしまったんですけど、こんな重要なことも指摘されているんですね。サスティナビリティとは世界を考える方法にも関連しており、私の訳なので、もっといい訳がつけていただけるように英文もつけておきました。世界や個人の実践の形式に関係している。その実践とは以下につながるものである。道徳的でエンパワーメントされた個人、その人たちが人格的に充足している。逆に言うと、反道徳的なエンパワーメントされてない人がE S Dを語るというのは、ちょっと矛盾しているんじゃないかとか、協働による関与と関与公平を期そうとするコミュニティー、その逆がまたどうなんだろう。それから、生物多様性と生命を維持する、これもすみません、生態学の学は間違っていますけど、その生態。生態はこっちが合っているのか、配付資料が間違っています。のプロセスを尊重し、持続させるための環境的实践。この3つがないと、サスティナビリティに関係しないんじゃないかという問題の指摘が、ここではなされています。

もう一つ重要な、最初に申し上げた希望に関連するところなんですけど、じゃあ教育はそのE S D、持続可能な開発、発展ってどんな役割を果たすのか。ここに書かれているメッセージは、すごくここ、力強いと思うんですね。読むことはしませんけれども、すごく力強い、教育がそういう未来志向型の思考をつくって、それをつくっていくんだという、その教育の持つてくる力をとてもポジティブに表現しているところかと思えます。

それから、ここには先生方がとても多くいらっしゃるんで、「学習・秘められた宝」という本を読まれた方も多いのではないかと思います。これは生涯学習のあり方をもとにして、日本からは天城勲先生という方が参加をされて、21世紀の教育について語った、そのユネスコへ

の報告書、ドローール報告書と言われてはいますが、そこでは学習の4つの柱ということが言われていて、learning to know, learning to do, learning to live together, learning to be 知ること、為すこと、共に生きること、人間として生きること、こういうのを学ぶのが、そして生涯にわたって学び続けることが学習ですねということ、とても美しい文章で表現をされている報告書ですけども、ESDの始まりのときに我々が、より多くの場で、4つ目だけでなく5つ目の柱が必要だよね、ESDはということで、learning to transform、学習というのはそこにある知識をとってくるんじゃなくて、変えていくようなことを学ぶこと、これが5つ目の柱にあるような形がESDじゃないだろうかという議論が随分なされていました。変革することというのは、逆に言うと変革すべきことではないことを守るために何かをする。つまり逆の意味もあり、これは1つ傾聴に値するかと思います。

いろいろ申し上げてきましたけども、そんな大層なことって本当にできるのかとか、質の高い教育とかなんか言っているけど、今までの教育とどう違うのかとか、持続可能ってそもそも何をどう持続させるのよとか、もやもやしていらっしゃる方は多くないですかね。私ももやもやよくします。もやもやしていると思うので、もやもやして帰っていただかなくても今日はちょっとはもやもやが晴れるといいなと思っていて、まずそんなことができるのかについては、この後、鈴木さんが金沢、北陸の例を中心に話されますけど、いっぱいすてきなことがたくさん起こっていて、それは日本だけではなくてほかの地域でも起こっていて、大層なことって考えるから考えは大変だけど、学校だけがやらなきゃいけないものでもないし、今、小学校だけでやらなきゃいけないものでもありません。生涯やるわけですし、今だけじゃなくて未来もやっていかないと持続可能性がそこで閉ざされてしまうので、それはできる、できる。そうじゃなかったら、そんな24校が309校にESDをやろうと思ってユネスコスクールになってないということで、できると思います。

今までの教育とどう違うのか。これはいろんな答えがあると思うんですけど、やはり教育にはそれぞれの時代にそれぞれの課題が付きまわっていて、ずっともっと昔、日本が貧しい時代には、今のそのマレーシアのボルネオ島の人たちと同じように、学校へ行くことそのものが大きな課題だったと思うんですね。そうやけど、私が小さかった頃には、もう未来ってキラキラしてて、すごい無限の可能性として、学校の先生に教えてもらっててもう未来の図と、月面基地とか海底基地とか、そんなんばかりかいていましたけど、1970年代を過ぎた頃から、やはり地球の将来というのが限界があるというふうなことが、子どもさんたちにも認識されてきたような気がするし、やはり各国がこれだけ発展して、こんだけやばいことがたくさんたくさんあるということが、科学が学術、教育の普及によってこんだけ進化したことによってわかる事実がわかってしまった私たちという中では、やはりこれまで学校とかで教えていた教育とは違う課題として、その持続可能性が浮かび上がってくるというのは当然なので、学習指導要領にも教育基本振興計画にも書かれていると思うんですよ。だから、どう違うのかといたら、教育の質の部分では共通すると思うけど、やはりそこは違う。すごく現代的なことがESDだと思います。

そもそも何を持続させるのか。これは、写真を見て考えたいなと。すみません、その前にこんな図があります。いろんなところがESDとか、ESDを絵で説明しようと思って、いろんな図をつくって、皆さんに一番にすっきりくるのはどんな感じでしょうか。

これは、先ほどの、昔のですね。

ESD-Jですね。これはすごくおもしろくて、アジアのノーベル賞と言われるマグサイサイ賞を受賞されたラオスの教育者の図です。実はGNPというのが、屋根のところに入ってある図とセットになっています。持続可能な発展のモデル。GNPが屋根の上に乗っかっていると、環境、文化、体、心、精神、経済がグシャッとつぶされるとなっている図に対応して、幸福ということを中心にグロス・ナショナル・ハピネスの考え方であったら環境、文化、体、精神、心、経済が健全に保たれて、そしてそれを支えているのが教育ですよ。その教育の成果であり、その支えるものは責任のある個人主義です。そしてそれは、優れた統治ということに基づいていますというふうな説明があって、ACCUの「未来へのまなざし」という本にも、この基調講演、全部収録されていますけど、すごく彼が今も続けている実践を見てもすばらしい実践で、ラオスは統計的には最貧国に位置づけられていますけど、そこで行われている教育実践は、すごく学ぶことが多いと思います。もう彼に言わせると大学生では遅い、もっと小さいときからやらなきゃいけないということ言うんですけど、ここでまたおもしろいことをおっしゃっていて、このグッドガバナンスのところ、結局我々が、私たちが教育からすぐれた産物、成果物というのは何かというと、政治システムを運営するすぐれた人材を生み出しているかどうかというのがチェックポイントですよとおっしゃっていて、昨今の日本の状況を見るにつけ、ひょっとしたら今の政治システムにいる人たちの一部が受けていた教育と学びは、余りESDとしてちょっと足りなかったのかもしれない。かもしれないとしたら、今私たちが進めようとしているESDが生み出していく人材の中で、将来政治システムにかかわる、いろんなレベルの政治システムにかかわる人たちが、ちょっと違う人たちになっているのかなとか、そんなことを考えさせられるおもしろい人だと思います。

これは、今日お配りした冊子に載っている、みんなが支える、子どもたちの中で一つになっていく持続可能な未来への希望のイメージのESDです。

これは、岡山大学の大学院生が言われていることで、この真ん中のQがある課題としたら、私の図が下手くそなんですけど、三角錐のそれぞれの面が環境、経済、社会、文化になっていて、その1つの課題はどこから見るかによっていろんな見方ができるし、そのいろんな見方を統合して、その課題を何とか解決していくのがESDじゃないですかとおっしゃって、とてもすてきだなと思いました。

最後のほうに、ちょっとこれを考えてみたいと思います。

持続可能な何とか、持続不可能な何とか、その何を持続していくのがいいのか悪いのかどうなのかというときに、その〇〇というところにいろんな言葉を入れてみたらどうかと思うんですよ。それで、やってみました。

持続可能な地球とかということも、時々聞きますけど、地球はほうっておいても、あと53億年ほど平気なんじゃないでしたっけ。太陽がビュッと膨張して地球を飲み込む53億年ぐらい後まで、地球としてはあり続けるはずだと言われています。今まで46億年、これから半分以上ほど残っているのが、今の科学が言っている地球の物としての存在ですよ。その中の300万年、46億年分の300万年とかいうのは、地球の歴史と人類としての歴史、いろんな説がありますが、そんなような365日といたら、もう本当に大みそかの11時何十分になってやっと人間が誕生したと、よく言われるやつですけど、そうだから持続可能な地球というのは、地球そのものは持続するであろうと、あと53億年。では、持続可能な、結婚生活だったらどうなのかと。これも私が言っているわけではなくて、さっきのリオのときのアジェ

ンダ21の教育を書いたジョンズ・ホプキンスさんが説明したんです、これで。「最近どうですか、あなたの結婚生活。」「いや、何とか持続可能にやっています。」と答える人はいないでしょう。それは最低レベルですよ。だから、持続可能というのは、そんな別に大層なことじゃなくて、もう最低レベルなんです。何とかやっていくということなんですと、彼が結婚生活ということのを例に挙げられたんですけど、それからしてみたら、その持続可能であるって結構かつかつな状況を何とかそのまま持っていこうということなのかなと思えるんですよ。

じゃあ、持続可能じゃないといたらどうなのか。社会はどうなんですかね、これ。ただ、人間が活着ている限りは、社会ってあり続けるはずだし、恐らく。ニホンザルでも社会ってあるんだそうなので、ではどんな社会なのか、どんな社会が持続可能にしていこうかとするのか、どんな社会になったら持続不可能だと思うのかということが、やはり大切である。あと、もし環境をすごい守ろうと思ったら、もう軍隊を備えた地球政府があつて、個人の権利なんかほうつといて、もうそれを守らせたなら生態系は守られるかもしれないけど、そういうのは私たちが言っているESDではなく、それは環境オーケーかもしれないけど、社会とか文化とか、それがグチャグチャと。そういう意味で我々が守りたいのは何なのかということ、例えば日常の風景とか光景について考えてみたらどうなのかな。

これ、この間岡山大学の大学院生とやってちょっとしたワークショップをしたんですけど、今日はすごくはしょって見てみましょう、写真。私たちがこういうことを考えようと思つて、アジア・太平洋ESDフォトメッセージコンテストをやったときの写真を見ていただきます。これは、優勝作じゃありません。見ると、地層も安定しているし、この風景が持続可能で、新たにどんなことを要するのかなという、どうなんでしょうか。まあ余り変わらないけど、ひょつとして地球変動で降水量が増えたりしたら、緑になるかもしれないけど、まあこのようなものとするけれども、それほど変わらない形で、恐らく100年前もあつたんであろう景色です。

ところが、人間社会が関与してくると、全く違う要素が必要になります。

これはミャンマーのお正月ですけど、このような平和である、これがその伝統衣装とか、動物とか、こういうお祭りというものを守るためには何が必要なのか。

こういうマレーシアエアラインのマークになっている大きなたこですけど、これが、この写真が、あと10年後、20年後にも撮れるために、今職人の芸が残っていなきやいけないし、たこを上げる人もいなきやいけないし、このような風景はもうなくなるかもしれない、あるかもしれない。何を守っていくのか。

中国にもフィリピンにも日本にもある棚田です。すばらしい。

これは中国の南のほうのイ族という部族のもんですけど、少数民族のイ族の方が伝統の衣装を着て歩いていらっしやるところです。このような水田耕作の景色が、何をして守っていくのか、守っていかななくていいのか、守っていきたいのか。でも、今私たちが見るものだったら、すばらしく美しい景色に見えることは間違いありません。

これはインドネシアのもんですけど、普通に見ると幸せそうなおじいちゃん笑顔と孫の笑顔がいいわね、なんて終わりそうな写真なんですけど、メッセージを読むと、今水牛なんかを飼っている農家はどんどん減っていて、随分もう農業は機械化されている。一方子どもたちについても、子どもたちの時間はテレビとコンピューターゲームで食われていっていると。だから、こういう時間というのは過去のものになりつつありますという幸せな時間のメッセー

ジがついています。

だから、ライフスタイルが変われば、このような風景も景色も、それから水田の豊作の状況が変われば、このような景色もすぐなくなる景色です。

モンゴルの少数民族であるカザフ族の例ですけれども、これはカザフ族が鶯を使って小動物を捕まえてたんぱく源にします。これは少数民族が生き続けているかどうか、彼らの文化が守られているかどうか。あるいは、そもそも小動物が住めないような状況になったらどうなのか。あるいは、消費生活が変わって、近くにスーパーマーケットが進出してきて、その肉を売るようになったらどうなのか。こういうのはもうパッとなくなって、鶯祭という、恐らく観光用に残るものだけが残っていくのではないのでしょうか。

カンボジアでは、ポルポト時代に多くの文化の弾圧と虐殺が行われて、伝統のたこ揚げも衰弱というかなくなっていたのを、ある人が復興して、今こういうたこ揚げが行われています。また内戦が起これば、こういう景色ももう写真に撮ることもできなくなるかもしれません。

では翻って、日本でよく見るお祭り、節分ですね。豆まきを受け取ろうとしている人たち。私たちが大切にしている風俗、習慣、これも一つの自然の摂理や自然の恵みを感謝するところから来ているもの、こういったお祭り、それを支えている経済やコミュニティーや文化、こういったものが持続可能であるのかどうか。私たちはこれを残したいのか。ほうっておくと残るのか。こういったことをいろいろ考えながら、E S D、持続可能性について考えていくのがE S Dかなというふうに思っています。

ユネスコスクールの加盟のメリットについては、先ほどもお話がありましたし、これから鈴木さんも実例をもってお話をされると思います。

今回、1月には韓国のE S Dに関心のある先生30人が岡山市にお邪魔して、皆さんと交流する機会があるということをお願いしているわけなんですけれども、とても楽しみです。今、おひとかた、岡山の先生が韓国にご出張とうかがっています。このようなサポートがいろいろあると。研修機会もあります。

今日お配りした冊子や、そこに書かれていることということを少しご紹介、最後に我々が事務局のお手伝いをさせていただいたりする中で、どんなことがきっかけになってユネスコスクールになったんですかというふうなことを聞いていくと、いろんなものがあるんですけど、こういうふうにもまとめることができるかなと。学校も持続発展のため、高校が統合します。なくなりそうです。何か特徴のある教育をしたいです。だからユネスコスクールになって云々、こういうことがありました。教育委員会の意向というケースももちろんあります。でも、教育委員会によっては、地域の持続可能性を考えて、ここでもユネスコスクールの重要性を認知して守り立てている自治体がたくさんあります。

子どもたちを変えたい。これは先ほどの冒頭に紹介した例なんかもその一つかと思います。自らの実践を相対化した上で再評価したい。強化したい。自らの実践を正当化したい。昨日のある先生がおっしゃっていました。ユネスコスクールに転校すれば、今私がやりたいことが続けられるからいいんですね。だからこう先生によっては、ユネスコスクールであることで、ご自身が大切に思っている実践が継続できる、あるいは自分がいなくなっても、もとい学校に残る。こういったことのために、ユネスコスクールに関心を持たれる方も多いというふうに感じます。

これは、もうお配りした中にあることなので、後で読んでいただきたいんですけど、これは

千葉県の子立の小学校で、小規模校で閉鎖性があると思っていたけど、そこでユネスコスクールになったことで、グローバルスタンダードが意識できて、より明確になったよ、やっていることの意味がということをおっしゃっています。

また、これは中京地域の国立大学の附属の高校の先生ですけども、教員全体がユネスコスクールのロゴ入りの名刺を持ってネットワークを進めていますとか、これは昨日金沢で聞いたことです。最初は右も左もわかりませんでした。でも、やってみると楽しいとおっしゃって、ぼやとしていた総合的な学習の時間の目的もはっきりしました。生徒が変わる様子がしてもよくわかります。保護者も協力的でうれしいですとか、今日はほかのユネスコスクールから本当に多くのアイデアを得ました。このワクワク感を土日、今日と明日ですけど、忘れることなく、月曜日にまず校長と教務主任に、本校で実施したいさまざまなアイデアを伝えたいとありました。

そのアイデアの一つに、今日皆さんにお配りした漫画のESD読本、これを保護者全員に配付する。1冊100円なんで、何とかかなと思いますというふうに、富山の先生なんですけど、おっしゃっていました。

それから最後のほうは、これは金沢市の校長会の会長さんと先生なんですけれども、学校が利益があるとか、地域に利益があるじゃなくて、お互いが利益になることで、ユネスコスクールとESDを継続させたいなということが大切だなということもおっしゃっていました。もっとももっとたくさん、いいお言葉をいただいています。

こういったことも、公式ウェブサイト、英語、日本語でありますけれども、ここにいろんな情報が載っています。今はニュージーランドに震災復興の会議をやるから、どなたか参加しませんかという、その公募が載っています。

先ほど申し上げた私の仮説である、このようなものなんですけれども、どのように皆さん、お考えでしょうか。是非ご批判をいただいて、今後もおつき合いをいただければと思っています。

少し時間が延びましたが、ご清聴ありがとうございました。（拍手）

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

柴尾先生、どうもありがとうございました。

5. 講演3「北陸におけるユネスコスクールへの取組み」

鈴木克徳（金沢大学・環境保全センター）

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

それでは3人目の講師は、鈴木克徳先生です。先生は、現在は金沢大学の環境保全センターの教授としてお勤めでございますが、その前には国連大学の高等研究所で、ESDの10年の計画策定にも参画されながら、ESDの地域での推進、そして大学でのESDの推進を呼びかけられていらっしゃいました。そして今は、金沢で北陸地域でのユネスコスクールの拡大の先頭に立っていらっしゃいます。

では鈴木先生、お願いいたします。

○鈴木克徳（金沢大学・環境保全センター）

ご紹介にあずかりました金沢大学の鈴木です。もともと環境省の役人というものをやっていて、環境関係からこういった持続可能性とかいったことを30年ぐらいやってきました。

10年前から、このESDというのにかかわって、お話があったヨハネスブルグサミットという2002年のサミットのときに、日本が提唱して、国連に持続可能な開発のための教育の10年というものを始めようじゃないかと。あの当時、小泉さんが総理大臣で、彼は国づくりは人づくりという考え方で、やはり人づくりだよなといったことを受けて、その後、私は国連大学へ行って、ユネスコと一緒にずっと、じゃあ世界でESDをどう進めたらいいのかなというような話をしている、5年間ほど国連ですべてそういうことをやったんですけども、その後、金沢大学に移って、北陸ですべて犬馬的な形でESDって何かなって、どうやって学校でESDを進めていけるかなといったような話をしています。



大分井村さんの話、柴尾さんの話と重なる部分があるので、そこら辺はどんどん飛ばしていきたいと思うんですけども、基本的に何で今ESDをやらなくちゃいけないのというような話は、まず学校現場どこからでも出てきます。大体ESDなんか聞いたこともないという中で、じゃあ一体何かなという、結局やはり今の社会、一言で言うと今の社会は、やはりみんなが安全で安心して快適に暮らしていけるような社会じゃなくなっているんじゃないかと。不安感がやはりある。何かやはり今の社会、心配だなと。それは、私は環境をやったから環境でいうと、地球温暖化の話とか、いろいろ生物多様性が入っている、化学物質の汚染があると。

もっと身近な話をすると、やはり身近な社会で、私は今石川県にいて、能登半島ってありますけど。あそこではどんどん過疎高齢化が進んでいる。大体今皆さん、60代だから、あと10年たつと70代半ば、車の運転なんか心配になってくるよね。医療・福祉みたいなものがどんどん崩壊している。あるいは、子どもが自然とか社会に対する無関心を見ていて、何かしなくちゃいけないんじゃないかという、それとなく危機感みたいなものがあって、じゃあ一体

どうしたらいいんだろうかというのが、やはりその一番のきっかけなんだろうと。このあたりは、まあ地球温暖化の影響がいろいろありますよとか、お隣の中国で森林が枯れてますよとか、黄砂とかとてもいろんな問題がありますから、このあたりはちょっと略して、一言でこれを言うと、例えば今私たちが、岡山で暮らしているわけですから、皆さんがこれと同じような暮らしを続けていけるかということ、世界中の人が、今67億と言われているような世界中の人たちが、岡山と同じような生活を送ろうと思ったら、地球は3つぐらい必要と。世界で一番ぜいたくと言われているあのアメリカみたいな生活を送ろうと思ったら、地球は5つぐらい必要と。

そういった中で、この生活を続けていいのか。今日後に明日はある。でも、30年後、50年後、今の例えば小学生たちが社会を担うような時期になったときに、このままの状態が続くと安閑として考えていいのかということ、それはあり得ないよね。そこら辺の危機感をベースに物を考えなきゃいけないだろうと。

これは、東大の名誉教授の安井至さんという方が案をつくったやつですけども、いわゆる20世紀型の文明観というのは右肩上がり、大量生産、大量消費、大量廃棄といったことを前提とした社会の中で、ある意味、非常に私たちの生活水準というのは上がってきた。でも、いつまでこれを続けられるかということ、それは無理ですよ。21世紀型の文明観というのは、やはり人口にしても資源の使い方にしても、どこかでピークを打ってなだらかに減らすと。

じゃあ、世界の人口が今およそ70億。90億になり120億になり150億になって支えていけるかと。絶対それは無理。だから、やはり価値観を変えて、21世紀型のもう少し、例えば今タイは、足るに知る経済というようなことを言っているし、そもそもインドでガンジーは、もう今から80年前、ヨーロッパ型の文明というのをインドで展開することはできないのね。もっと自分たちの暮らしというものを、もっと満足することを知るような暮らしを考えなきゃいけないよねというようなことを言っているわけですけども、文明観そのものを変えていくことが必要なんだろうと。

これは一つの例ですけども、これは京都市でごみと言って全部捨てられていたものの袋をあけてみたらこんなものがありましたと。およそスーパーに並んでいるような物がみんなあります。何かということ、賞味期限切れになったということで、今、日本のごみって、500万トン、600万トン、年間に出ていると言われてはいますが、そのうちの約4割が食わずに捨てているごみ、こんなものになっているわけです。そいつを京都大学の名誉教授の高月先生という方が、金に換算したらおよそ11兆円、日本の農林水産業の生産高が12兆円と言われてはいますから、ほとんどそれに匹敵するぐらいのものが、実は無駄に捨てられていると、そんな状況にあるわけです。

日本は食料自給率40%と、何とかしなくちゃいけないと言いながら、実に11兆円に相当するようなものを全く無駄に捨てている。私たちが自分たちのライフスタイルを見直すだけで、そういったものを変えていくことができるんだと、何かできることはあるんじゃないかなということ、やはりみんな考えていく必要があるんじゃないだろうかと。

このあたりは略しますが、そういった日本の提案があって、国連持続可能な開発のための教育の10年と。

そもそもESDは何かというのは、先ほどからお話がある国内実施計画というものの中に、丁寧に詳しく書いてあります。どういう価値観を身につけるべきかとか、どういう能力をつけ

なくちゃいけないとか、実に丁寧に書いてある。なかなか読むと大変です。

私、国連にいたときに、ユネスコと一緒に。じゃあESDの本質って何かしらということを手簡単に整理するとどうかしらということ整理したのがこれです。

1つは、やはりまず今の子どもたちって、身近な自分の身の回りの自然とか、社会とか、文化とかに関心を持たなくなっている。そういった身の回りの自然とか社会についてしっかり関心を持てるようになる。これは認識能力といったわけですけども、そういうことが重要だろうと。そして、そういった自分の身の回りの社会、あるいはそこから広がってくる世界とのつながりとか、そういったものを見ていくことによって、持続可能な社会とは一体何かしらということを考えて、自分たちの価値観とかライフスタイルを見直せるような力を身につける。

いわゆるクリティカル・シンキング、ちょっと先ほど柴尾さん、若干違った訳し方、代替的思考能力と言ったけど、私らは批判的な思考能力の育成と。教えられることをただ覚えるんじゃないなくて、自分たちで何かを見つけ、自分たちで何かを考えていくような力を身につけることが重要だろうと。そして、学ぶだけじゃなくて、頭でっかち、知ってますよと言う人はいっぱいいるんだけど、実際行動に移せるような実践力を身につけると。この3つがESDの本質であるというような整理をしてみました。

そうすると、この3つを考えてみるとわかるのは、別にESDって環境じゃないよね。要するに教育の本質そのものなんだよと。そこで文部科学省は学習指導要領を改訂し、特にESDの学習というのは生きる力を身につけることそのものだと。100年間日本が教育年、教育の理念ですと言っていたことと、ほとんど変わらないんだろうと。これは今まで井村さんも柴尾さんも出しているアイテムですけども、学校現場でよく言われるのは、こういった何たら教育というのが実にあって、それに付加する形で国際理解です、環境教育です、これに加わるような形でESD教育というものがあるのかと。そうすると、随分やはり学校現場での負担感というのはある。また新しく何か1つやらなくちゃいけないのかというような負担感があると。

でも、実はそうじゃないんですよ。ESDというのは、そういったいろんなものをやる時、何でこんなことまで守らなくちゃいけないのということを学ぶための、言ってみれば考え方であると。だから、国際理解教育に1つESD教育というのが加わるんじゃないなくて、こういったいろんなものが一体何のために学ばれるのか。お互いにどういうつながりがあるのかということ、先生が、そして子どもたちが意識することがESDなんだと。

例えば、今とても忙しいから、何とか教育って、皆さんほとんど環境教育ですと言われると身の回りの、例えば河川の水質はどうでしょうかとか、平和教育と言われると広島云々と。

でも、環境教育と平和教育って、実はとても非常につながりがある。端的にユネスコじゃないですけども、戦争は最大の環境破壊と言われていると。じゃあお互いにかかわっているんだよね。こういったものをそれぞれ学ぶということは、結局みんなが安全で安心して公正に暮らしていけるような社会をつくるための力を身につける。そのためにはこういうものも知らないといけないよね。自分たちで考えていかなきゃいけないよね。お互いにとてもいろんなつながりがあると、余りにも今の学校って忙しいから、ぶつ切りになっているんじゃないだろうか。もっとお互いの関係性みたいなものを、つながりというものを見ていけるようになるといいのね。これがESDのもう一つの側面じゃないかなというふうに思っています。

それで、文科省が中心になって、ユネスコスクールというシステムを使って一生懸命頑張っていきたいと思いますという話をしたわけですが、とても立派な通知を都道府県知事が教育委員会に

出されたんですけれども、現場は全く知らなかった。これが出た後、私はいろんな学校とか市町村の教育委員会に行っても、こんな通知があると、えっ、全然知りませんというような状況だったです。

でも、やはりこれが出たことによって、実は文科省、先ほど柴尾さんからお話がありましたが、そこにも置いてありますけども、文科省のパンフレットで、ESDを一生懸命進めましょうというような話をしていく中で、随分とこの3年間でこのESDという話とか、ユネスコスクールという言葉が、言葉として少なくとも学校では伝わっていったんじゃないだろうかなと思います。

北陸では、ちょうど私が金沢大学に勤めるようになったのが平成19年9月と。もう文部科学省が学習指導要領を改訂して、ESD的な物の考え方を入れるということもはっきりわかった。じゃあ、まず学校現場は誰もESDなんて聞いたことはないという状況の中で、ESDみたいな話、あるいはユネスコスクールみたいなことを、まず学校の先生方を中心として勉強しましょうということで始めたのがこれです。

地球環境基金というところのお金をもらってきて、まず学校の先生を中心としてのESDの勉強会を北陸でやりましょうと。最初は金沢で、その後は、金沢だけでもなかなか人が集まらない。福井とか富山の人が来てくれないんで、金沢、それから富山で、福井で、それぞれの県でESDに関する勉強会をやったり、それぞれの地域の学校がやっているような実践事例を発表してもらったりしました。

それが、これ平成20年度の報告書、平成21年度、平成22年度と北陸の事例というものをいろいろと整理している。そこに、一番向こうの端っこにこれらの報告書が置いてあります。大分まだ余分があるものもあるんで、もしご関心があればお伝えをいただければお渡しすることができます。

また、もう少し一般の人にも知ってもらいたいということで、ESDに関するシンポジウムをそれぞれのところでやりました。

これは今年の1月に金沢でやったもの、こちらは富山でやったものと、それぞれテーマは少しずつ違うけれども、やはり一般の人に対してのものとかやっています。

それから、先ほどお話があった日本ユネスコパートナーシップ事業、文部科学省のお金をいただいて、北陸における事例集というものを毎年つくってきています。

これも若干部数に余分がありますので、もしご関心があれば、私自身はこれが北陸の3つの小学校の事例というものを詳しくまとめたものですがけれども、ある意味、どんなことをやっているのかなというのを見る上では、非常におもしろいものになっているんじゃないかなというふうに思っていますので、ご関心があれば申し出ていただければお渡しすることができるんじゃないかなと思います。

ここが残ったポイントですけども、北陸で3年間やってきて、ユネスコスクール、3年前ゼロでした。今は35校に増えて、今およそ20校弱申請を出してくれているんで、あと1年ぐらいで50ぐらいに、50以上には増えるだろうと思っています。

そういった実践をしてきた結果として何がポイントかなというものを、少し整理してみたものです。

1つは、やはりユネスコスクールで、これは北陸方式と言えるかもしれないけど、何が違いか、何を違いとして出すかという、従来の環境教育でも国際教育でも理解教育でもすばらし

い教育ってあちこちにいっぱいあったんですけど、人が替わるとなくなってしまう。そんな中で、このユネスコスクールというシステムを使って、組織としての学校全体によるというものを進めていくことができるんだらうと。必ず皆さんにお願いしているのが、学校教育目標の中で位置づけをしてもらうこと。

E S Dというのは、ある学年のある教科で教えられるものではない。その学校を卒業するときに、どんな力を持った子どもが、どういう物の考え方をする子どもが卒業していくのかということだらうと思っています。そのためには、学校教育目標の中で明確に位置づけることがすごく重要なんだらう。1つのしっかりしたチームをつくる必要がある。

それから、一部の教員のイニシアチブから全教員へのE S D化へと広めていくことが必要。これを最初にやったユネスコスクールは、すごく伸びています。やっていないところは、なかなかやはり足踏みをしているということがあります。

それから、新たにE S Dを始めるのではなくて、今あるカリキュラムを見直してみる。何かやはり新しいことをやろうとすると、やはりすごい負担感、抵抗感が出てくるけど、E S Dというのは、決してそういうものではない。今皆さんが、岡山の小学校、中学校、どこでもE S Dをやっていないところは、私はないと思っています。今やっているものをもう一度見直してみるというのがE S Dであって、何か新しい何とか教育というものをもう一度どこかから持ってくるというものでは決してないということです。そして、E S Dの観点からの既存の学習指導計画の見直しをしていきましょう。

E S Dカレンダーについては、後ほどちょっと話をします。

それに絡めて、総合的な学習の時間と教科とのつながりを見直していく。今度は逆に、E S Dって総合的な学習の時間だけでやればいいんですよというふうに思っている人も中には出てくるんだけど、特に総合的な学習の時間が短くなっていく中で、それだけではやはりもうやっていけない。もう少しよく考えなきゃいけないということが出てきていると思います。

それから、皆さんから既に、先のお二方からお話があったように、E S Dというものの原点、ベースは、やはりまず地域。自分の身の回りの地域というものをベースとしたカリキュラムづくりというのが出発点になるんです。そして、そういう地域に密着していくということは、必然的に地域にいるさまざまな関係者とも交流、連携の機会というものをつくっていく。またそれが広がっていくことによって、学校に対しての評価が変わってくるといった話があります。

それでE S D導入のプロセスというものをいろいろ分析してみた結果、この第2段階、教師全員によるE S Dの認識の共有というものがすごく重要で、北陸で初めてユネスコスクールになった富山市の中央小学校の場合には、4カ月の期間というものをかけてこれを行っています。中央小学校の場合には、まずユネスコスクールの申請を出すときに、ユネスコスクールとかE S Dとか知っていたのは、校長先生と教頭先生と教務主任、この3人しかいなかった。この3人で申請書を書いたんだけど、それでは進まないということで、あと4カ月の期間をかけて、私も何回か行ってお話をさせてもらったり、皆さんのやっていることはE S Dそのものですよというような話をさせてもらいましたけれども、そこである程度皆さんの認識が共有されるということが、その次のステップに向かっての非常に大きな話になるんです。

それから、学校のいわゆる校務体制と、経営体制とE S Dと。大体どこの学校も、やはりE S DをやるためのE S D総括とかE S D主任とか、そういうものを置きます。それが校内研修

とか課題研究みたいなものの研修体制と別個につくったところは非常にやはり苦勞する。セットで、中央小学校の場合には、校内研修の担当の教務主任の先生の下にというか、一緒に働くような形でE S Dを位置づけているということで、ほかの校内の研修体制全体の中で位置づけられるようなことができてきている。

これも中央小学校の例ですけれども、E S Dカレンダーというものについてですが、どこの学校でもどの学年でも、いわゆる年間学習指導計画というものをつくっていると。E S Dカレンダーというのは、もともとは東京の東雲小学校の手島さんなんかが中心になって発案したものですけれども、この皆さんがつくっておられる年間学習計画の中に、これは中央小学校の例ですけれども、E S D的な視点がどこにあるのかなというものを探し出してきて、それに色を塗ると。中央小学校の場合には、自然、人、地球という、そういった3つの切り口で、緑、黄色、青といったもので色を塗っていったわけですが、その結果、こんなものができたということで、決して総合的な学習の時間だけじゃなくて、いろんな教科の中で実は自分たちが、E S D的なことをすごくやっているんだというものを認識してもらうためには、非常にこれは役に立つものではないだろうかというふうに思っています。

北陸では、できるだけ多くの学校で、まずE S Dカレンダーをつくってもらおうという話をしています。それによって、E S Dというものが何か全然自分たちがやっていることと別個のものではなくて、実は自分たちがやっていることの中に既にE S D的なものが非常にいっぱいあるんだということをご認識いただくことができるだろうと。と同時に、総合的な学習の時間と教科学習の中で、一体どうそれらがかかわっているのかということが見え始めるという意味で、非常に大きな効果があるのだらうと思います。

他方、これは奈良教大の附属中学が書いているものですが、決してE S Dは総合的な学習の時間と教科学習と、この2つだけで達成されるということではなくて、いろんなそのほかの生徒会活動とか、学校活動そのものの全体の中でE S Dというものは進めていけるような要素があるんだよねということを、これは示しているものです。

何のためにE S Dをやるかという、やはり子どもの変容にこそ一番のメリットを感じているだろうと。子どもが変わると。実際にユネスコスクールになったところの中で、子ども自身の学校に対する意識とか、それから何よりも子どもたちが生き生きと楽しそうに勉強するようになったという。これがやはり一番の先生にとってのE S Dを一生懸命頑張っていこうというドライビングフォースになっているだろうと思います。

また、学校自体の変化。いろんな地域の人とか保護者とのつながりが深まっていくにつれて、保護者や地域の人たちの学校に対する信頼がアップをしている。

ただ、そういった子どもたちが変わるということがE S Dの最大の目的にはなっているわけですが、そのためにはまず先生が変わらないと、子どもたちだけ変わってくれというわけにはいかない。先生自身がこのE S Dというものをどう認識しているかということが、すごく重要なんだろう。

また、E S Dの非常に大きなポイントというのは、子どもたちによる発信というものを、どう子どもたちが自分の思いを受けとめて、それを伝えていけるかということが重要なんだろうと。いろんな発信の方法があります。

私、今非常に気に入っているのは、1つの学校の中でもほかの学年に対して、1つ下の学年とか、そういったものに対して、子どもたちの言葉でいろいろ話してもらう。そういう発表を

してもらふことによって、彼ら自身の認識の深まりができると同時に、次の学年の子どもたちが、ある意味ワクワク感、期待感というものを持ってやっていくこともできるんじゃないだろうか。これは随所に出ていますけれども、やはり今まで小・中・高・大、学校教育、みんなバラバラにやってきたんじゃないか。しっかりつけ加えたのが幼稚園ということで、今最新のものは、文科省のものにも幼稚園というのが加わっているはずですがけれども、これは学校教育、社会教育というものがやはり全くバラバラになっている。でも、もしこれらがお互いに情報、経験というものを共有することができて、新しい連携、協働のための機会というものをつくっていけると非常にすばらしくなるだろうな。これが岡山がやっているRCEの基本的な考え方ということで、北陸でもそういったものがつくれないかなということを考えています。

これは、ESDと生きる力、ここはずっと長く一緒にやってきた、前にお話をした東京の東雲小学校でESDカレンダーを考案した手島利夫先生という校長先生が、今学校を移って、同じ江東区の八名川小学校の校長先生になっているんですけれども、彼が熱い思いということで語ったものです。ESDというのは、やはり学校教育における最重要課題になっているんじゃないかなんていうことを書いてあるんで、後で見てください。

それで、全教育活動を通じてESDに取り組むことが重要とか、生活科、総合的な学習の時間というものをやはり大切に使ってほしいとか。このESDカレンダーを彼が考え出したわけですがけれども、このESDカレンダーには根本的な欠陥というものが、ある意味、あると言えばあるんです。これをつくることによって、最初にESDとは何かしらといった、自分たちとESDとのかかわり合いということについての認識を持つことができます。ただ、これだけでは年間を通じて、じゃあ子どもたちにどういう力をどういう方法で学ばせたいのかというストーリーづくりというものができないと。それは総合的な学習の時間を中心としながら、総合的な学習の時間ではなかなか時間が十分じゃないというような話も出てきているんで、ほかの、例えばコミュニケーション能力をつけるというのは国語でもっとやっておけば、いろんなものが教科の中で取り込んでいけば、その総合的な仕上げという形で総合的な学習の時間というものをもっとうまく使えるようになってくるだろうという話があります。

カレンダーをつくることによって、ある種、導入時では非常にいいことがあるけれども、指導計画としてはいろんな不十分な部分があります。それを補うためにこういった年間学習計画みたいなものを組み合わせて、このカレンダーと、それからこういったより詳細な指導計画というものを1つの紙の中に書き込むことによって、今まで持っていたESDカレンダーの欠陥というものを補うことができるんじゃないかなということ、皆さんにお配りした紙の一番最後のページに、それが入っています。

これでも結構時間を食ってしまいましたが、とりあえずこれで私の話を終わらせていただきたいと思います。どうもご清聴ありがとうございました。（拍手）

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

鈴木先生、ありがとうございました。

6. 学校の取り組み事例紹介

(1) 福山市立駅家西小学校

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

これまで3人の先生方から、今ESD、ユネスコスクール、どういう現状で、これからどういう取り組みが求められているのか、そのためにどういったことが必要なのかということを学んでまいりました。

この後は、具体的なユネスコスクールでの取り組み事例の報告をしていただき、それを踏まえて、今日ご参会の先生方から、うちの学校ではこういう取り組みもやっているんだけど、その中でこういう困ったこと、ちょっと相談したいことがあるんだと、そういったことも、短い時間ではありますが、意見交換の中で出していただければというふうに思っておりますので、よろしくお願いいたします。

では、本日は2つの学校から事例を紹介していただくということで、まず最初に小学校の事例ということで、広島県福山市立駅家西小学校の取り組みの事例の紹介をよろしくお願いいたします。

○村上克行（福山市立駅家西小学校）

皆さん、こんにちは。福山市立駅家西小学校教務主任の村上でございます。

本日は、このような発表の場を与えていただき、大変感謝いたします。どうぞよろしくお願いいたします。何分前半の3名の方の先生のように慣れてないので、ちょっと原稿を読むような形での発表になるかとは思いますが、お聞き苦しい点もあるかと思いますが、うちの学校の実践を聞いてください。よろしくお願いいたします。

3月11日の東日本大震災により、たくさんの方が亡くられました。心よりご冥福を祈らせていただきます。

この震災以来、私たちの価値観が大きく変わろうとしています。この日本という国には、今も昔と変わらないきれいな山、川、海があり、流れる水は多くの動植物の命を育み、我々人間に恵みをもたらし、太陽の光を浴び、再び山に帰っていく。この大自然の循環システムを考えた場合、これ以上の科学はないでしょう。そこには古代から続いてきた人々の生活が厳然と保たれ、先人の知恵が生かされ、受け継がれてきたことがあるということも間違いはないでしょう。

これからもこの地球が持続可能でさらに発展していくために、人間は自然とどう向き合い、どう共存していくかを考えずにはられません。今生きている私たちがどう生きるか、未来の人々たちに大きな影響を与えることにつながります。

今日はそんな思いを持ちながら、平成21年度から平成22年度の実践を中心に、お話をさせていただきます。



駅家西小学校では学校目標を「確かな学力と豊かな感性に培い、仲間とともにやりぬく子どもの育成」と掲げ、知・徳・体のバランスのとれた児童の育成を目指しています。

平成23年1月に、ユネスコスクールの加盟校となり、岡山大学大学院教育学研究科の川田力先生を初め多くの関係者の方々のお力もいただきながら、さらなるESD実践を推進しているところです。

まず、ESDに取り組むきっかけとなった児童実態です。広島県基礎基本定着状況調査での児童アンケートなどから、次の2点の実態が見られました。

1点目は、自分に自信が持てないという自己肯定感の低い児童が見られ、人間関係を築きにくく、厳しいことから逃避しようとする傾向があるということです。

2点目は、人や自然との触れ合い体験の希薄さ、学ぶ意欲、生きる意欲感の喪失が見られることです。これは、テレビや電子ゲームなどに没頭する生活の影響であるとも考えます。

このことから、多様な人とともに希望ある未来の構築に向け、人とつながりながら主体的に活動できる人間を育成することは、本校の喫緊の課題であるととらえました。

そのようなとき、岡山大学大学院教育学研究科住野好久先生に、ESDについて教わりました。ありがとうございました。そして、この児童実態克服のため、平成20年度よりESDの取り組みがスタートしました。

幸い本校は、環境教育について、それまで数年間取り組んできており、このことを生かして研究主題を次のように設定しました。

「自立と共生を目指し、豊かな感性を身につける子どもの育成」です。研究仮説をESDの視点に立ち、誰が取り組んでも持続する教育課程の工夫改善を進め、将来世代に必要な力を身につけさせることにより、将来社会を創造する人間を育成できると設定しました。

我が国におけるESDの10年の中では、ESDを一人一人が世界の人々や将来世代、また環境との関係性の中で生きていることを認識し、行動を改革するための力を育む教育と位置づけています。

子ども一人一人に、持続可能な社会づくりに参画する力と、さまざまな問題に対して主体的にかかわり解決する力を、本校教育の中で、いつ、どこで、どのように育んでいこうとしたのかという道のりを紹介します。

本校では、ESDは持続可能な社会づくりのための担い手づくりであるとし、以下3つのことを育み身につけさせることととらえました。そのために、教育課程の見直しをし、これまでそれぞれの教科領域の中で取り組まれていたものを、ESDの視点でつなぎ、つないだものを指導者が目に見え共有できるものをつくる必要があると考えました。それが本校のESD関連カレンダーです。後ほど詳しく説明いたします。

これは、駅西型ESDアプローチ構想図です。ESDの観点に立った学習指導を進める上での留意事項として、各学年、衣食住の暮らしの原点に立ち返り、目的意識を持った自然体験、社会体験、生産活動などの活動による自分と学びのつながり、ESD関連カレンダーを活用した単元と教科領域による内容と内容のつながり、学校と家庭、地域のつながりを意識した自分と他者とのつながりという3つのつながりを大事にした生活学力を身につける実践をすることです。

具体的実践の重点ポイントとして、6つのことを課題に挙げ、取り組みました。今日は、その中から取り上げた3つの実践についてお話しさせていただきます。

1つ目は、E S D関連カレンダーの作成です。

今まで学年と教科等の2つの座標によって教育課程をとらえていたものを、新たにE S Dの領域という座標を設けることによって、教育課程の内容を3次元にイメージしてみました。

縦に教科領域と、横にE S Dの3領域、上に学年を積み上げました。宙に浮いているボックスを見ると、各学年の単元名や活動名が見えます。番号付きの線、画面では青い、水色の線ですが、この線は、どの単元や活動の学習がつながっているのかをあらわしたものです。

この3次元モデルをもとに、学年ごとに時間の流れで書きあらわした表がE S Dカレンダーです。つながりの番号に対応して、つながりの理由を文章化しました。E S Dの基本的考えに立つならば、この領域を越えるつながりと、その理由が重要であると考えます。なぜなら、E S D実践を学級、学年、教科、領域を越えて、学校全体の教育活動の中で、いつ、誰が授業者となっても展開することができるからです。つまり持続可能な教育ということです。これが本校のE S D関連カレンダーの特徴です。

子どもの学びが内面で1つにつながることは、子どもたちの学ぶ意味を深め、価値観や自分の生き方を見つめられる場ができることになります。

5年生は、1学期には道徳「ひとふみ十年」という教材で、自然の偉大さや生命のとうとさに気づき、国語科説明文「サクラソウとトラマルハナバチ」では、生き物はみんなつながり合っているという学習をし、理科「植物の発芽と成長」では、環境と植物は密接にかかわり合っていることを考える学習をしてきました。また社会科では、国民の主食である米づくりの現状を知り、農業においても環境を保全しようとするさまざまな取り組みがあり、環境問題はみんなですぐに解決していかなければならない問題という認識を持たせる学習をしてきました。

こうした教材での学習と、中心テーマとして設定している総合的な学習の時間の単元、「今、地球があぶない」の学習をつなぎながら学習を深めていきました。

このように、E S Dカレンダーを活用し、教科、領域などのつながりの理由やつきたい力を指導者間で共有し、授業と授業をつなぎながら進めていく授業が駅西型E S Dの授業です。

このE S D関連カレンダーをつくることにより指導者は、どの単元や活動とどの学習がどのようにつながっているのか明確にすることができ、授業を進める上で有効な資料となりました。

なお、3次元モデルの構想指導は、岡山大学大学院教育学研究科の藤井浩樹先生にご指導いただきました。

2つ目は、E S D関連カレンダーを活用した学習展開づくりです。

まず、問題との出会いの場面の工夫です。この問題はそのままほうっておけない、何とかしたい、なぜだろう、どうなっているのだろう、どうしたら解決できるだろうという問題解決へのモチベーションを高める工夫として、バックキャストの考えを取り入れ、意欲的に課題設定ができるようにすることです。

次に、E S D関連カレンダーを意識した見通しのある指導計画を立て、児童に明確な目的意識を持たせた学習をすることです。

その次に、互いの問題解決活動を認め合い、高め合うような考えを練り上げる場面設定をすることです。

最後に、自分たちの思いや考えを主張し、実現できる場面を設定することです。そこには未来を創造していこうとする視点が必ずあることが大事です。

この課題意識、課題設定、課題追求、相互交流、実践と行動という問題解決の学習システムを、児童と一緒に作り上げていくことが大切と考えています。

3つ目は、ESDでつきたい力を学年別に整理したことです。

自立心、思考力、判断力、表現力、責任意識の育成を目標にし、各領域や教科、総合的な学習の時間等を学校教育全体を通してESDを意識して指導してきました。

具体的な学習展開例として、平成21年度と平成22年度の5年生、「今、地球があぶない」と6年生の「ふるさと駅家町」の授業についてお話をさせていただきます。

5年生は、1学期から地球温暖化について学習してきましたが、児童は、本当にCO₂が増えると気温は高くなるのだろうかという疑問を持ちました。そこで、実際に実験をし、確かめてみることにしました。実験結果から、CO₂を多く含んでいる空気のほうが温度が下がりにくいことがわかりました。そして、CO₂を多く排出しているものの1つに車があることもわかってきました。

また、地域に実際に出かけ、地球温暖化を感じますか、どんなことで感じていますかというアンケート調査も行いました。その結果、ほとんどの人が地球温暖化を感じ、何とかしたいんだという気持ちを持っておられることがわかってきました。

この学習を、地球温暖化の現状を自分たちの身近な問題ととらえ、自分にできる取り組みを考えるという目標を設定し、授業を行いました。

授業の導入である問題把握、課題設定場面では、つながりの理由やつきたい力を意識した逆向き思考、つまりバックキャストを取り入れ、みんなが大きくなったとき、どんな地球に住んでいたいですか、理想の地球を思い描いてみようという発問から授業を始めました。この発問により、私たちにできることを何かしてみたいなという意欲が高まり、具体的な解決策が見えてきました。

自力解決の場面では、具体的にできることを附せん紙に書き、自分にできること、学校のみんな、家の人や地域の人に呼びかけることに分けて模造紙に張っていきました。集団解決の場面では、この取り組みを進めるための具体的な方法を出し合い、これからの実践行動の見通しを立てていきました。話し合いの結果、子どもたちはCO₂削減の方法として、ちょっと頑張ればできること、頑張ってもできないこと、広く地域に知らせ協力してもらおうとよいことに分けていきました。

そこで、ちょっと難しいことにも挑戦しようと、次のことに取り組みました。

CO₂の排出が多いものの1つに車があること、そこに注目した子どもたちは、より多くの人にCO₂削減の実践をしてもらおう方法として、朝夕の自家用車の利用をできるだけ控えてもらうのはどうだろうか。通勤方法として、家の近くのバス停から乗れるバス利用を呼びかけることで、自家用車利用が減り、多くのCO₂削減ができるのではないかと考えました。

しかし、現実の問題としては、家からバス停が近いのにバス利用が少ないのはなぜだろう、どんなバスなら乗ってもらえるのだろうか、実際にバス停まで出かけ、実態を調べ、まとめていきました。

平成21年度は課題追求をし、まとめた結果を福山で行われた全国バスサミットで呼びかけました。こんなアイデアバスをつかってほしい。こんなバス停やバスなら、乗る人が増えますというバス利用を増やすよさについて調べた資料を提出しながら伝えていきました。

平成22年度は、1人の100歩より100人の1歩を地球を救うという考えのもと、福山

バス祭りや学区で行われた古墳フェスタの会場で、温暖化ストップと自家用車利用を控えてもらうことを、参加してくださった方へ直接呼びかけるという実践行動ができました。

6年生は、「ふるさと駅家町古墳フェスタ」に向け、地域に合う国指定史跡二子塚古墳について調べ、福山の人たちに埋蔵文化財の存在意義を発信するという活動を進めました。この古墳フェスタは、地域の駅家西学区まちづくり推進委員会の人たちと一緒に進める駅家地域のよさを広くもっと知ってもらおうというお祭りの企画です。

6年生は古墳フェスタに向けて、学区まちづくり推進委員の人たちと一緒に古墳の周りの清掃をしたり、見学コースの道づくりなどをしたりする活動から始めました。広く福山の人たちに二子塚古墳の説明をするために活用するリーフレットづくりを、国語科単元「ガイドブックをつくろう」の学習とつなげてしていきました。

大型古墳のイメージを自分たちも体感するため、古墳の周りに5、6年生、古墳の入り口に当たるところには2年生に参加してもらい、原寸大で運動場に描くことができました。体感したことをリーフレットにも入れ、大きさの説明をすることとしました。リーフレット作成については、福山市文化課職員の方の指導も受け、古墳内の構造や出土した土器などについて調べ、まとめることができました。

この活動は、児童が地域を知り、地域を思いやる人間にする活動として新聞にも取り上げていただきました。

また5年生は、推進委員の方たちの支援をいただきながら、古代米の苗づくり、田植え、稲刈りをし、古墳フェスタ参加者に食べていただいたり配付したりして、古代より続く歴史を体感してもらいました。

あわせて、先ほどの実践にもありましたが、地球温暖化防止に向け、車の運転をできるだけ減らしてもらおうという、ふだんの生活の見直しを呼びかける実践もすることができました。

古墳フェスタ当日は2,000人以上の参加者があり、成功裏に終わることができました。

このような一連の活動がつながっていき、1月の参観日には保護者の方や地域の方と自主防災活動、自主防災訓練を一緒にすることができました。未曾有の出来事にも地域のみながつながり、問題解決できるという見通しの持てる活動となりました。

E S Dの評価についてお話をします。

E S Dでつきたい力がついたかどうかを見取るために、学習前につきたい力をもとにして評価基準を設定しておきます。単元の学習後や単位時間の学習後、活動の終わり、それぞれに児童の活動の様子、意見文、作文、ノートなどをもとに、児童の変容を評価基準に照らして見取っていきました。

最後になりましたが、研究の成果と課題を挙げます。

児童の学力の変容ですが、E S Dの研究初年度と通過率の比較をすると、3年目は算数科は7.6ポイント、国語科は21.9ポイント上回りました。これは、テーマとなる学習科の出会いの場面の工夫により、児童自身が疑問を持ち、課題を見つけ、追求していこうとする関心意欲が、ほかの教科においても継続するようになったためと考えます。

また、指導者の意識の変容ですが、3年目の教諭、今まで環境を意識したり地球規模で未来から今を考えたりすることがなかったので、初め授業の難しさを感じた。しかし、E S Dで育てたい力を明確にすることで、より総合の時間の学習が実りあるものになることを理解できた。

2年目の教諭は、〇〇先生の授業実践が印象に残った。総合の時間に学習してきた伝え合うということの大切さを追究する授業であった。伝え合うことは持続可能な社会のために必要なこと、大切なことを子どもと一緒に考えていくことがE S Dなのだという感想を書いています。

学習したことをさまざまな場において、保護者、地域、市内外に学習成果を発表することで、環境教育を含めたE S Dの理解が広まり、地域ぐるみの協力体制ができたことは大きな成果です。

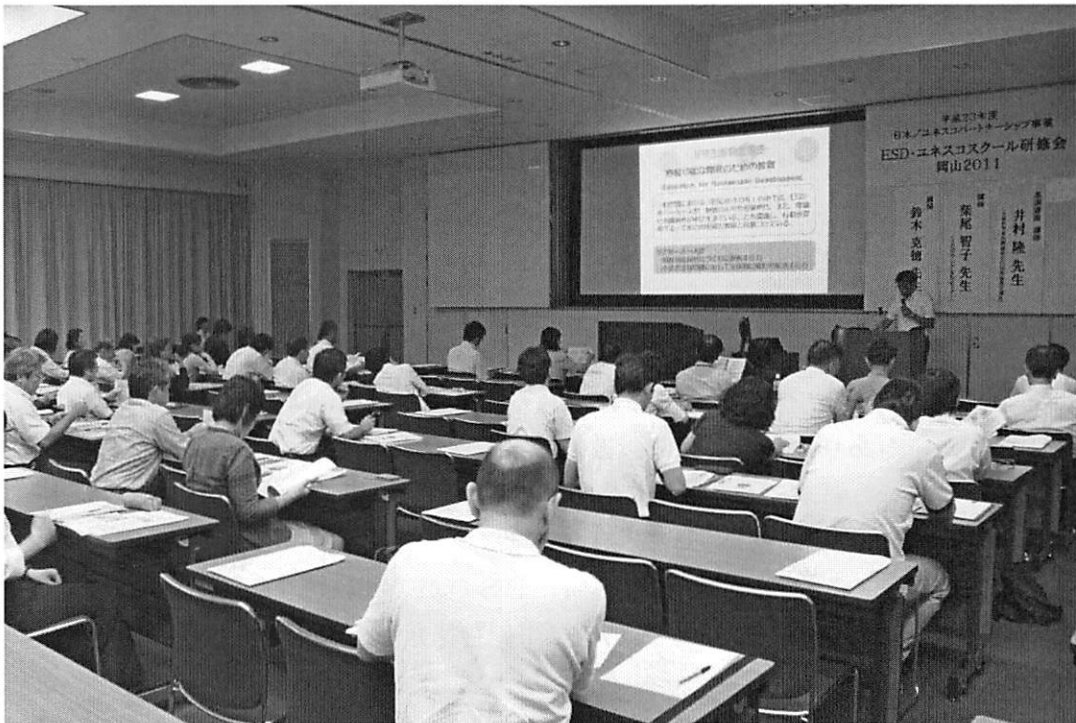
今年度への課題として、新学習指導要領を熟読し、学年間のつながりを整理したカリキュラムの作成をすること、E S Dについての力を総合的に見取れる評価方法の研究を進めるなどが挙げられます。

以上、遅々たる歩みではありますが、今後も全教科、領域などをつなぐE S D実践研究を積み重ねていきたいと考えています。

ご清聴ありがとうございました。（拍手）

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

広島県福山市立駅家西小学校の村上先生でした。ありがとうございました。



(2) 岡山県立岡山一宮高等学校

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

それでは引き続きまして、岡山県立岡山一宮高校の実践の事例を鎌田先生にご報告いただきたいと思います。それじゃあ、よろしくお願いします。

○鎌田理加（岡山県立岡山一宮高等学校）

皆さん、こんにちは。

私は、岡山一宮高校でユネスコスクールの担当をしております鎌田と申します。どうぞよろしくお願いします。

それではまず、一宮高校なんですけれども、実は最初にお断りと言ったらあれなんですけれども、ユネスコスクールに加盟をして、まだ1年ぐらいです。1年とちょっとですので、まだまだ手探りの状態でやっているというような状態です。

今日は、一宮高校でどういったことを取り組んできたのかということ、もう活動事例をバアッとご紹介させていただけたらと思いますので、是非皆様方のほうで、これはこうしたほうがいいんじゃないかというようなご指摘をいただけたらありがたいなと思っております。

ではまず一宮高校なんですけれども、一宮高校はスーパーサイエンスハイスクールでもありまして、グローバルに活躍し国際貢献できる科学者、技術者、それから人材を育成しようということを目指の1つに掲げております。

特に身の回りのさまざまな問題に対して主体的に考え行動する力、それから問題を解決する力というものを育てるような教育活動を心がけてきました。

そして、ユネスコスクールとしての取り組みになるんですけれども、ESDというのは先ほど先生方のお話からもありましたように、教育や学習、学び全体に対して、その基本理念としてあるものであるという認識で取り組んでおります。ですので、この総合的な学習の時間だけというわけではなくて、各教科の中でESDを理念に教科指導を行ってくださいというような形でやっておりますが、本日はその中でも、特にESDが一番わかりやすいかなとこちらで考えている環境教育と国際理解教育についての活動事例を紹介していきたいと思っております。

まず環境教育についてなんですけど、取り組みが2つあります。1つ目は課題研究です。2つ目が蒜山の夏季宿泊研修ということになります。

課題研究は、本校は理数科と普通科がありますので、理数科だけでやっているのではと思われるかもしれませんが、これは普通科の生徒も全員でやっているものです。

では、まず課題研究からなんですけれども、いきなり2年生になって、じゃあ課題研究してみなさいと言われても、まずできません。それは絶対無理だと思うので、1年次から科学技術コミュニケーションと科学技術リテラシーというような授業を設けております。本当はこの



説明だけで多分10分20分しゃべれそうな気はするんですけども、今日は時間がないので割愛させていただきますが、どういったことをするのかといいますと、いろんな研究をしていく上でまず一番大事なのは、しっかり自分で考える力、それからそれを人に伝える力、それからまた情報を収集する力、分析する力、論理的にものをしゃべる力、そういったものが必要であると思いますので、そういったことを1年次に週に2時間かけて行います。それを踏まえた上で、2年次、3年次と課題研究に取り組みます。

本校の生徒は、ほとんどが大学進学しますので、大学での学術研究の基礎になればというようなものもあります。そして、将来的には受験だけが勉強ではなくて、将来、長きにわたって主体的に学んでいってほしい、地域や国際社会に貢献できる人材になっていってほしいというようなことから、こういったちょっとスーパーサイエンス校ならではの、学校設定教科の学術基礎というものを設定して取り組んでおります。

課題研究のテーマなんですが、普通科の文系から理数科まで、もうテーマはさまざまです。360人の生徒が4~5人のチームをつくって研究をしますので、本当にいろいろあるんですけども、中にこういう自然とのかかわりを意識した環境問題に通じるテーマを設定しております。「太陽エネルギーの発電効率の研究」「キッチンキトサンの応用」「生分解性プラスチックの研究」「色素増感太陽電池の研究」「樹木の葉のアレロパシー」といったようなものの研究をしております。中には学会等にも参加をして、アレロパシーの研究は、日本科学技術振興機構の理事長賞をこのたびこの8月に受賞するなど、割合一生懸命研究に取り組んでおります。

2番目ですけども、そういった研究の礎というか基礎を身につけるために、理数科の1年生限定にはなるんですが、蒜山で夏季宿泊研修というのをやっております。活動内容はここに挙げたようなものなんですが、大阪大学の先生、それから岡山理科大学の先生にもわざわざお越しいただきまして、フィールドワークと、それから夜には講義をしていただくようなことをしてきます。その様子がこちらの写真です。神庭の滝のニホンザルの行動をじっと座って、ニホンザルの動きに注目しながら、一生懸命メモをとっている様子とか、これは蒜山高原、昔ああたりは湖だったんですが、そういう地史を勉強してみたり、珪藻土の地層を観察しているような図です。

それから、蒜山のあたりを流れている川の水質調査をしたり、観察をしたりというようなことがあります。

そして、せっかく、ああ、そうだったんだって学びで終わるのではなくて、学んだことをきちっと相手に伝えるところまで訓練をさせます。

理数科の1年生は、このとき初めて論理的に物をしゃべるという練習をするんですが、こういったポスターをつくりまして、ほかの生徒、それから先生方に対してプレゼンテーションを行うという練習をします。

続きまして2点目、国際理解教育についての取り組みをご紹介します。

まず取り組み1なんですが、JICA中国との連携、取り組み2、海外からの訪問団の受け入れ、取り組み3、韓国スタディーツアー、4、サイエンスイングリッシュキャンプ、こういったものやっております。

まず1つ目、もうこれは皆さん、よくご存じだと思います。JICA中国さんと連携をさせていただきまして、年に2回ほど国際理解シンポジウムをやったり、JICA中国を訪問した

りしております。

それから取り組みの2なのですが、海外からの訪問団が岡山に来られるときにも、積極的に手を挙げてうちに来てくださいということでやっております。昨年は台湾の高校生が46名来ていただきました。今年度は、10月に中国から22名、12月には韓国から30名程度の高校生が来てくださいます。

3番目です。韓国スタディーツアーというものを、実は今年スーパーサイエンス校の中でも中核となるコア・スーパーサイエンス校というものに指定されまして、その関係から海外の学校、高校や大学と連携をしながら研究をしようという取り組みをやっております。その1つが韓国スタディーツアーなのですが、目的は主に4つありまして、海外においても自分の意見をきちっと論理的に述べるというような力を育成したい。

2番目は、ちょっとスーパーサイエンスなんですけれども、韓国の、世界のリーディングカンパニーになったサムスン電子本社ほか、そういったところで最先端の科学技術について学習をさせたい。

それから3番目、やはりこれが一番大事だと思うんですけれども、人と人とのつながりですね。将来グローバルに活躍していく人材になるために、簡単に言えば友達をつくる、人と人とのつながりをしっかりつくってってもらいたい。それが3つ目の目的です。

それから4つ目は、異文化、韓国はやはり全然文化も違う国ですので、異文化理解を深めて、異文化に対する受容性を高めるといったようなものが4つ目の目的でした。

研修内容、本当に今月の1日から4日にかけて行ってきたんですけれども、このような内容でプログラムを実施してまいりました。

そのときの様子がこれです。まず、企業研究所訪問です。最先端の科学技術で、ああすごいな、こんなハイテク家電があるんだというだけではなくて、そういったIT技術が、例えば電力の消費を抑えて環境への負荷をなるべく減らすためにいろいろ工夫されているんだというようなことも気づかせてもらえる研修でした。

2日目は、慶南と書いてギョンナムと読むんですが、慶南科学高校というところに行きまして、ふだんは日本語でつくってきた課題研究を英語に直しまして、英語でプレゼンテーションをしてきました。

これは、最初生徒はものすごくびびりまして、とても大変だった。最初は不安でいっぱいだったんですが、もう一生懸命練習をして、堂々とこんなふうにプレゼンテーションをしながら、韓国の高校生も英語で質問をしてくれて、コミュニケーションをとることができました。

また、やはり文化交流もしましょうということで、歌、韓国語で、皆さん東方神起とかご存じですか。最近K-POPがはやりなんですけれども、東方神起の歌をみんなで覚えて、それを合唱して、ここのステージで披露したりとか、それから相手方のほうもサムールノリという伝統の楽器演奏をしてくださったりとか、そういうような交流をしてまいりました。

それから3日目は、晋州教育大学というところを訪問しまして、そちらの大学の先生からいろいろな講義をしていただきました。

晋州市というところに行っていたんですけれども、これは豊臣秀吉が朝鮮出兵で攻めてきたところで、韓国と日本の戦争の歴史についても、韓国の先生から少し教えていただくということもありました。

こういった韓国との恒常的な交流というのを今後も、本当にこの12月、今度は慶南科学高

校の高校生が30名ほど本校に来てくださる予定になっておりまして、今年度末には、また本校の生徒と、それからこれは本校だけでなく、県内の理数系高校にもお声をかけさせていただきまして、8月でしたら清心女子高校と総社高校さんと倉敷天城高校さんからも生徒が一緒に8名ほど加わってくださって、みんなで研修にいったんですね。3月も同じような形で行けたらいいと考えております。

取り組みの4です。サイエンスイングリッシュキャンプというのを実施しております。国際理解と言われるとちょっとどうかなというところもあるんですけども、やはり国際社会でしっかりコミュニケーションをとるためには、語学力が絶対に必要だということで、これは全校生徒を対象にしたキャンプを行いました。

サイエンスコミュニケーションのほか、英語でポスターをつくって発表をするといったような訓練などをして、コミュニケーション能力の育成を図るというのをやりました。

続いて3点目なんですけど、環境とも国際理解も、両方の要素があるものが、ちょっと分け切れなかったので、3番目ということで出させていただきました。

2つあります。フィリピン研修と、それからシンガポール方面への修学旅行ということです。

まず1点目、フィリピン研修なんですけど、これも開発途上国におけるエネルギー問題、それから環境問題、それから社会問題、そういったことをしっかり学んで、グローバルに、特に開発問題に対して何か国際貢献できるような人材になってもらえたらということで、このフィリピン研修をしばらく実施してきています。

内容は、同じく7月31日から8月5日までで行って来ました。内容としては、フィリピンの新エネルギー施設を視察させていただきました。風力発電や地熱発電所、それからバイオ燃料を積極的につくっている会社を訪問したり、それからJICA事務所を訪問したりしました。

また、トンド地区、皆さんご存じかと思いますが、マニラ郊外にありますトンド地区を訪問しまして、ごみ山がもう閉鎖されているんですけど、その閉鎖されたごみ山で生活している人たちにも会って、いろいろな話を生徒は聞いてきました。劣悪な環境で、やはりショックを受けることも多かったようですが、この写真にあるように、本当に子どもたちは無邪気で温かく受け入れてくれたのがすごく印象に残っているということでした。

それから、JICA事務所、マニラにありますけど、こちらを訪問して、フィリピンでの援助の状況等を学習しました。訪問したときはちょうど雨季だったんですけども、雨が降ると、もうこの写真のように、道路に水がすぐあふれてきてしまって危険な状態になっていると。その関係で登下校が危険なので、学校もしょっちゅう休校になり、十分な教育を受けられないというような現状を目の当たりにしてきたようです。

また、現地の学生との交流、2校訪れまして、自然エネルギーや最近やはり日本の原発事故についての話等をしてきました。

続いては、修学旅行なんです。えっ、修学旅行がと思われるかもしれないんですけど、一宮高校ではシンガポール方面への修学旅行をしておりまして、その中でこのような5つの、ちょっとESDを意識したような研修内容を入れております。特に環境についてということで、これはよくあるんですけど、マングローブの観察、それからニューウォーターといって、これは水の再生工場と言われているそうなんですけれども、下水から飲料水をつくることをしているそう

です。そのプロセスや技術等を学習してきました。

もう一つは、エアログリーンとって、植物を空中で栽培する。土壌が十分になくても植物が育てられるのではということ、この写真なんですけれども、こういう実験場を見学してきました。

国際理解という観点からいいますと、シンガポールの日系企業を訪問させていただきました。でもシンガポールは本当にいろいろな国籍の人がいらっやいます。そこで多国籍な人とともに働く難しさとか、それから逆の楽しさなど、貴重なお話を聞くことができました。

これはブラザー&シスタープログラムということで、こちら側の写真なんです、各グループに1人ずつ現地の大学生に入っただいて、いろいろな話をして交流をしました。

一宮高校は、本当にポスターをよくつくるんですけれども、修学旅行で自分たちが学んだことをきちっと文字にして、相手にわかるように説明できるようにして発表をしております。

またこれはおまけなんですけれども、地域貢献ということで、一宮高校の近くにある中山中学校とか中山小学校と連携をしまして、小学生に理科の授業をちょっとやってみたり、自然を観察するのをちょっとお手伝いしてみたりといったようなことをやっております。

というわけで、まとめになります、一宮高校のESDということで、特に、もちろん教育活動全体にESDの理念はあります。ありますが、メインというか、よくテーマとして考えているのが環境教育、サイエンスを軸に、持続可能な社会を構築するための知識や教養を身につける。

もう一つは、国際理解教育ということで、将来国際社会へ広く活躍して貢献できる人材になってもらいたい。そのために必要な態度と教養を身につけるといった、この2つのことを柱に活動を、今後ともやっていきたいと思っます。

活動の紹介ばかりですみません。まとまったものがなかつたんですけれども、以上で終わります。ご清聴ありがとうございました。（拍手）

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

岡山一宮高等学校の鎌田先生、どうもありがとうございました。

7. 意見交換

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

それでは、本日は3人の先生方から、E S D・ユネスコスクールにつきましてのご講演をいただき、その後、小学校と高等学校の実践事例の紹介をしていただきました。

残された時間で、皆様方からうちはこういう取り組みをしているんだということであったり、こういうところにちょっと困っているんだけどといったご意見などをいただければというふうに思っております。

最初に口火をとということで、京山学区のほうでもE S D推進を中心になってやっていただけている池田さんからお話をいただこうと思いますので、お願いいたします。

○池田満之（岡山市京山地区E S D推進協議会）

京山地区E S D推進協議会の池田です。今日のご苦労さまです。

最初に、本当にいろんな皆さん方の発表を聞いていて、何かすごく進んできているなと思って、私はどちらかというと、今日も京山中学校の先生方も来られているんですけども、学校教育と、それから社会教育、公民館を時々使っているんですけども、社会教育と、それから地域コミュニティーというものが、やはり一体となって取り組むことが大事かなと思っています。それは、E S Dというのが持続可能な社会をつくるという、持続可能な開発のための教育、これは持続可能な社会をつくることを目的とした教育ですから、そのためには、社会をつくるためにやはり学校と地域とコミュニティーが社会教育と一緒になるべきだと思っています。



その中で10年近く京山地区でやらせてもらって、最初のうちは地域の課題とかを一緒に見つけて、それに取り組むということをやっていたんですけども、今最近では、やはりその先の段階になってくると、持続可能な社会、自分たちが望んでいる未来は、今日は柴尾さんが第一におっしゃったことで希望というのが要ると言われたように、私たちが今一番やってきたのは、学校と地域と社会教育と一緒にあって、じゃあ自分たちのこの地域の今の持続可能性を失っている問題解決というところの次の段階として、じゃあどういう社会を自分たちはつくりたいのかというのを、いろんなワークショップをしながらつくってきました。

その中で、京山地区の自分たちがつくりたい、この地域に達成したい将来像というのをつくって行って、それに向かって2014年はまだ中期目標で、何をどうしようか。それを達成するためにはさらに単年度2011年はどうしようかなということで、今組み立てた進め方をやっていっています。俗に言うバックキャストというやり方で、そういう中、今E S Dを進めていくためのそういう学校と社会と地域の連携などと同時に、やはり将来の自分たちの未来像、自分たちの地域の希望ある未来というのはどういうものなのかと意識して、それに向かっての教育を、やはり意識的に取り組んでいくというのがこれから必要じゃないかなとい

います。そういうところを是非、つながりとかができてきたら、そういうところに踏み込んでいってもらうのが大事じゃないかなと思っています。よろしくお願いします。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

ありがとうございました。危機対応としてのE S Dからを、希望実現としてのE S Dというか、そういったところをご指摘いただきました。

では引き続き、もうどなたからでも、今日の話聞いてどう学んだのか、うちの実践はどうなのかを含めていかがでしょうか。もうどんなところからでも構いません。いかがですか。

せっかくですから、小学校と高等学校の事例が紹介されましたので、よければそれを聞いて、小学校や高等学校の先生方がどういうふう感じられたのかとか、うちはこうだとかというふうに絡んでいただけるといいんじゃないかなと思うんですが、どうでしょう。

矢掛高校から出そうですね。それじゃあ、お願いします。

○室 貴由輝（岡山県立矢掛高等学校）

矢掛高等学校の室です。今日はどうもありがとうございます、貴重な話。

今回の一宮高校のご発表を聞かせていただきまして、スーパーサイエンスということもあって、規模が違うなというのも非常に感じました。こんなことができたらいいなとか、こういうふうな国際理解教育が実際にできたらいいなと思うことが、体現できているというのがすごくうらやましいというのを感じたのが正直なところです。予算の規模が丸が2つぐらい違うので、本校では難しいかなと思ったんですが、手法としてはすごく参考になりましたので、また持ち帰って、できることにつきましては取り組みたいと思います。



環境教育、それから国際理解教育に関しまして、もう少しできそうな気がしております。

あわせて、先ほどの池田さんのお話の中にもあったんですけど、地域との連携ということで、本校は6～7年ほどずっと環境教育でE S Dを進めてきたんですが、そういう中で地域のつながりができてきていると。最近はそのE S Dも地域学、矢掛学という教科を立ち上げて、地域の連携というものを進めているんですが、矢掛町という人口1万5,000人ほどの規模の町なんですが、どんどん少子高齢化が進んでいて、ここも僻地に指定されております、平成22年から。

限界集落も抱えているような中で、実際そこに住んでいる子どもたちというのは、自分たちが置かれている状況というか、自分たちの町が置かれている状況、その少子高齢化が進んで、この後どうなっていくのかであります、もしくは限界集落。限界集落に指定されているところは、60歳未満の人が1人もいないので、小学生は関係ないんですが、例えば町内にそういうところがあるという状況の中で、それを認識できていないと。それで、将来訪れる危機的なことが、まだ子どもたちにはわかっていない。これはすごく問題ではないのかなというのをすごく感じています。

当然、それは高校生も同じことで、最近はそのような地域の耕作放棄地であるとか限界集落へ高校生が出て行って、そこで起こっていることを感じさせるということ、昨年からは始めたところではあるんですが、特にここ岡山市内であれば、そういった状況というのはなかなかないと思うんです。

今日の鈴木先生のお話の中にある能登半島なんか、特にそうだと思いますが、日本の半分以上の地域では、地球規模の持続発展的な問題もさることながら、自分たちの住んでいる地域の持続可能性についても真剣に考えなければならない状況があるのではないかと。そこは同じ日本というフィールドの中でも差があって、取り組むべき課題というのは違ってきているのかなというのを、最近感じます。だからどうだということじゃないんですが、そういう問題を感じながら、今矢掛高校ではESDに取り組んでおります。

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

ありがとうございました。学校の足元の地域をしっかりと見詰めたESDの取り組みの必要性も、最後につけ加えていただきました。ありがとうございました。

それでは続いて、じゃあお願いします。

○中澤静男（奈良教育大学）

奈良教育大学の中澤といいます。今日はどうもありがとうございます。

今、室先生がおっしゃいましたが、実はうちの奥さんが、この限界集落、矢掛町出身です。うちに来ていただいたので、限界集落になってしまったのかなと、ちょっと反省しております。

今最後に、地域教材のことをおっしゃいましたが、先ほどのスライドの中に、ESDというのは生きる力を目指すというところ、文科省が推進しているそういうものと全く同じですよというのがありました。私も、それはすごく感じております。つまり、日本の子どもたちの学力で一番問題になっているのは、学習意欲の面です。そこで、ESDにおきましては、地域教材を活用して展開をするということをやっておりますので、それをどんどん進めていく上におきまして、子どもたちも学習の、もちろん自分の住んでいる地域のことをやるわけですから、すごく意欲が高まっていくわけです。特に地域の人たちとの出会い、地域で頑張っておられる方との話し合い、そういう生き方に学ぶことで、子どもたちの学習意欲というのがすごく上がっていくという現状がございます。

奈良でも、こちらの岡山での学びというのをますます生かしてやっていきたいと思っております。どうもありがとうございます。



○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

地域に触れる学習活動をつくり出していくことが、子どもたちの学習意欲を高めていくというご指摘でございました。ありがとうございます。

続いてございますでしょうか。

それでは、本日は岡山市の教育委員会の指導課のほうから天野課長も来られていますので、岡山市としてESD・ユネスコスクール推進、どのように展望されているのかも含めて話をいただければと思います。

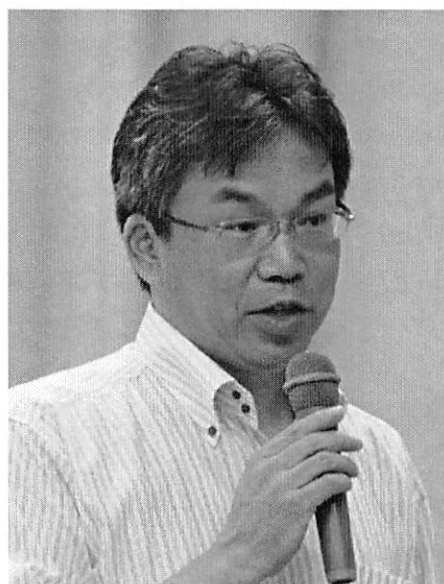
○天野和弘（岡山市教育委員会指導課長）

大きいテーマをありがとうございます。話はそんなに大きくならないかもしれませんが、今日講演あるいは発表してくださった先生方、本当にありがとうございます。

冒頭の開会のごあいさつの中で、岡山は取り組みが遅れているというようなお話もあったようで、岡山市もドキッとする部分があったりする中で、お話をお聞きしてちょっと励まされたというか元気づけられたかなというふうに思っています。

というのは、例えば岡山がこれまで取り組んできている、例えば岡山っ子育て条例に基づいての教育であるとか、あるいは中学校区単位での地域協働学校であるとか、あるいは岡山型の一貫教育だとか、こういう取り組みも、何だ、よく考えてみればESDと同じところへ向かってやっているんだなというふうなことを、改めて確認できたかなということで、本当に励まされたかなというふうに思っています。

そうであっただけに、今日実はここへお越しの方々、多分岡山市以外の学校の先生方も、あるいは教育関係者の方、それ以外の方もいっぱいいらっしゃるんだろうと思いますが、みんな興味、関心がある方とか、もう既に取り組んでいる方とかということばかりだったんだろうと思いますけれども、今日のお話は、ちょっとなあとか、二の足を踏んでいる方には是非聞いていただければよかったかなと。本当に〇〇教育とか、アルファベット3文字の関係の活動とかいうのは、なかなか学校としてはちょっとお尻が引けるといふか腰が引けるといふか、そういうところがございますので、今日のようなお話で、学校が取り組んでいることが、実は同じねらいでやっていることなんですよというのを話していただけたら、本当にありがたかったなと思いますし、我々も今後そういったことを学校にはお話をしていきたいなというふうに思いました。本当にありがとうございました。



○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

ありがとうございました。

8. 閉会式

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

それでは、そろそろ時間も詰まってまいりましたが、岡山大学の中で、このESD・ユネスコスクール推進にかかわる取り組みは、当初、阿部先生がご尽力され大学院環境学研究科が中心に取り組まれておりましたが、最近大学院教育学研究科も何とかしっかりと支えていこうということで、今日のこの研修会も、教育学研究科が中心となって準備をさせていただきました。その中心人物であります川田先生に、今日のこの研修会の閉会の言葉をいただきたいと思ひます。

○川田 力（岡山大学大学院教育学研究科）

岡山大学大学院教育学研究科の川田でございます。本日はお忙しい中、ESD・ユネスコスクール研修会 岡山2011にお集まりいただきまして、どうもありがとうございました。

井村先生、柴尾先生、鈴木先生からは、ESDとは、ユネスコスクールとはどういうものなのかというようなことについて、丁寧に説明いただきまして、この場にお集まりの先生方の中で、ESDあるいはユネスコスクールというのはどういうものかなというようなことにお集まりになられた先生については、非常に参考になったのではないかと思います。

それからその後、駅家西小学校、それから岡山一宮高等学校、この両校は私が中国地方のESDの宝だというふうに思っているんですけども、ESDの実践について詳しくご報告をいただきまして、ESDの目指す先というものがどういうものなのかについて、あるいはそういうところで育てられている子ども、生徒が、これから未来をつくっていく姿というものも少し思い浮かべられたのではないかと思います。

先生方の中で、これはすばらしい取り組みなんだけど、うちの学校で取り組むのははちょっと難しいな、難しそうだなと思っている先生方がいらっしゃるかと思います。でも全然そんなことはないと思います。おそらく今日ご報告いただいたそれぞれの学校とも、最初はこんなことをやってみたい、あるいは子どもたちのためにこういうことをやってみようというところから思いが高まっていて、先生方の熱心な取り組みももちろんですけども、さまざまな人の協力によって成り立っているというような教育実践なのだと思います。

私、今日は裏方としてお手伝いさせていただいていたのですけれども、大学あるいは岡山市、岡山県、あるいは岡山県以外でもそれぞれの県、それぞれの地域に、そういうようなESD活動をサポートしてくれるような組織というのがつくられてきております。

特に岡山大学は、ユネスコスクール支援大学間ネットワークの加盟校として、皆様方のESDの取り組みあるいはユネスコスクールへの加盟申請等ご協力差し上げるといふような立場でございますので、こういうことをやりたいんだとか、あるいは加盟申請のためにはどういふふうにしたらいんだというようなことについて、遠慮なくご相談下さい。時には本学のスタッフの中でも賄い切れないこともあるかもしれませんが、そういうようなところはさまざまなおつなぎいたしますのでご安心下さい。今日お配りした封筒にESD協働推進室および岡山大学教師教育開発センターの担当窓口の連絡先等が書いてあります。是非、今日この場で感じられたことを、各学校にお持ち帰りいただき、ESDの輪を少しずつ広げながら活動が進められることを期待しております。そのような輪を広げるために、岡山大学もできる

限りのご協力をさせていただきたいと思っておりますし、全国の大学あるいは岡山市をはじめとしたさまざまな地域でE S Dにかかわっている方々の力を結集してE S Dが進められるよう取り組んでいきたいと考えています。

本日は、午後、半日にわたる長時間でありましたけれども、ご苦労さまでした。これで閉会のあいさつにかえさせていただきます。どうもありがとうございました。（拍手）

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

ありがとうございました。

それでは、最後にもう一度、ご講演いただいた3人の先生方と、実践の報告をしていただいた2人の先生に、感謝の思いを込めてお礼の拍手をしたいと思っておりますので、ご講演、ご報告された先生方は恐縮ですがお立ちいただいて、それでは大きな大きな感謝の拍手を送りたいと思います。（拍手）

○司会 住野好久（岡山大学大学院教育学研究科）

ありがとうございました。

何かあつという間の3時間で、もっともっと皆さんのお声を聞きたかったんですけども、これはまた次の機会につないでいきたいと思っております。この研修も持続可能に発展させていきたいなと思っておりますので、今後ともご協力をお願いいたします。

では、これにてE S D・ユネスコスクール研修会 岡山2011をお開きにしたいと思います。今日はどうもご苦労さまでした。（拍手）

付 録：プレゼンテーション資料

1. 井村 隆（文部科学省国際統括官補佐（日本ユネスコ国内委員会事務局））
「持続発展教育（ESD）とユネスコスクールの活用について」
2. 柴尾智子（ACCU（ユネスコアジア文化センター））
「ESDとユネスコスクール」
3. 鈴木克徳（金沢大学）
「北陸におけるユネスコスクールへの取組み」
4. 福山市立駅家西小学校
「ESD研究実践」
5. 岡山県立岡山一宮高等学校
「岡山一宮高校の取組～ユネスコスクールとして～」

持続発展教育(ESD)と ユネスコスクールの活用について

ESD・ユネスコスクール研修会 岡山2011
2011年8月27日

文部科学省国際統括官補佐(日本ユネスコ国内委員会事務局)
井村 隆



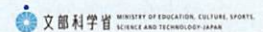
持続発展教育 (ESD)について(2/3)

国連持続可能な発展のための教育の10年 (United Nations Decade of Education for Sustainable Development)

- 2002年 ヨハネスブルクサミットで我が国が提案
- 2002年 国連決議(第57回総会)
 - ・ 2005～2014年の10年
 - ・ ユネスコを主導機関に指名
- 2005年 DESD国際実施計画をユネスコにて策定

全体目標：持続可能な開発の原則、価値観、実践を、教育と学習のあらゆる側面に組み込んでいくこと

4



- ◆ 持続発展教育(ESD)について
- ◆ ESDに関する我が国の取組
- ◆ ユネスコスクールとは
- ◆ 今後の展開

2



持続発展教育 (ESD)について(3/3)

国際実施計画

(IIS: International Implementation Scheme)

※ ユネスコがとりまとめたDESDの戦略文書

- 全体目標：持続可能な開発の原則、価値観、実践を、教育と学習のあらゆる側面に組み込んでいくこと
- 基本的ビジョン：誰にとっても教育から恩恵を受ける機会、持続可能な未来の構築と現実的な社会転換のために必要な価値観、行動やライフスタイルを学習する機会がある世界

5



持続発展教育 (ESD)について(1/3)

Sustainable Development (持続可能な発展)とは…

「将来の世代が自らのニーズを充足する能力を損なうことなく、今日の世代のニーズを満たすこと」

※ 国連「環境と開発に関する世界委員会(ブルントラント委員会)」
報告書『我ら共通の未来(Our Common Future)』(1987年)
における定義

持続発展教育(ESD)とは…

「持続可能な社会の担い手を育む教育」

⇒ 持続可能な社会を構築するための人づくり

3



なぜ、ESDが必要なのか — 教育におけるESDの必要性

～ Education for Sustainable Development ～

【ESDの教育的意義】～体験とつながりの再構築

- 環境問題～温暖化、酸性雨、生態系危機の解決
- 国際理解～多文化理解、国際協調、平和の構築
- 学力問題から～生きる力、PISA型学力の育成
- 心の問題から～不登校、いじめ等の解決、発達
- 社会問題から～社会秩序の回復と地域の再生

宮城県気仙沼市立中井小学校教員
及川幸彦氏プレゼン資料を一部改
変



◆ ESDに関する我が国の取組

◆

◆

◆

7

文部科学省 MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS, SCIENCE AND TECHNOLOGY JAPAN

ESDに関する文部科学省の取組 (1/4)

日本ユネスコ国内委員会

- 2003年 「国連持続可能な開発のための教育の10年」に関してユネスコが策定する国際実施計画への提言
- 2007年 「持続可能な開発のための教育の10年」の更なる推進に向けたユネスコへの提言
 - 同年第34回ユネスコ総会でESD推進のための決議へ
- 2008年 持続発展教育(ESD)の普及促進のためのユネスコスクール活用について(提言)
 - ※ 2008年までESDは「持続可能な開発のための教育」を多用してきたが、より一層の普及のため、「**持続発展教育**」と改め

10

文部科学省 MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS, SCIENCE AND TECHNOLOGY JAPAN

ESDに関する我が国の取組

- 2005年 内閣官房に関係省庁連絡会を設置
- 2006年 DESD国内実施計画を策定

基本的考え方(国内実施計画)

ESDは、持続可能な社会づくりの担い手となるよう個人を育成する教育。特に、

- 人格の発達や、自律心、判断力、責任感などの人間性を育むこと。
- 個人が他人との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性の中で生きており、「関わり」、「つながり」を尊重できる個人を育むこと。

8

文部科学省 MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS, SCIENCE AND TECHNOLOGY JAPAN

ESDに関する文部科学省の取組 (2/4)

「持続発展教育(ESD)の普及促進のためのユネスコスクール活用について(提言)」

- ユネスコスクール参加のメリット
 - ユネスコスクールへの支援の充実
 - 事務局機能の強化による支援体制の充実
- わかりやすい登録システム
- 活動資金等の充実

11

文部科学省 MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS, SCIENCE AND TECHNOLOGY JAPAN

ESDの主な推進状況

9

文部科学省 MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS, SCIENCE AND TECHNOLOGY JAPAN

ESDに関する文部科学省の取組(3/4)

学習指導要領の改訂(2008年3月公示)

- 中央教育審議会答申「学習指導要領等の改善について」(2008年1月)
 - 「持続可能な発展」、「持続可能な社会の構築」が求められている状況に鑑みた改善の実施
 - 一教科等を横断して改善(環境教育、ものづくり教育)
 - 一各教科・科目等の内容の改善(社会、地理歴史、公民、理科、技術・家庭)等
- 新学習指導要領(2008年3月、2009年3月)
 - 小学校学習指導要領の総則や理科、社会、中学校学習指導要領の理科、公民、地理、高校学習指導要領の地理歴史、公民などに持続可能な社会の構築の観点が盛り込まれている※

※ユネスコスクールHP参照(http://www.unesco-school.jp/?page_id=637)

12

文部科学省 MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS, SCIENCE AND TECHNOLOGY JAPAN

ESDに関する文部科学省の取組 (4/4)

教育振興基本計画の策定(2008年7月)

- ▶ 今後5年間に総合的かつ計画的に取り組むべき施策
いつでもどこでも学べる環境をつくる
持続可能な社会の構築に向けた教育に関する取組の推進
 - ・ 一人一人が地球上の資源・エネルギーの有限性や環境破壊、貧困問題等自らの問題として認識し、将来にわたって安心して生活できる持続可能な社会の実現に向けて取り組むための教育(ESD)の重要性について、広く啓発活動を行う・・・。
 - ・ 特に、ESDを主導するユネスコの世界的な学校ネットワークであるユネスコスクール加盟校の増加を目指し、支援する。

13

ユネスコスクールとは

ユネスコ憲章に示されたユネスコの理想を実現するため、平和や国際的な連携を実践する学校

参加資格

- ▶ 就学前教育・小学校・中学校・高等学校・技術学校・職業学校、教員養成学校、特別支援学校等(国公私立を問わず)
- ▶ ユネスコの理念に沿った取組を継続的に実施していることが必要

16

国立教育政策研究所

学校における持続可能な発展のための教育(ESD)に関する研究

【ESDの視点に立った学習指導の目標】

教科等の学習活動を進める中で、「持続可能な社会づくりにかかわる課題を見いだし、それらを解決するために必要な能力・態度を身に付ける」ことを通して、持続可能な社会の形成者としてふさわしい資質や価値観を養う。

- 【持続可能な社会づくりの要素】
- ① 相互性
 - ② 多様性
 - ③ 有限性
 - ④ 公平性
 - ⑤ 責任性
 - ⑥ 協調性

- 【ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度】
- ① 批判的に思考・判断する力
 - ② 未来像を予測して計画を立てる力
 - ③ 多面的、総合的に考える力
 - ④ コミュニケーションを行う力
 - ⑤ 他者と協力する態度
 - ⑥ つながりを尊重する態度
 - ⑦ 責任を重んじる態度

中間報告書より抜粋 http://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/esd_chuukan.pdf

14

ユネスコスクールとESD

ESDのテーマ

- ・ 環境教育
- ・ 国際理解教育
- ・ エネルギー教育
- ・ 世界遺産・地域の文化財等に関する教育
- ・ その他、持続可能な社会づくりのための担い手づくりのための教育

テーマが一致

ユネスコスクールの研究テーマ

- ・ 地球規模の問題に対する国連システムの理解
- ・ 人権、民主主義の理解と促進
- ・ 国際理解教育
- ・ 環境教育
- ・ その他、ユネスコの理念に沿ったテーマ

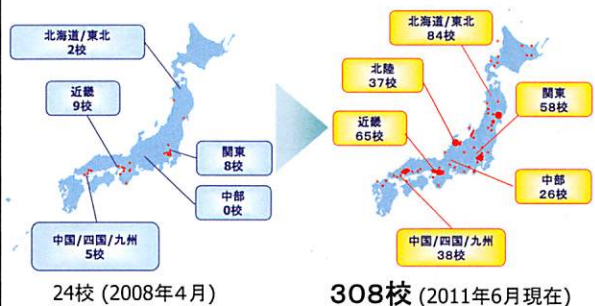
ユネスコスクールとESDの一体的推進

17

◆
◆
◆ ユネスコスクール
◆

15

ユネスコスクール加盟校数の現況



18

ユネスコスクール加盟のメリット

- ▶ 世界のユネスコスクールの活動情報の提供
 - ▶ 世界のユネスコスクールと交流する機会の増加
 - ▶ 米国、韓国、中国等海外との教員交流
 - ▶ 世界の教育事情、国連機関の活動の把握
- ▶ ESDのための教材、情報の提供
 - ▶ ユネスコスクールHPを通じた情報交換
 - ▶ ワークショップ、研修会への参加
 - ▶ 国内の関係機関との連携強化

国際交流の機会の増大

国内の連携強化

事業例：ユネスコスクールESDアシストプロジェクト助成金
日本ユネスコ・パートナーシップ事業
ESD日米教員交流プログラム

企業におけるユネスコスクールへの支援

▶ ユネスコスクールへのプレートの寄贈



ユネスコスクール加盟校に対してプレートを贈呈

(「ユネスコスクール」の表記変更に伴い、プレートの表記も今後変更予定)



小学生向けに編集した
道徳教育用教材
「Kids X change」
(キッズ・エクステンジ)

▶ ESD関連の教材提供

環境教育用教材や国際理解教育用教材など様々な教材が企業により作成され学校に配布されている。

▶ ユネスコスクールへの支援事業

ユネスコスクールESDアシストプロジェクト助成金
助成の対象：国内全てのユネスコスクール加盟校
助成金額：1校あたり10万円を上限

<http://www.unesco.jp/contents/help/esd.html>

▶ ESDロゴマークのホームページなどへの掲載



私たちはESDを応援しています。
ESDは持続可能な社会づくりを目指す活動です
(ESD: Educate for Sustainable Development!)

ESDロゴマークはSDGに賛同いただける企業が広告、啓発、パブリシティ及びウェブページへの掲載をおこなっています。

ユネスコスクールへの支援

ユネスコスクール ウェブサイトの設置

ユネスコスクール加盟校増加やネットワーク強化、ESDの理解増進を図ることを目的に、ウェブサイトを設置 (平成21年3月～)

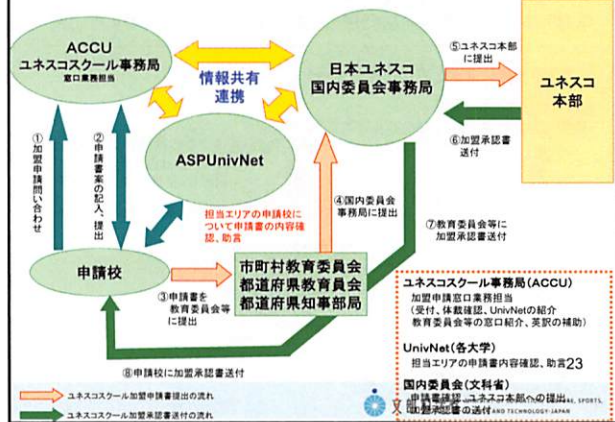
▶ コンテンツ

- ▶ ESDやユネスコスクールに関する基本情報の発信
- ▶ ユネスコスクール間の情報交換等の場の提供
- ▶ 優良事例や教材等の紹介



ユネスコスクールウェブサイト
<http://www.unesco-school.jp/>

ユネスコスクール加盟申請から承認までの流れと各機関の役割



ESD/ユネスコスクール支援体制の充実

ユネスコスクール支援大学間ネットワーク (ASP UnivNet)

- ▶ ユネスコスクールの活動支援等を目的とした大学間ネットワーク
- ▶ 宮城教育大学の呼びかけにより、2008年12月に発足
- ▶ 北海道教育大、岩手大、東北大、宮城教育大、玉川大、金沢大、三重大、奈良教育大、大阪府立大、鳴門教育大、岡山大、九州大の12大学が参加
- ▶ 今後、各大学が連携しつつユネスコスクールの活動支援を実施



- ◆
- ◆
- ◆
- ◆ 今後の展開

・ユネスコスクールへの拡充を通じて、現場レベルでの持続発展教育(ESD)の取組を促進し、優良事例を蓄積
 ・持続発展教育(ESD)の世界的取組を促進

世界
 ・世界的なパートナーシップの構築促進
 ・持続発展教育(ESD)の世界的取組の促進

国内
 ・教材・カリキュラムの集積
 ・優良事例の蓄積
 ・パートナーシップの構築促進

世界につながるネットワーク
 ESDをコンテンツとした一体的な推進

環境教育、エネルギー教育、国際理解教育、ESDの基本的考え方や持続可能な発展のための原則、目標、知識、行動等、世界遺産や地域の文化財の教育

その際、持続可能な社会のための国際協力を促進する

文部科学省 MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS, SCIENCE AND TECHNOLOGY JAPAN

各教育機関・地域に期待される役割

学校教育
 大学
 A高校 B高校
 A中学校 B中学校
 A小学校 B小学校

社会教育
 美術館
 博物館
 図書館

側面的リンク
 教員研修
 ユネスコ研究ネ

地方教育委員会
 地方自治体
 環境課/まちづくり推進課
 地域ユネスコ協会
 農林水産団体
 民間企業 NPO 他

行政・NPO等

垂直的リンク
 水平的リンク

文部科学省 MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS, SCIENCE AND TECHNOLOGY JAPAN

アジア地域ESDグッドプラクティス構築プロジェクト(案)

ライズプロジェクト(米)

資金は日本のユネスコ信託基金を利用
 実施機関
 協力機関: UnivNet
 ユネスコバンコク事務所
 各国国内委員会

信託基金の拠出
 実施機関

協力機関
 UnivNet
 日本国内の取組をコーディネート
 海外との構築

ユネスコバンコク事務所
 教育省・国内委員会をコーディネート

各国内委員会が協力

26

文部科学省 MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS, SCIENCE AND TECHNOLOGY JAPAN

お問い合わせ先

文部科学省国際統括官付
 (日本ユネスコ国内委員会事務局)
 TEL: 03-5253-4111(代表)
 FAX: 03-6734-3679
 E-mail: jpnatcom@mext.go.jp
 URL: <http://www.mext.go.jp/unesco/index.htm>

29

文部科学省 MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS, SCIENCE AND TECHNOLOGY JAPAN

「rice(米)」をとりまく様々なESD

“食”をテーマに…
 田んぼとのつながり
 自然のしくみと稲作の関係
 などについて学ぶ
 お米が届くまで
 米の生産、輸送、消費を
 知ることについて学ぶ
 健康と安全
 食と健康の関係を学ぶ
 稲作体験とおとした体験学習

“暮”をテーマに…
 私の住む町の米作り
 町で行われている稲作について学ぶ
 田んぼの1年
 稲作の一年のライフサイクルを学習
 収穫調整、農家の工夫
 持続的な収穫量確保のための工夫を学習

“生”をテーマに…
 田んぼの生き物
 田んぼの生き物の観察、その分布の
 地域比較等を通じ、生き物と環境の
 つながりについて学ぶ
 図鑑を作ろう
 植物観察や図鑑作成を通じ、植物と
 環境のつながりについて学ぶ
 人間と生態系
 私たちの生活と生態系のつながりに
 関する学習

様々な「rice(米)」にまつわる「暮・生・食」の様々な事例をおして学習、持続可能な社会を考える

27

他人との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性を認識し、「関わり」、「つながり」を尊重できる個人を育てる

文部科学省 MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS, SCIENCE AND TECHNOLOGY JAPAN

参考

30

文部科学省 MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS, SCIENCE AND TECHNOLOGY JAPAN

教材紹介

【参考教材】

- 「Kids XChange ～子どもが変われば、地球は変わる～」
種類：小学生用教材、指導用教材
作成：ユネスコ/国連環境計画（UNEP）、協賛：日本通運
- 「Mビュース～持続可能な循環～」
種類：取組事例集
作成：気仙沼市教育委員会、宮城教育大学
<http://www1.miyako-u.ac.jp/renkei/mobius.pdf>
- 環境教育指導資料【小学校編】
種類：取組事例集
作成：国立教育政策研究所
作成：気仙沼市教育委員会、宮城教育大学
- ESD教材活用ガイド～持続可能な未来への希望
種類：取組事例集・解説
作成：ユネスコアジア文化センター

【参考となる素材があるウェブサイト】

- 環境教育関係
 - ・環境教育・環境学習データベース：<http://www.eeel.jp/index.html>
 - ・こどもエコクラブ：<http://www.ecoclub.go.jp/>
 - ・えんふえ 環境教育ライブラリー：<http://eife.miyako-u.ac.jp/>
- エネルギー環境教育関係
 - ・全国地球温暖化防止活動推進センター：<http://www.jccca.org/>
 - 国際理解教育
 - ・国際協力プラザ：<http://www.apic.or.jp/plaza/odakyozai.html>

【その他参考教材があるウェブサイト】

- 環境教育関係
 - ・自然大好きクラブ：<http://www.env.go.jp/nature/nats/>
 - エネルギー環境教育関係
 - ・エネルギー環境教育情報センター
：<http://www.iece.gr.jp/kyozai/index.html>
 - 国際理解教育関係
 - ・日本国際理解教育学会
：<http://www.kokusarukai.com/3131>

文部科学省 MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS, SCIENCE AND TECHNOLOGY JAPAN

ESDカレンダー 奈良県 奈良教育大学附属中学校

奈良教育大学附属中学校 ESDカレンダー

1年生

文部科学省 MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS, SCIENCE AND TECHNOLOGY JAPAN

ESDの取組の類型化

“暮”をテーマに…

- 私の住む町
町の文化や人のつながりについて学ぶ
- 暮らしを守る
町の防災、自然がもたらす恵みや災害等について学ぶ
- エネルギーと環境
エネルギーの大切さや環境問題についての学習

“食”をテーマに…

- 自然とのつながり
自然のしくみと食の関係などについて学ぶ
- 食べ物だけでなく
食料の生産、輸送、消費を知ることを通じた食について学ぶ
- 健康と安全
食と健康の関係を学ぶ

“生”をテーマに…

- 身近な生き物
身近な昆虫の観察や、その分布の地域比較等を通じた生き物と環境のつながりについて学ぶ
- 植物園鑑を作る
植物観察や図鑑作成を通じ、植物と環境のつながりについて学ぶ
- 人間と生態系
私たちの生活と生態系のつながりに関する学習

ESDの取組例 宮城県 気仙沼市立直瀬小学校

海外との「共同学習」による地球的視野の育成

国際交流としての取り組みの一例

目米の水辺環境と人々の生活(マスタティーチャープログラム)

【目標】地球的視野を育むとともに、積極的な環境行動への基礎を養う。

【活動】日米両地域の環境をテーマに観察、調査、採集、飼育などの体験をし、ICTを活用して米国小学校と学習交流を展開。

気仙沼市立直瀬小学校	(米国)ワシントン州カフ小学校
自然と祭りプロジェクト	Halloween & Moon Festival
野菜栽培プロジェクト	School Lunch & Food systems
田舎の土と水プロジェクト	Mud woods soil & Insect Study
農業サンクチュアリ	Water Study (Creek Project)
海のリゾート	Pothole Study & Fast Plants
環境未来都市	Box city- Terrace town, 2004

(日本)気仙沼市立直瀬小学校 Think Globally (米国)Callisburg Elementary School

文部科学省 MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS, SCIENCE AND TECHNOLOGY JAPAN

総合的な学習の時間 第4学年 年間指導計画

New! ESDカレンダー

33

文部科学省 MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS, SCIENCE AND TECHNOLOGY JAPAN



ESD

ESD
 Education for Sustainable Development
 すべての教育と学びはSDのために

質の高い教育と教育環境
 +
 現在と将来のコミュニティの人たち+日本人(世界のなかの)と
 コミュニティ+日本(世界のなかの)に対する
危機感
 +
希望

ESDとユネスコスクール

ACCUにおけるユネスコスクール支援の経験から

財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)

事業部次長
 柴尾智子
shibao@accu.or.jp, esd@accu.or.jp
平成23年(2011年)8月27(土) 平成23年度 日本/ユネスコパートナーシップ事業
 ESD・ユネスコスクール研修会 岡山2011
 岡山大学 自然科学研究科棟2F大講義室





ユネスコスクール
 ASP schools

内容

- ①ユネスコスクール
- ②ESDと国連ESDの10年：ESD、SDはどのように捉えられているか
- ③ユネスコスクールへのサポート
- ④ユネスコスクール事例

ASPnet: Origins

ASPnet 1953:
 33 schools in 15 Member States

ASPnet: Today

ASPnet 2009:
8,639 schools in 180 Member States
Most recent members: Seychelles, Netherlands Antilles

UNESCO加盟国 193 Member States (and the 7 Associate Members)

ユネスコスクール加盟校

日本のユネスコスクール数の推移

昭和21年 1946年	昭和26年 1951年	昭和40年 1965年	昭和45年 1970年	昭和50年 1975年	平成2年 1990年	平成12年 2000年	平成17年 2005年	平成19年 2007年	平成20年 2008年	平成21年 2009年	平成22年 2010年	平成23年 2011年 (6月現在)
8校	27校	22校	25校	23校	21校	20校	19校	24校	61校	136校	237校	308校

MEXTデータ

ユネスコスクール

ユネスコ憲章に示されたユネスコの理想を実現するため、平和や国際的な連携を実践する学校

ユネスコ憲章
戦争は人の心の中に生まれるものであるから、人の心のなかに平和のとりでを築かなければならない。」(前文より)

8

ユネスコスクール加盟校数の現況

(文科省国際統括官付 2011年8月現在資料)

北海道/東北	2校	北海道/東北	84校
近畿	9校	北陸	37校
関東	8校	近畿	65校
北陸/中部	0校	関東	56校
中国/四国/九州	5校	中部	26校
		中国/四国/九州	38校

24校 (2008年4月) 308校 (2011年6月現在)

11

ユネスコスクール

- 参加校
世界181の国・地域で9,168校がユネスコスクールに加盟(2011年6月現在、ユネスコデータ)
- 1953年(昭和28年)開始のプログラム。「時代の要請に応え、また現在および将来の社会をよくしていく児童生徒を育てるため」に発展
1953年15か国33校⇒1983年116か国3000校⇒2003年6000校
- 「世界中の子ども・青年の直面する教育ニーズに応えるため、平和、自由、正義と人間開発を求めて、質の高い教育の強化と普及を実践する学校」
- 日本においては、近年、ユネスコスクールはESDの推進拠点として位置づけられており、文部科学省、日本ユネスコ国内委員会などが中心となって、加盟校増加に取り組んでいる。

9

ユネスコスクール加盟校

区分	校数
幼稚園・保育園	6
小学校	145
中学校	76
中高一貫	15
高等学校	53
大学(教員養成機関)	4
養護学校	1
その他	8
合計	308

(2011年6月現在)

ユネスコスクール

●ユネスコスクールに加盟するには

- ①各校が申請書を、管轄する自治体（教育委員会/首長部局）に提出。
- ②都道府県・指定都市の教育委員会から日本ユネスコ国内委員会に提出
- ③日本ユネスコ国内委員会事務総長からユネスコ本部（パリ）へ提出
- ④加盟承認書がユネスコ本部から日本ユネスコ国内委員会事務総長へ送付される

↓
加盟

13

ユネスコスクール

わが国における「国連持続可能な開発のための教育の10年」実施計画(ESD実施計画)
(平成18年・2006年3月30日、平成23年・2011年6月3日改定)
「国連持続可能な開発のための教育の10年」関係省庁連絡会議

4. ESDの推進方策 (1)ESDの10年後半における重点的取組事項

➢ 普及啓発・教育機関における取組・地域における実践

ユネスコスクールについては、ESDの推進拠点として位置づけ、加盟校増加、ユネスコスクール間のネットワークの強化、活動の充実を図り、地域に根ざした優良事例の開発やその成果を世界にむけて発信し、世界各国におけるESDの普及、推進と連携の強化に寄与します。

ユネスコスクール

2008年・平成20年4月22日
都道府県・政令都市宛文科省文書
(国際統括官・初等中等教育局長連名)

- ・ ESDが既存の取組に持続可能な社会の構築という共通の目標を与える
- ・ 学習指導要領の改訂を契機として、ESDの意義を学校現場に浸透させる必要
- ・ 学校現場にとどまらず保護者や地方自治体、教育委員会に同趣旨の周知を図る必要
- ・ ESDの推進にはユネスコ協同学校のネットワーク活用が有効
- ・ ユネスコ協同学校の呼称を「ユネスコ・スクール」に改める
- ・ 「ユネスコ・スクール」参加のメリットの明確化と登録システムの改善
- ・ 自治体に登録窓口の設置とHP掲載を要望

**ESDと
国連ESDの10年
2005—2014**

ESD、SDはどのようにとらえられているのか

ユネスコスクール

教育振興基本計画(平成20年・2008年7月)

➢ 今後5年間に総合的かつ計画的に取り組むべき施策
いつでもどこでも学べる環境をつくる
持続可能な社会の構築に向けた教育に関する取組の推進

- ・ 一人一人が地球上の資源・エネルギーの有限性や環境破壊、貧困問題等自らの問題として認識し、将来にわたって安心して生活できる持続可能な社会の実現に向けて取り組むための教育(ESD)の重要性について、広く啓発活動を行う…。
- ・ 特に、ESDを主導するユネスコの世界的な学校ネットワークであるユネスコ・スクール加盟校の増加を目指し、支援する。

国連ESDの10年 2005—2014

国際社会での日本の取り組み
国内の取り組み 国際社会の動き

1972 **国連人間環境会議(ストックホルム)**

1984 「環境と開発に関する世界委員会」発足…日本の提案

1987 **同委員会の報告書“Our Common Future”**刊行

1992 **国連環境開発会議(リオ・サミット)**で「アジェンダ21」採択
→教育の重要性が明記される

2002 **ヨハネスブルク・サミット(南アフリカ)**にて「国連ESDの10年」提案

第57回国連総会(米国ニューヨーク)にて2005年から「国連ESDの10年」とする決議案を日本など提案、全会一致で採択

ESD

国連ESDの10年 2005-2014

国際社会での日本の取り組み
国内の取り組み 国際社会の動き

2003 日本ユネスコ国内委員会による「国連ESDの10年」国際実施計画への提言

2005 「国連ESDの10年」開始記念式典開催(国連本部・名古屋)
最初の7つのRCEの認定(岡山含む)
「国連ESDの10年」国際実施計画を策定(ユネスコ)
国連総会における国際実施計画の承認
「国連ESDの10年」関係省庁連絡会議の設置

2006 「国連ESDの10年」国内実施計画策定

2007 国内ユネスコ委員会による「国連ESDの10年」の更なる推進のための提言(8月)
ESD推進議員連盟発足(6月)

ESD

文部科学省

ESDは持続可能な社会の担い手を育む教育です。

ESD

国連ESDの10年 2005-2014

国際社会での日本の取り組み
国内の取り組み 国際社会の動き

2008 小中学校学習指導要領改訂：ESDに関する教育内容教育振興基本計画を策定：ESDとユネスコスクール
ESD国際フォーラム2008開催（東京）

2009 国内ユネスコ委員会により外務・財務・文部科学・環境大臣にESD推進のための建議を发出
「国連ESDの10年」中間年における進捗状況レビューのための世界会議開催(ドイツ、ボン)

2011 国内実施計画改訂

2014 「国連ESDの10年」終了世界会議日本で開催予定

ESD

文部科学省

「ESDの目標、基本的な考え方、育みたい力、学び方・教え方」
わが国における「国連持続可能な開発のための教育の10年実施計画」より
文部科学省作成

目標

- 持続可能な発展のために求められる原則、価値観及び行動が、あらゆる教育や学びの場に取り込まれること
- すべての人が質の高い教育の恩恵を享受すること
- 環境、経済、社会の面において持続可能な将来が実現できるような価値観と行動の変革をもたらすこと

ESD

文部科学省

ESDは持続可能な社会の担い手を育む教育です。

ESDの実施には、特に次の2つの観点が必要です

- 人格の発達や、自律心、判断力、責任感などの人間性を育むこと
- 他人との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性を認識し、「関わり」「つながり」を尊重できる個人を育むこと

環境教育、国際理解教育、基礎教育、人権教育等の持続可能な発展に関わる諸問題に対応する個別分野の取組のみではなく、様々な分野を多様な方法を用いてつなげ、総合的に取り組むことが重要です

ESD

文部科学省

「ESDの目標、基本的な考え方、育みたい力、学び方・教え方」
わが国における「国連持続可能な開発のための教育の10年実施計画」より
文部科学省作成

育みたい力

- 体系的な思考力(問題や現象の背景の理解、多面的・総合的なものの見方)
- 持続可能な発展に関する価値観(人間の尊重、多様性の尊重、非排他性、機会均等、環境の尊重等)を見出す力
- 代替案の思考力(批判力)
- 情報収集・分析能力
- コミュニケーション能力

ESD

文部科学省
「ESDの目標、基本的な考え方、育みたい力、
学び方・教え方」
わが国における「国連持続可能な開発のための教育の10年実施計画」より
文部科学省作成

学び方・教え方

○「関心の喚起→理解の深化→参加する態度や問題解決能力の育成」を通じて「具体的な行動」を促すという一連の流れの中に位置付けること

○単に知識・技能の習得や活用にとどまらず、体験、体感を重視して探求や実践を重視する参加型アプローチとすること

○活動の場で学習者の自発的な行動を上手に引き出すこと

ESD

わが国における「国連持続可能な開発のための教育の10年」
実施計画(ESD実施計画)
(平成18年・2006年3月30日、平成23年・2011年6月3日改定)
「国連持続可能な開発のための教育の10年」関係省庁連絡会議

4. ESDの推進方策 (3)各主体に期待される取組

➢(ロ)学校・教育委員会

幼稚園から大学まで、教育活動の全体を通じて、発達段階に応じてESDに関する教育を実施することが期待されます。既に「生きる力」としてとりまかれている教育活動は、ESDの取組と大きく重なります。(…)社会的問題を取り上げたり、体験活動を行うことにより、学ぶ側の意欲が向上することが期待されます。さらに、ESDでは総合的な学習の時間を効果的に利用することが重要です。教科横断的な教育活動を総合的な学習の時間で効果的につなぎ合わせるにより、「知の統合化」を実践することが可能になります。

ESDの実践に当たって、学校全体の運営の中でESDを位置づけるには、これまでのカリキュラムや教育内容をESDの視点で捉え直して再構築することが考えられます。また、総合的な取組であるESDは、地域と連携するなど、外部の人材、場や機会を有効に活用することにより、教職員に過度の負担を強いることなく質の高い教育を実践することも可能となります。

ESD

わが国における「国連持続可能な開発のための教育の10年」
実施計画(ESD実施計画)
(平成18年・2006年3月30日、平成23年・2011年6月3日改定)
「国連持続可能な開発のための教育の10年」関係省庁連絡会議

4. ESDの推進方策 (1)ESDの10年後半における重点的取組事項

➢普及啓発・教育機関における取組・地域における実践

2008年7月策定の教育振興基本計画
2008年(幼稚園、小中学校)(2009年(高校)公示の新しい学習指導要領
ESDの推進拠点としてのユネスコスクール

教育機関を活用することにより、国民全体へのESDの普及、推進を図ります
ESDの視点を取り入れた教育関係者への研修の機会を増大し、学校、社会教育施設、教育委員会など教育機関への一層のESDの浸透を図ります。

ESD

わが国における「国連持続可能な開発のための教育の10年」
実施計画(ESD実施計画)
(平成18年・2006年3月30日、平成23年・2011年6月3日改定)
「国連持続可能な開発のための教育の10年」関係省庁連絡会議

4. ESDの推進方策 (3)各主体に期待される取組:具体例

(ロ)学校・教育委員会

- 各教科や総合的な学習の時間、生徒会活動やクラブ活動といった課外活動における学校の教育活動全体を通じて進めること。
- 学校評議会の活用、PTA活動等学校運営の中で総合的な取組
- 異なる学年や小中高等学校の間の連携
- 地域社会との連携
- 自然体験、農村漁村などにおける体験活動、職業体験など多様な体験活動
- 学習や生活の場としての学校施設を環境に配慮したものとし、教育に活用する。
- (…)
- 教育委員会などの教育関連部局においては、ESDの視点を取り入れた各種研修会の開催、参加促進、ESDやユネスコスクールの担当窓口の設置など、教育現場へのESDの浸透を図ります。

ESD

わが国における「国連持続可能な開発のための教育の10年」
実施計画(ESD実施計画)
(平成18年・2006年3月30日、平成23年・2011年6月3日改定)
「国連持続可能な開発のための教育の10年」関係省庁連絡会議

4. ESDの推進方策 (3)各主体に期待される取組

ESD推進の主体とは:

(イ)個人・家庭、(ロ)学校・教育委員会、(ハ)地域コミュニティ、(ニ)NPO、(ホ)事業者・業界団体、(ヘ)農林漁業者、関係団体、(ト)マスメディア(チ)教員養成・研修機関(リ)公民館、図書館、青少年教育施設などの社会教育施設、ボランティアセンター、消費者センター、女性センター等の公的な拠点施設、(ヌ)地方公共団体

ESD


学習指導要領の改訂

➢中央教育審議会答申「学習指導要領等の改善について」
(2008年1月)
「持続可能な発展」、「持続可能な社会の構築」が求められている状況に鑑みた改善の実施

- 一教科等を横断して改善(環境教育、ものづくり教育)
- 一各教科・科目等の内容の改善(社会、地理歴史、公民、理科、技術・家庭)等

➢新学習指導要領 (2008年3月)
小学校学習指導要領の総則や理科、社会、中学校学習指導要領の理科、公民、地理などに持続可能な社会の構築の観点が盛り込み

ESD




国連ESDの10年国際実施計画
(平成17年・2005年)
UNESCO

ESDの特徴

- SD(持続可能な開発)の諸原則と価値観に基づく
- SDの3分野—環境、社会、経済—が健全であることを取り扱う
- 生涯学習を促進する
- 地域に根ざし文化的に適切である
- 地域のニーズや認識、条件に基づくが、地域のニーズを満たすことが国際的な効果や影響をもたらすことも認識している
- 学校教育、ノンフォーマル教育(社会教育)、インフォーマル教育に関わる
- 持続可能性の概念が変化することに対応する
- 地球的課題と地域の優先事項の内容をそのおかれた状況に沿って意識する
- 地域による意思決定、社会的寛容、環境に対する責任、適応力ある労働力、生活の質を可能にする市民としての能力をもたらす
- 学際的である。(どの学問分野もESDに貢献できる)
- 参加型の学習と高次思考スキルを育てるため多様な教授法を採用する。

ESD




異なる言語によるESD

- 中国語 持続発展教育(の簡体字表記)
- 韓国語 **지속가능발전교육** 持続発展教育
- 日本語 持続可能な開発のための教育、
持続可能な発展のための教育(略称: 持続発展教育) (日本ユネスコ国内委員会)
- フランス語 L'éducation pour le développement durable (EDD)
- スペイン語 La educación para el desarrollo sostenible (EDS)
- アラビア語 **التعليم من أجل التنمية المستدامة**
- マレー語
(継続するdevelopmentのための教育)

カダザンドゥスン語(マレーシア・サバ州(ボルネオ島)の言語)
あなたが(人が) develop し成長することが続けられるよう現在もっているものを持ち続けることができるように、あなたが学ぶことがあなたの体と血の一部になるような教育

ESD




国連ESDの10年国際実施計画 ドラフト文書
(平成16年・2004年)
UNESCO

ESDの特徴

- 学際的でホリスティックである: SDのための学びはそのための科目があるわけではなくカリキュラム全体のなかに組み込まれている
- 価値に導かれる: 当然とされる諸規範(SDを支えるものとして共有されている価値観や原則)が明確にされていることがたいへん重要である。その上で、それが検査され、議論され、試され、実際に適応されるようになることが重要である。
- 批判力を重視した代替案の思考力(critical thinking)と問題解決力: SDにともなうジレンマや困難に対処できる自信につながるように。

ESD




ESDとは

ESD とは、わたしたちと世界中の人々・将来世代の人々が生き続けていける未来をどうつくっていくかを、学校や家庭・地域・国・世界を舞台に、みんなで調べたり考えたり、意見を出し合ったりしながら行動していける子どもやおとなになるための学習のことでです。

『ESD教材活用ガイドー持続可能な未来への希望』2009、ACCU

ESD



国連ESDの10年国際実施計画 ドラフト文書
(平成16年・2004年)
UNESCO

ESDの特徴

- 多様な方法: 言葉、美術、演劇、ディベート、経験などなど、プロセスを形作る様々な教授法。単に知識を伝達する教え方は、教師と学習者が協働して知識を獲得し教師と学習者自身の教育機関の環境を形作っていく役割を果たせるような方法論へと作り直されなければならない。
- 参加型の意思決定の仕組み: 学習者自身がどのように学ぶかという決定に参加する。
- 地域に根ざす: 地域課題と地球規模課題、学習者が最も使う言語を利用する。SDの概念はほかの言葉で注意深く表現されなければならない。いろいろな言語や文化によって物事は異なって表現される。それぞれの言語は新しい概念を表現する創造的な方法をもっている。

SD Sustainable Development



持続可能な開発とは
ESD実施計画
国連ESDの10年関係省庁連絡会議

持続可能な開発とは、将来の世代のニーズを満たす能力を損なうことなく、現代のニーズを満たすような社会作りのことを意味しています。このため、すべての人が健康で文化的な生活を営むための取組が必要であり(…)

世代間の公平、地域間の公平、男女間の平等、社会的寛容、貧困削減、環境の保全、公正で平和な社会などが持続可能性の基礎となっており、環境の保全、経済の開発、社会の発展(以下を含め、「社会」を文化の面を含めた広い意味で使います。)を調和の下に進めていくことが持続可能な開発です。

ESD
このような持続可能な開発は、私たち一人ひとりが、日常生活や経済活動の場で、意識し、行動しなければ実現しません。まず、私たち一人ひとりが、世界の人々や将来世代、また環境との関係性の中で生きていることを意識し、行動を変革することが必要であり、そのための教育がESDです。

SD Sustainable Development

国連ESDの10年国際実施計画 ドラフト文書
(平成16年・2004年)
UNESCO

Sustainability relates to ways of thinking about the world, and forms of social and personal practice that leads to:

- ethical, empowered and personally fulfilled individuals;
- communities built on collaborative engagement, tolerance and equity;
- social systems and institutions that are participatory, transparent and just; and
- environmental practices that value and sustain biodiversity and life-supporting ecological processes.

Source: Hill et al. 2003

Sustainabilityとは世界を考える方法に関連しており、社会や個人の実践の形式に関連している。その実践とは以下につながるものである。

- 道徳的でエンパワーされており、人格的に充足した個人
- 協働による関与と寛容、公平を基盤とするコミュニティ
- 生物多様性と生命を維持する生態学的なプロセスを尊重し持続させる環境の実践

ESD

ESD:そんなたいそうなのができるのか
今までの教育とどう違うのか
持続可能って、そもそも、何を持続させるのか

SD における教育の役割

国連ESDの10年国際実施計画 ドラフト文書
(平成16年・2004年)
UNESCO

Education must inspire the belief that each of us has both the power and the responsibility to effect positive change on a global scale.

Education is the primary agent of transformation towards sustainable development, increasing people's capacities to transform their visions for society into reality.

Education fosters the values, behaviour and lifestyles required for a sustainable future

Education for sustainable development is a process of learning how to make decisions and consider the long-term future of the equity, economy and ecology of all communities.

Education builds the capacity for such futures-oriented thinking.

•教育は私達一人ひとりが、地球規模の好ましい効果を成し遂げる力と責任があるという信念を動機付けしなければならない。

•教育はSDへの変革を成し遂げる第一義的な主体である。それにより人々が彼らの社会に対する構想を現実に変えるための能力を増強するものである。

•教育は持続可能な未来をつくるために必要とされる価値観、行動、生活様式を育成する。

•SDのための教育とは、どのようにしてすべてのコミュニティの長期的な公平、経済、生態学について決断し熟考することができるのかを学ぶプロセスである。

•教育はこのような未来志向型の思考の能力を作り上げる。

「持続可能な開発のための教育」(ESD)って何？

出典: 内閣官房
<http://www.cas.go.jp/jp/seisaku/kokuren/esd/gaiyou.html>

SDにおける教育の役割

学習:秘められた宝 Learning:The Treasure within
Report to UNESCO of the International Commission on Education for the Twenty-first Century
(ドローラ報告書)

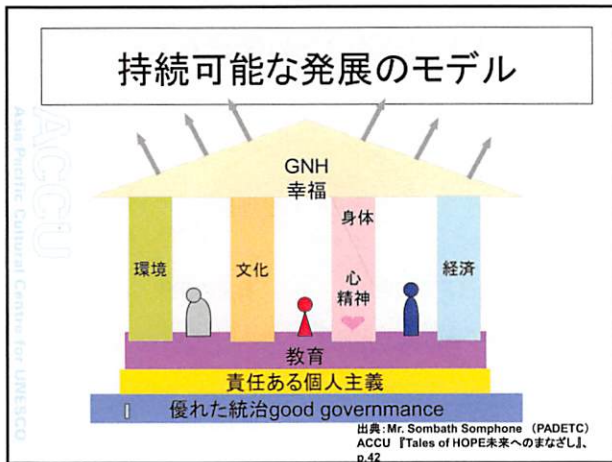
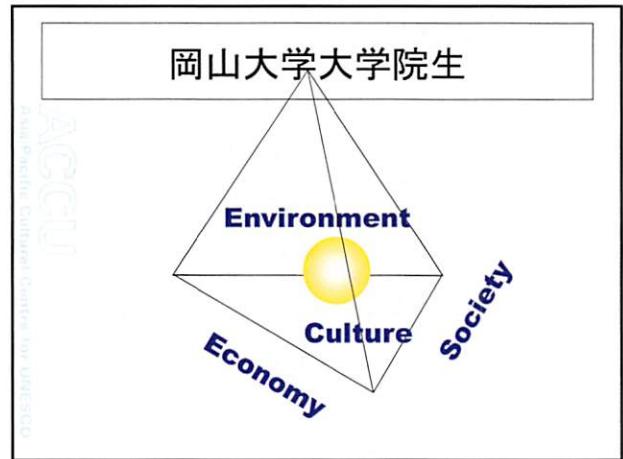
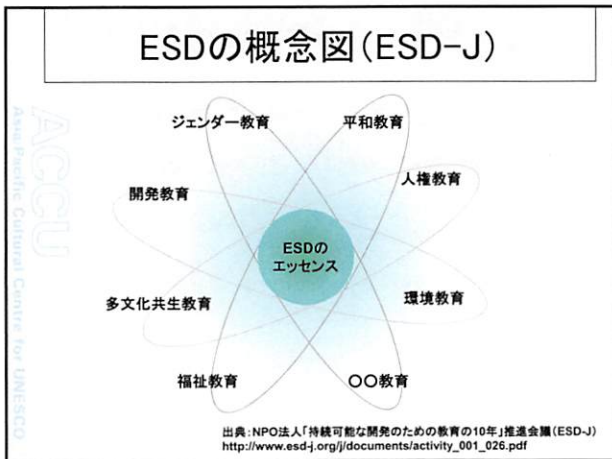
学習の4つの柱

- 知ることを学ぶ (learning to know)
- 為すことを学ぶ (learning to do)
- 共に生きることが学ぶ (learning to live together)
- 人間として生きることが学ぶ (learning to be)

ESDのために加わる「柱」?
Learning to transform
変革することを学ぶ

ESDの概念図

出典: 日本ユネスコ国内委員会
『ユネスコスクールと持続発展教育(ESD)について』, p.1



SD

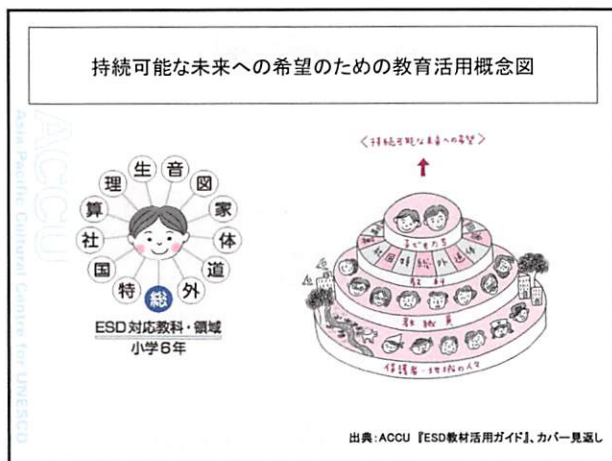
持続可能な〇〇、持続不可能な〇〇

持続可能な地球？ 持続不可能な地球？

300万年 / 46億年 = x 時間 / 24時間 × 365日

持続可能な結婚生活？ 持続不可能な結婚生活？

持続可能な社会？ 持続不可能な社会？

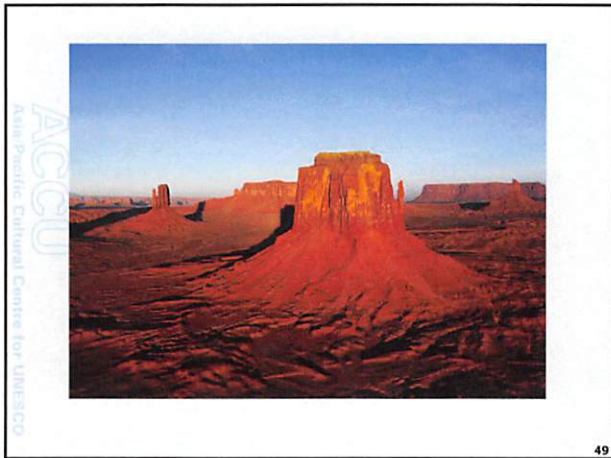


SD

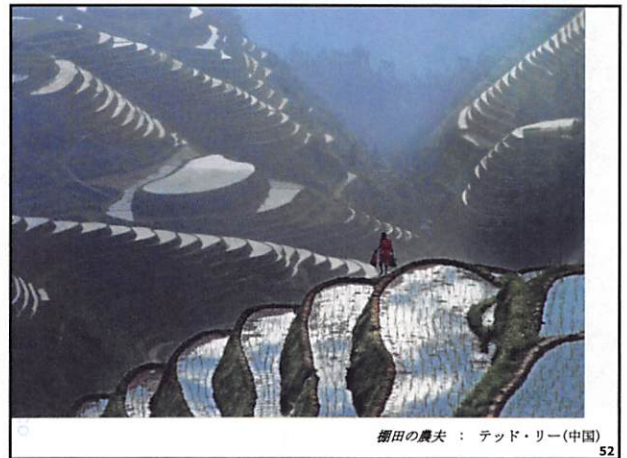
持続可能な〇〇、持続不可能な〇〇

日常の「風景・光景」を持続させようと思ったら・・・

アジア太平洋ESDフォトメッセージコンテスト「Celebration of Our Living Culture」
 入選作から考える



49



棚田の農夫 : テッド・リー(中国)

52



ミャンマーの正月祭 : キン・マウン・ウイン(ミャンマー)

50



幸せな時間 : ハルジョノ・ドジョヨビソノ
(インドネシア)

53



風箏人 : チン・プエ・リン(マレーシア)

51



ワシ祭 : エルデネトヤー(モンゴル)

54



命と希望 : シム・サラック (カンボジア)

55

ユネスコスクールへの サポート

Various support available for
ASP net schools



神輿をかつく女たち : 柏倉 玲子 (日本)

56

ユネスコスクール加盟のメリット

国際交流機会の増大

- ◎ 世界のユネスコスクール活動情報の提供
- ◎ 世界のユネスコスクールと交流する機会の増加
- ◎ 海外との教員交流(米国・韓国・中国など)
- ◎ 世界の教育事情、国連機関の活動の把握

国内連携の強化

- ◎ ESDのための教材・情報の提供
- ◎ ユネスコスクールウェブサイトを通じた情報交換
- ◎ ワークショップ・研修会への参加
- ◎ 国内の関係機関との連携強化

(文科省資料『ユネスコスクールと持続発展教育(ESD)』)

59



節分 - 福よ来い! : 亀野 哲也 (日本)

57

ユネスコスクール/ESD関連事業例 (平成23年度の例)

- ▶ ユネスコスクールESDアシストプロジェクト助成金
対象:ユネスコスクール加盟校
授業の中でESDを実践する上で必要な教材などの購入資金等の助成
(上限は1校あたり10万円)
- ▶ 日本ユネスコ・パートナーシップ事業
対象:ユネスコスクール加盟校、参加申請中の学校
ユネスコスクール活動に係る研修会・発表会・成果物作成等を支援

<ESD関連事業>

- ▶ ESD日米教員交流プログラム
- ▶ 日韓・日中教員交流プログラム
- ▶ さまざまな国内研修機会

(文科省資料『ユネスコスクールと持続発展教育(ESD)』)

60

ユネスコスクール 活動事例 ASP school practices

キーワード

真価への理解	参加
協力	認識
共感	尊敬
正義	寛容
相互理解	信頼
規範	価値 …

『ESD教材活用ガイド—持続可能な未来への希望』

- 文部科学省の委託事業としてACCUが発行(2009)
- 日本の小学校・中学校のESD好事例をそこで使われている教材を切り口に収集・分析

教材例:
 地域の伝統産業(縞模様の木綿布)
 地域の歴史上の人物
 地域の川
 学校図書館
 おなかをすかせる体験
 ペットボトルのキャップ
 回転寿司



『ひろがりつながる ESD実践事例48』

- 文部科学省の委託事業としてACCU発行(2011)
- 日本のユネスコスクール48校のESD実践を紹介、分析

実践例:
 平和、国際理解、人権、環境、福祉、郷土愛

地域や保護者と一緒に活動
 留学生とともに
 学校間交流
 伝統文化体験
 わが町の理解




13の事例に共通するのは:

- ① 生命・環境・経済・社会、文化の持続可能性を考えることができる教材・実践
- ② 子どもたちと教師・保護者・地域の人々をつなぐことができる教材・実践
- ③ 子どもたちと異なる時代や世代間の対話と交流をつくることのできる教材・実践
- ④ ここ(学校・地域)と他の地域や社会との対話をつくることのできる教材・実践
- ⑤ 「本質的で根源的な問い」を愛し、抱くことのできる教材・実践
- ⑥ 「本質的で根源的な問い」への回答を探すための多様な情報収集・活用・社会参画

なぜユネスコスクールに？

- 学校の持続・発展のため
- 教育委員会の意向
- 子どもたちをかえたい
- 自らの実践を相対化したうえで再評価したい・強化したい
- 自らの実践を制度化したい




ユネスコスクールになってよかったこと

ユネスコの教育理念を再認識したことで、これまで独自に進めてきた活動をグローバルスタンダードに照らし合わせて体系的に、そして理論的に理解でき、これまでの活動の意味や目的が明確になりました。また、全国・世界のユネスコスクールとのネットワークを通じて、他校の先生方との交流が生まれました。小規模校であることの閉鎖性を解決し、教員の視野を広げることができました。



ユネスコスクール公式ウェブサイト


<http://www.unesco-school.jp/>

ユネスコスクールになってよかったこと

個人同士のつながりから学校同士のつながりまで、幅広いネットワークが非常にスムーズに構築されるということです。

本校では教員の名刺にユネスコスクールのロゴマークを入れるように推奨しています。今回、ESD日米教員交流プログラムに参加した際にも、国内外の方と単なる名刺交換に終わるのではなく、このロゴマークが功を奏して、はじめてお会いした方ともすぐに意気投合できるケースが多くありました。ユネスコスクールに参加することは、まさにグローバルネットワークを築くことにつながると感じます。




ESD

Education for Sustainable Development

すべての教育と学びはSDのために

質の高い教育と教育環境
+
現在と将来のコミュニティの人たち+日本人(世界のなかの)と
コミュニティ+日本(世界のなかの)に対する
危機感
+
希望



ユネスコスクールになってよかったこと

- 最初は右も左もわからなかった。でもやってみると楽しい！ぼやいていた総合的な学習の時間の目的もはっきりした。生徒がかかる様子がよくわかる。保護者も協力的でうれしい。
- 他のユネスコスクールから多くのアイデアを得た。この「わくわく感」を土日で忘れることなく、月曜日にまず校長と教務主任に本校で実施したい様々なアイデアを伝えたい。
- 学校と地域の互恵性のなかでユネスコスクールとESDを継続させたい。

(ユネスコスクール地域交流会in金沢、2011年8月26日)



北陸におけるユネスコスクールへの取り組み

金沢大学環境保全センター教授 鈴木克徳
電話/ファックス: 076-234-6899 E-mail: suzukik@staff.kanazawa-u.ac.jp

アジアにおける環境危機 酸性雨

中国峨眉山の冷杉の枯死状況



出典: 酸性雨研究センター

今なぜESDについて考える必要があるのでしょうか？

私たちが取り巻く社会が変化し、環境問題をはじめとする様々な問題が私たちの脅威になりつつあるためです。

地球規模の環境危機

- 地球温暖化: 今世紀最大の環境問題
- 熱帯林の減少
- 化学物質汚染

身近な社会の危機

- 過疎高齢化、限界集落
- 医療・福祉問題
- 子供の自然や社会に対する無関心
- いじめ、不登校

⇒ 皆が安全で安心して、公正に暮らせるような未来について考える必要があります。

アジアにおける環境危機 黄砂

北京市の砂塵嵐 2002年3月20日



出典: 日中友好環境保全センター 全浩氏

気候変動による生態系への影響

地球の自然環境(全大陸とほとんどの海洋)は、今まさに温暖化の影響を受けている。

世界で観測されたデータのうち、物理環境については94%、生物環境については90%において温暖化の影響が優位に現れている。

気候変動が自然環境、人間環境に及ぼす(既に生じている)主な影響

- 水河川の増加と拡大
- 永久凍土地域における地盤の不安定化
- 春季現象(発芽、鳥の渡り、産卵等)の早期化
- 動植物の生息域の高緯度、高地方向への移動
- 熱波による死亡、媒介生物による感染症

アラスカ: ミューア氷河



出典:
[左] Muehleisen, W.D. 1981. Muir Glacier. From the Online glacier photograph database. Boulder, Colorado USA: National Snow and Ice Data Center/World Data Center for Glaciology. Digital media.
[右] Muehleisen, W.D. 2004. Muir Glacier. From the Online glacier photograph database. Boulder, Colorado USA: National Snow and Ice Data Center/World Data Center for Glaciology. Digital media.

なぜこのような危機が訪れたのでしょうか？

- 産業革命以降の急激な人間活動の増大が地球の生態系にひずみをもたらしているからです。地球の生態系はもはや無限の恵みをもたらしてはくれません。
- 今の私たちのライフスタイルは持続可能なものではありません。

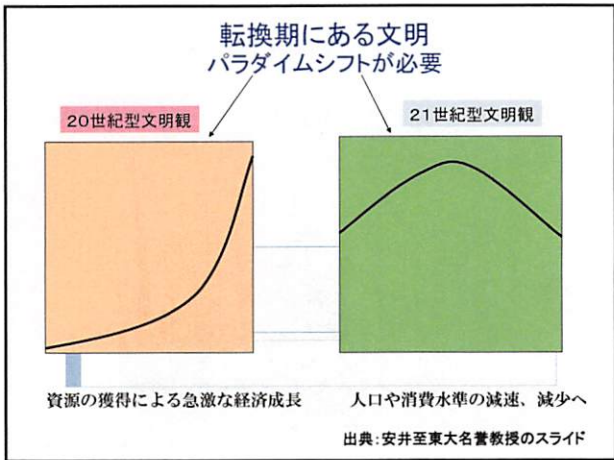
エコロジカル・フットプリントを用いた計算では！

もし地球の全ての人が日本並の生活をしたとすれば 地球は2.4



アメリカ並みの生活では、地球は5.3個必要

(出典) 涌井 史郎 東京都大学・環境情報学部・教授

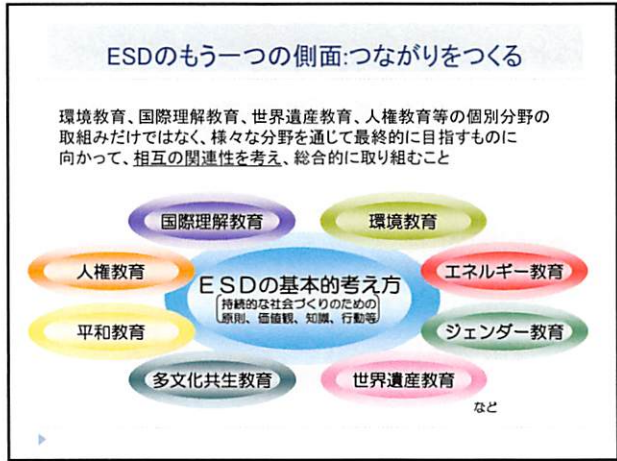


ESDの学び方、考え方

ESDを通じて学びたいこと

- まず私たちの周りの自然や社会について興味と関心を持ち、学ぶこと (認識能力の育成)
- 身近な社会や世界とのつながりから、持続可能な社会とは何かを考え、自分たちの価値観やライフスタイルを見直せるようになること (批判的な思考能力の育成)
- 学ぶだけでなく実践する力を身につけること (実践力の養成)

ESDの学習は「生きる力」を身につけることとほとんど同義



我が国の提唱による国連「持続可能な開発のための教育 (ESD) の10年」(2005-2014)

- 2002年に世界の首脳が集まって21世紀の地球環境について議論した際に日本が提案
- 国連総会決議として採択 (2002年12月)
- 2005年1月からの10年間として実施
- 国連科学文化教育機関(ユネスコ)を国連の推進役に指定
- 国連による国際実施計画 (2005年10月)
- わが国の国内実施計画 (2006年3月)

(2011年6月改訂)

ESDの10年のロゴ

ESDの10年のマスコット

学習指導要領の改訂とユネスコスクール推進

- 学習指導要領の改訂と持続可能な社会の構築の観点の明示
 - 平成20年3月: 幼稚園教育要領、小学校・中学校の学習指導要領
 - 平成21年3月: 高校の学習指導要領
- 文部科学省: 「教育基本法とこの新しい学習指導要領に基づいた教育を実施することにより、ESDの考え方に沿った教育を行うことができる。」
- 平成20年4月、文部科学省からユネスコスクール制度を活用したESDの推進を、全国の都道府県知事、都道府県教育長に通知
- ACCUを事務局としてユネスコスクール・ネットワークを、またその支援のためにユネスコスクール支援大学間ネットワーク (ASPUnivNet: 全国14大学加盟、現在の事務局は奈良教育大学) を設立。

地球環境基金事業によるESD支援

- 学校教師を中心とする北陸におけるESD普及のための仕組みづくり（平成20年度）
- マルチステークホルダーによる北陸におけるESD普及のための仕組みづくり（平成21年度～23年度）

主として初等中等教育関係者を対象とする集約的ESD講座、幅広い市民を対象とするESD普及啓発のためのESDシンポジウム、ESDモデル校におけるESD活動の実施、学校、教育委員会、自治体、NGO、大学等からなるESD推進連絡協議会開催等



北陸での実践から見てきたこと

- 組織としての学校全体による取り組み
 - 学校教育目標での位置づけ
 - 一部の教員のイニシアチブから全教員のESD理解へ
 - 新たなESD教育を始めるのではなく今あるカリキュラムを見直してみる
- ESDの観点からの既存の学習指導計画の見直し（ESDカレンダーの活用）
- 総合的な学習の時間と教科とのつながりの見直し
- 地域に立脚したカリキュラム
- 様々な関係者との交流・連携の強化（地域の人々、保護者、専門家等）
- 学年間のつながりの強化が課題
 - 具体的なカリキュラムづくりとそのための体制づくりが鍵**

ESD石川シンポジウム 1月22日

ESD富山シンポジウム 1月29日

ESD導入のプロセス

- <第一段階>
学校の幹部を中心としたユネスコスクールへの申請
- <第二段階>
教師全員によるESDの認識の共有
- <第三段階>
ESDの観点を踏まえた学習指導計画書の作成
- <第四段階>
新学習指導計画の策定、実践と見直し

金沢大学による日本／ユネスコパートナーシップ事業

平成21年度事業

- 北陸地域における具体的なユネスコ・スクール活動の事例集作成
- ESDセミナーin金沢：北陸におけるユネスコ・スクール事例発表会（平成22年1月31日（日）、金沢）
- ESD/ユネスコ・スクール関係者によるESD関連会議への参加や先進地域のユネスコスクール等の視察
- 中部地域の8校のユネスコスクールに対する資金支援



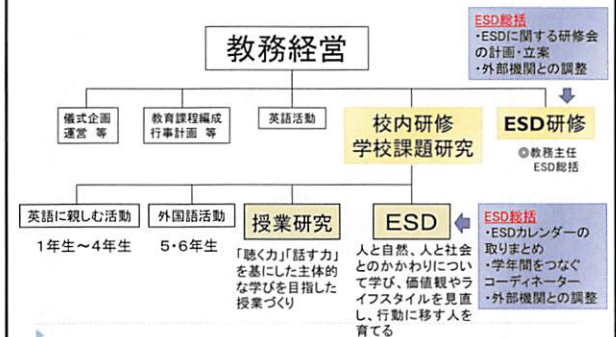
平成22年度事業

- 潜在的ユネスコスクールの加盟促進に向けた助言等
- 金沢大学教員養成カリキュラムにおけるESD的要素の分析
- 中部地方、北陸地方における潜在的ASPUinNet加盟大会合
- 北陸及び東海地域のユネスコスクール、ユネスコスクール候補校の経験交流会
- 先進地域（大阪）の高校のユネスコスクール活動の視察・意見交換



教育経営校務組織

（平成22年度）



学習指導計画とESDのテーマ		自然にやさしい(環境・生命尊重)	人にやさしい(人権・福祉)	地球にやさしい(国際理解・地域文化)
教科	単元	内容	内容	内容
国語	4月	新編 国語 1年 1学期 1単元	新編 国語 1年 1学期 2単元	新編 国語 1年 1学期 3単元
算数	4月	新編 算数 1年 1学期 1単元	新編 算数 1年 1学期 2単元	新編 算数 1年 1学期 3単元
理科	4月	新編 理科 1年 1学期 1単元	新編 理科 1年 1学期 2単元	新編 理科 1年 1学期 3単元
社会	4月	新編 社会 1年 1学期 1単元	新編 社会 1年 1学期 2単元	新編 社会 1年 1学期 3単元
総合	4月	新編 総合 1年 1学期 1単元	新編 総合 1年 1学期 2単元	新編 総合 1年 1学期 3単元
英語	4月	新編 英語 1年 1学期 1単元	新編 英語 1年 1学期 2単元	新編 英語 1年 1学期 3単元
音楽	4月	新編 音楽 1年 1学期 1単元	新編 音楽 1年 1学期 2単元	新編 音楽 1年 1学期 3単元
体育	4月	新編 体育 1年 1学期 1単元	新編 体育 1年 1学期 2単元	新編 体育 1年 1学期 3単元
美術	4月	新編 美術 1年 1学期 1単元	新編 美術 1年 1学期 2単元	新編 美術 1年 1学期 3単元
道徳	4月	新編 道徳 1年 1学期 1単元	新編 道徳 1年 1学期 2単元	新編 道徳 1年 1学期 3単元
特別活動	4月	新編 特別活動 1年 1学期 1単元	新編 特別活動 1年 1学期 2単元	新編 特別活動 1年 1学期 3単元

「子どもの変容」こそを「メリット」の中心に・・・

ユネスコスクールでこんな変化が・・・

- ① 子どもたちに変化が・・・
 - ◆ 自校に誇りを持つようになった
 - ◆ 生き生きと学ぶようになった
 - ② 学校に変化が・・・
 - ◆ 保護者や地域の信頼・評価がアップ
 - ◆ 活性化してきた
- **子どもの変容を実践の中心にすえることが重要**
- **子どもが変容するためには、まず教師が変わることが必要**

学習指導計画を踏まえたESDカレンダー作成		自然にやさしい(環境・生命尊重)	人にやさしい(人権・福祉)	地球にやさしい(国際理解・地域文化)
科目	単元	内容	内容	内容
国語	4月	新編 国語 1年 1学期 1単元	新編 国語 1年 1学期 2単元	新編 国語 1年 1学期 3単元
算数	4月	新編 算数 1年 1学期 1単元	新編 算数 1年 1学期 2単元	新編 算数 1年 1学期 3単元
理科	4月	新編 理科 1年 1学期 1単元	新編 理科 1年 1学期 2単元	新編 理科 1年 1学期 3単元
社会	4月	新編 社会 1年 1学期 1単元	新編 社会 1年 1学期 2単元	新編 社会 1年 1学期 3単元
総合	4月	新編 総合 1年 1学期 1単元	新編 総合 1年 1学期 2単元	新編 総合 1年 1学期 3単元
英語	4月	新編 英語 1年 1学期 1単元	新編 英語 1年 1学期 2単元	新編 英語 1年 1学期 3単元
音楽	4月	新編 音楽 1年 1学期 1単元	新編 音楽 1年 1学期 2単元	新編 音楽 1年 1学期 3単元
体育	4月	新編 体育 1年 1学期 1単元	新編 体育 1年 1学期 2単元	新編 体育 1年 1学期 3単元
美術	4月	新編 美術 1年 1学期 1単元	新編 美術 1年 1学期 2単元	新編 美術 1年 1学期 3単元
道徳	4月	新編 道徳 1年 1学期 1単元	新編 道徳 1年 1学期 2単元	新編 道徳 1年 1学期 3単元
特別活動	4月	新編 特別活動 1年 1学期 1単元	新編 特別活動 1年 1学期 2単元	新編 特別活動 1年 1学期 3単元

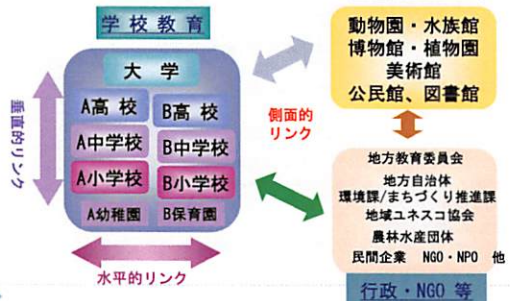
子どもたちによる発信

- 学内での発信
 - ◆ クラスでの発表
 - ◆ 学年での発表
 - ◆ 他の学年に対する発表・説明(たとえば1学年下の生徒)
- 学校外の人たちへの発信
 - ◆ 公開授業
 - ◆ 公民館での地域の人たちへの成果発表
 - ◆ 行政を相手にする発表
 - ◆ その他特定の交流先(他のユネスコスクール等)
- 発表形態
 - ◆ 発表会
 - ◆ 壁新聞等
 - ◆ PTA資料
 - ◆ 地域への配布物



ESD普及促進のための地域の知の拠点づくり

ESDによる地域の連携構築



ESDと『生きる力』 江東区立八名川小学校手島利夫校長からのメッセージ

- ESDは、文部科学省の掲げる『生きる力』を育てる教育そのもの。
学習指導要領の改訂の基本方針
「変化の激しい社会を担う子どもたちに必要な力は、…自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性、たくましく生きるための健康や体力などの『生きる力』である。」
- これは、持続不可能になるくらいに激しく変化を続けるグローバル社会において、よりよい未来を創っていくために必要な資質・能力を示したものの。
- このようにとらえると、ESDは全ての学校における最重要課題。

教科領域	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
国語	よりよい学習態度を身にまとう	読書活動について考えよう	新聞を作ろう	手と心で読む	アップとルーズで伝える	仕事づくりに作る	秋さがし	冬	春	夏	秋	冬
算数	夏さかり	夏さかり	夏さかり	夏さかり	夏さかり	夏さかり	夏さかり	夏さかり	夏さかり	夏さかり	夏さかり	夏さかり
理科	水はどこから	水はどこから	水はどこから	水はどこから	水はどこから	水はどこから	水はどこから	水はどこから	水はどこから	水はどこから	水はどこから	水はどこから
社会	私たちが水を暮らし	私たちが水を暮らし	私たちが水を暮らし	私たちが水を暮らし	私たちが水を暮らし	私たちが水を暮らし	私たちが水を暮らし	私たちが水を暮らし	私たちが水を暮らし	私たちが水を暮らし	私たちが水を暮らし	私たちが水を暮らし
総合	私たちが水を暮らし	私たちが水を暮らし	私たちが水を暮らし	私たちが水を暮らし	私たちが水を暮らし	私たちが水を暮らし	私たちが水を暮らし	私たちが水を暮らし	私たちが水を暮らし	私たちが水を暮らし	私たちが水を暮らし	私たちが水を暮らし
特活	修 習 づ くり	修 習 づ くり	修 習 づ くり	修 習 づ くり	修 習 づ くり	修 習 づ くり	修 習 づ くり	修 習 づ くり	修 習 づ くり	修 習 づ くり	修 習 づ くり	修 習 づ くり
道徳	心の中の宝	心の中の宝	心の中の宝	心の中の宝	心の中の宝	心の中の宝	心の中の宝	心の中の宝	心の中の宝	心の中の宝	心の中の宝	心の中の宝
音楽												
図工												
体育												
<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> 環境の教育 多文化の理解 人権・命の教育 国際的な協力 </div>												

全教育活動を通じてESDに取り組もう

- 「基本方針」にあるように①問題解決能力 ②豊かな人間性 ③健康や体力の育成に取り組むのであれば、全学年の全ての教育活動を通じて行うことが必要。
- ESDを学校としてどのように展開していくのか、全ての職員が理解し合い、保護者や地域の人々の理解と協力を得ながら展開していくことが重要。
- ① まず、各学校の教育課程や経営方針をESDの視点から見直すことが重要。
- ② 学習指導要領に合わせて、特に、生活科・総合的な学習の年間指導計画を見直すことが必要。その際、ESDカレンダーが有効。
- ESDカレンダーにより、教科横断的・総合的な学習の展開が一目で見渡せるようになり、また、教科で学んだ基礎的・基本的な能力の活用のしかたも位置づけられる。

ESDカレンダーの課題

- カレンダー部分は「教科横断的な学習の進め方」を「見える化」し、単元間の関係を明らかにするために、大変重要な役割を果たしている。
- しかし、指導計画としては次のような欠点もある。
 - 指導時数が入っていない
 - 単元の目標も入っていない
 - 学習活動も示されていない
 - 問題解決的な、あるいは探究的な学習過程を踏まえたもの
 - 地域人材や関係機関との連携が位置づけられていない

生活科や総合的な学習の時間について

- 生活科や総合的な学習の時間は、教科・領域に散在している学習内容を関連づけ、つなぎ合わせる「のりしろ」のような役割や、学んだ内容を活用する場を提供する役割を果たす。
- ESDを推進するには、教科・領域と関連させ、生活科や総合的な学習の時間でどのような単元を組むのが、とても重要。
- 行事に使ったり、補習に使ったり…、草刈り場にははだめ。

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
単元名「想する地球の力」(16時間) 【ねらい】 本単元は「1」の学びを通して、本題について考え、身近な自然環境や社会生活の中で本題と関連する事項を探究し、実践していく。	単元名「心の中の宝」(14時間) 【ねらい】 神話や伝説の登場人物の生き方を通して、心の中の宝について考え、自分自身の心の中にある宝を探し出し、実践していく。	単元名「1/2成人式」(10時間) 【ねらい】 1/2成人式がどのようなものであるかを学び、自分自身の将来について考え、実践していく。	単元名「水はどこから」(14時間) 【ねらい】 水はどのようにして地球に存在しているのかを学び、自分自身の生活の中で水とどのように関わっているのかを学び、実践していく。	単元名「私たちが水を暮らし」(14時間) 【ねらい】 私たちが水をどのようにして暮らしているのかを学び、自分自身の生活の中で水とどのように関わっているのかを学び、実践していく。	単元名「修習づくり」(14時間) 【ねらい】 修習づくりを通して、自分自身の学びを振り返り、実践していく。	単元名「秋さがし」(14時間) 【ねらい】 秋の季節の行事や文化を学び、自分自身の生活の中で秋とどのように関わっているのかを学び、実践していく。	単元名「冬」(14時間) 【ねらい】 冬の季節の行事や文化を学び、自分自身の生活の中で冬とどのように関わっているのかを学び、実践していく。	単元名「春」(14時間) 【ねらい】 春の季節の行事や文化を学び、自分自身の生活の中で春とどのように関わっているのかを学び、実践していく。	単元名「夏」(14時間) 【ねらい】 夏の季節の行事や文化を学び、自分自身の生活の中で夏とどのように関わっているのかを学び、実践していく。	単元名「秋」(14時間) 【ねらい】 秋の季節の行事や文化を学び、自分自身の生活の中で秋とどのように関わっているのかを学び、実践していく。	単元名「冬」(14時間) 【ねらい】 冬の季節の行事や文化を学び、自分自身の生活の中で冬とどのように関わっているのかを学び、実践していく。

学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年
教科	国語	算数	理科	社会	総合	英語
単元	1. 国語の基礎	1. 数の概念	1. 物質の性質	1. 地域の発展	1. 総合的な学習の時間	1. 英語の基礎
単元	2. 国語の発展	2. 数の応用	2. 物質の変化	2. 地域の文化	2. 総合的な学習の時間	2. 英語の発展
単元	3. 国語の応用	3. 数の総合	3. 物質の総合	3. 地域の総合	3. 総合的な学習の時間	3. 英語の総合
単元	4. 国語の総合	4. 数の総合	4. 物質の総合	4. 地域の総合	4. 総合的な学習の時間	4. 英語の総合
単元	5. 国語の総合	5. 数の総合	5. 物質の総合	5. 地域の総合	5. 総合的な学習の時間	5. 英語の総合
単元	6. 国語の総合	6. 数の総合	6. 物質の総合	6. 地域の総合	6. 総合的な学習の時間	6. 英語の総合
単元	7. 国語の総合	7. 数の総合	7. 物質の総合	7. 地域の総合	7. 総合的な学習の時間	7. 英語の総合
単元	8. 国語の総合	8. 数の総合	8. 物質の総合	8. 地域の総合	8. 総合的な学習の時間	8. 英語の総合
単元	9. 国語の総合	9. 数の総合	9. 物質の総合	9. 地域の総合	9. 総合的な学習の時間	9. 英語の総合
単元	10. 国語の総合	10. 数の総合	10. 物質の総合	10. 地域の総合	10. 総合的な学習の時間	10. 英語の総合
単元	11. 国語の総合	11. 数の総合	11. 物質の総合	11. 地域の総合	11. 総合的な学習の時間	11. 英語の総合
単元	12. 国語の総合	12. 数の総合	12. 物質の総合	12. 地域の総合	12. 総合的な学習の時間	12. 英語の総合

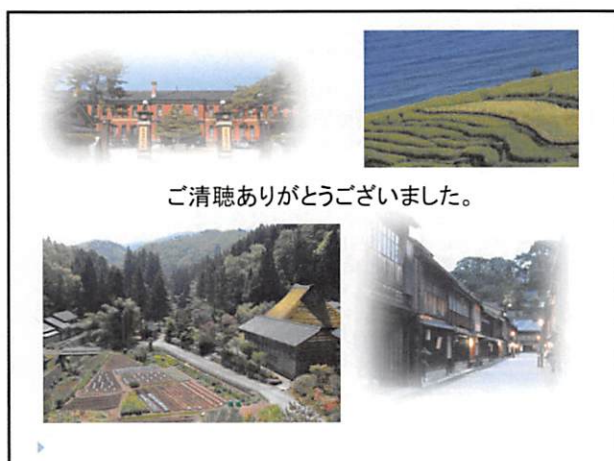
ESDカレンダー一部分と、その具体的な指導計画の部分を上下に合わせて、B4用紙1枚程度にまとめられたら、

- ・年間を通じて
- ・どのような視点をもって
- ・どのような内容の学びを
- ・どのような教科領域と関連づけて
- ・どのようなねらいをもって

- ・どのような展開で
- ・外部人材をどのように活用しながら
- ・どのくらいの時間をかけて

指導するのが、だれの目にも明らかになる。

教員の異動や学年の入れ替わりで人が替わっても、学校としてのカリキュラムがあることが大切。





研究主題

自律と共生をめざし、豊かな感性を身につける子どもの育成
 To help children become autonomous to live harmony and to excel academically

研究仮説

ESDの視点に立ち、誰が取り組んでも持続する教育課程の工夫・改善を進め、将来世代に必要な力を身につけさせることにより、将来社会を創造する人間を育成できる。

学校教育目標

確かな学力と豊かな感性に培い、
仲間とともにやりぬく子どもの育成

学び合う子
(問題解決力)

支え合う子
(共生)

やりぬく子
(自立)



知



徳



体

研究主題設定理由

持続可能な開発のための教育

Education for Sustainable Development

わが国における「ESDの10年」の中では、ESDを「一人一人が、世界の人々や将来世代、また、環境との関係性の中で生きていることを認識し、行動を変革する」ための力を育む教育と位置づけている。

子ども一人一人が
持続可能な社会づくりに参画する力
さまざまな問題に対して主体的に関わり解決する力

本校の実態

山形県「基礎・基本」定額状況調査アンケートや
全国学力状況調査アンケート等の分析から

自分に自信が持てず自己肯定感の低い児童
人間関係を築きにくく、厳しいことから逃避する

人や自然とのふれあい体験が希薄
学ぶ意欲、生きる意欲感の喪失
テレビや電子ゲーム等に没頭する生活の影響



多様な人とともに希望ある未来の構築に向け、主体的に活動できる人間を育成する

駅西型ESDの捉え

・ESDは、持続可能な社会づくりのための担い手(主体)づくりである。

・ESDは、人格の発達や「自律心」「思考力・判断力・表現力」「責任意識」などの人間性を育むことである。

・ESDは、他人・社会・自然環境との関係性を認識し、「関わり」「つながり」を通して、立場や考え方の違う人々を理解すると共に、尊重しながら協働的に課題を解決する力を身につけることである。

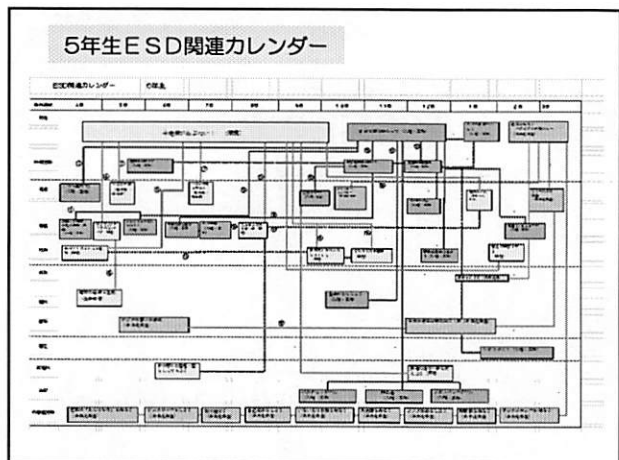
・ESDは、環境の保全と経済の発展の両立を探究するなど多面的、総合的に考えることができることである。



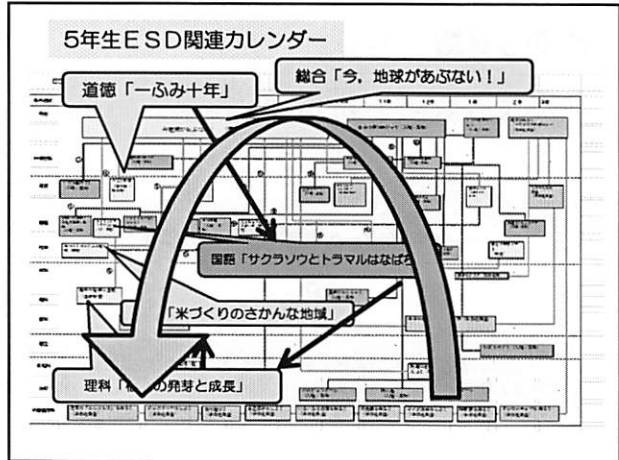
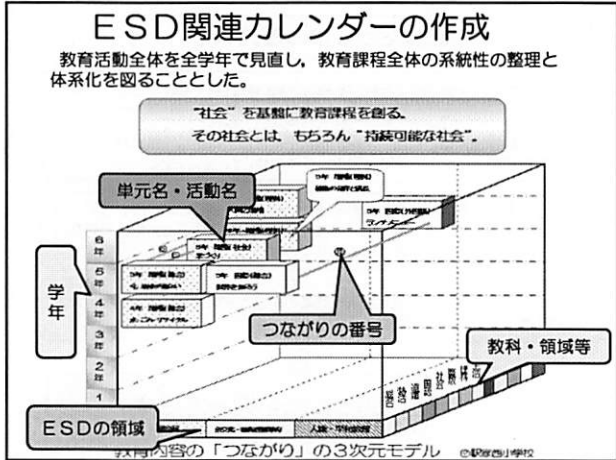
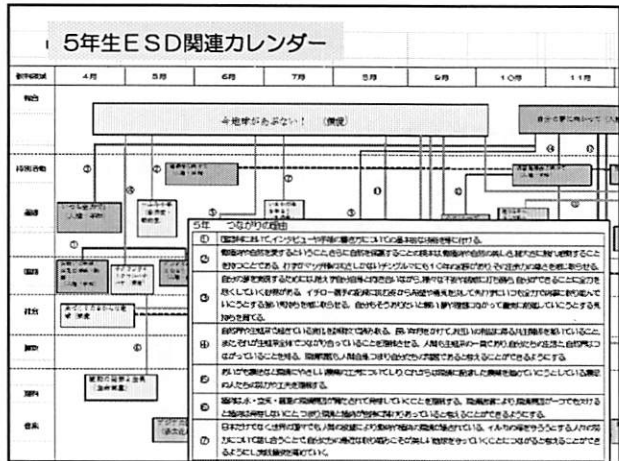
3つの柱を設定したESD関連カレンダー
「環境教育」「国際理解・多文化理解教育」「人権・平和教育」



ESDアプローチー千代田県にある3つのつながりを大事にした「生活学力」を身につける実践をする。

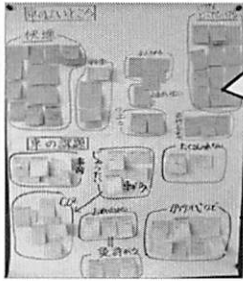


- ### 具体的実践の重点課題
- ①年間を通して、「ESD関連カレンダー」をもとにした教科、領域等のつながりの理由やつなぐたい力を意識した逆向き思考（バックキャスト・・・未来から今を考える）の計画的な指導を実践する。
 - ②持続発展教育の授業では、問題解決型の学習システムを児童と一緒に創り上げる。
 - ③児童が問題を解決し、自ら行動に移せるよう、身近な地域の問題に目を向けた、体験のよさを活かす学び合いの学習を地域へ発信していく。
 - ④話し合いを深めたい場面で付箋紙を使い、付箋紙の利点を生かした整理と分析をする。
 - ⑤指導者は、各科、領域等の学年の系統性を明確にしたつなぐたい力の評価内容を意識した指導を行う。
 - ⑥全学年、目的意識をはっきりとさせた自ら体験していく自然体験・社会体験・ものづくり生産活動の体験活動を取り入れ、「衣・食・住」の暮らしの原点に立ち寄り、効果的なまとめの活動により自己成長を自覚させる。



ちょっと難しいことも実践しよう！

CO2の排出が多いものの一つに車がある！



できるだけ自家用車利用を控えてもらいバスの利用をよびかけよう。



バスの利用が少ないのはなぜだろう。どのように改善すれば利用者がふえるかな！

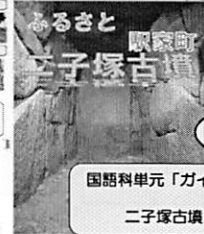


6年生 ふるさと駅家町 古墳フェスタ

駅家西学区まちづくり推進委員会の人たちと一緒に古墳フェスタを成功させよう。

地域にある国指定史跡「二子塚古墳」について調べ福山の人たちに埋蔵文化財の存在意義を発信しよう。

古墳フェスタに向けてまちづくり委員会の人たちと一緒に古墳清掃をしよう。



国語の学習とつなぐ

国語科単元「ガイドブックをつくろう」

二子塚古墳リーフレット作成

こんなバスならみんなが利用するよ！

全国バスサミット 福山

お米の品質の比較	登山ふくろ
平成17年 7年 350 234	夜露の音がいたいたに 色がきれい
平成20年 790 871 454	
平成24年 594 447 116	



温暖化が進んでいることの根拠となる資料を提示し、全国バスサミットでバスの利用を呼びかけよう！



6年生 ふるさと駅家町 古墳フェスタ

運動場に描いたよ。



古墳時代後期の大型古墳の大きさを再現し、リーフレットを作成して説明

1m間隔で5・6年生全員128名で作りました。



近くの大型店にポスターを貼ってもらうようお願いをしよう。

より多くの人に、温暖化ストップと自家用車利用を控えてもらうことをわかってもらおう。

一人の100歩より100人の一歩



5年生 古代より続く歴史を体感しよう。

学区「古墳フェスタ」の開催に向け、学区まちづくり推進委員会の方たちの支援をいただき、5年生は古代米を植えました。



古墳フェスタ来場者にできた古代米を食べてもらったり配布したりしよう。



地域の人たちと一緒にいった自主防災訓練

「いざ」という時に、あわてず行動できることが、みんなを守ることだ!

身近にある毛布で簡単に人を運ぶ担架が作れるね。



AEDってよく聞くけど、使い方は・・・?



真剣に見たり実際にやったり・・・訓練が必要だね。

非常事態に備えておくこと・・・地域のみながつながっていることってとっても大事なね。

研究の成果と課題

今まで環境を意識したり地球規模で未来から今を考えたりすることがなかったので、はじめ、授業の難しさを感じた。しかし、ESDで育てたい力を明確にすることで、より総合の時間の学習が実りあるものになることを理解できた。

〇〇先生の授業実践が印象に残った。総合の時間に学習してきた「伝え合う」ということの大切さを追究する授業であった。「伝え合う」ことは、持続可能な社会のために必要なこと、大切なことを子どもと一緒に考えていくことがESDなんだと思った。

学習したことをさまざまな場において、保護者、地域、市内外に学習成果を発表することで、環境教育を含めたESDの理解が広まり地域ぐるみの協働体制ができてきた。

単元の学習前と学習後で見取る評価

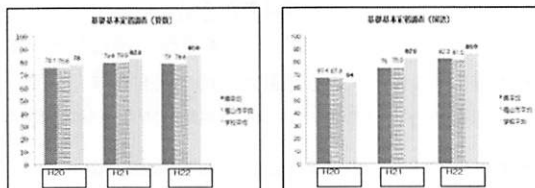
指導時間 教科・領域名	ESDでつ いた学力	ESDカレンダーを つないだ理由	児童のパフォー マンス事例
道徳 (1)			
総合 (2)	<ul style="list-style-type: none"> この時間に付いた学力を書く。 学習前と同じであれば同じ力を書く。 変わっていたらどのように変わったかを書く。 	<ul style="list-style-type: none"> 学習前と比較してつないでみてどうだったか児童の変容を書く 	<ul style="list-style-type: none"> 児童の変容が分かるものを入れる。 ノート・ワークシート 作品 写真等
国語 (4)			

今年度の課題として取り組んでいること

新学習指導要領を熟読し、学年間のつながりを整理したカリキュラムの作成。

ESDで付いた力を総合的に見取れる評価方法の研究

研究の成果と課題 児童の学力の変容



ESDの研究初年度と通過率の比較をすると、3年目は、算数科は7.6ポイント、国語科は、21.9ポイント上回った。これは、テーマとなる学習との出会いの場面の工夫により、児童自身が疑問をもち課題を見つけ、追究していこうとする意欲が算数科をはじめとして他の教科においても継続するようになったため。指導者が、教科で身についた力を、ESDで求めたい力と連動させることを意識して指導してきたことの成果。



ご静聴ありがとうございました

SSH
SuperScience
Highschool

2011. 8. 27
岡山地区ユネスコスクール・ESD関係校研修会・交流会
岡山大学大学院自然科学研究科棟

岡山一宮高校の取組 ～ユネスコスクールとして～

岡山一宮高等学校 鎌田 理加

Okavama Ichinomiya Super Science High School

SSH
SuperScience
Highschool

I 環境教育

取り組み①
課題研究(2年生全員必修・3年生選択)

取り組み②
蒜山夏季宿泊研修(理数科1年)

Okavama Ichinomiya Super Science High School

SSH
SuperScience
Highschool

ユネスコスクール加盟(2010. 7)

4つの基本テーマ

- (1) 地球規模の問題に対する国連システムの理解
- (2) 人権、民主主義の理解と促進
- (3) 異文化理解
- (4) 環境教育

Okavama Ichinomiya Super Science High School

SSH
SuperScience
Highschool

～課題研究の流れ～

Okavama Ichinomiya Super Science High School

学校設定教科「学術基礎」

1年次
科学技術コミュニケーション
科学技術リテラシー

2年次
「課題研究α」
「課題研究Ⅰ」

3年次
「課題研究β」
「課題研究Ⅱ」

地域貢献
国際貢献

大学での
学術研究

SSH
SuperScience
Highschool

岡山一宮高校のキーワード

環境教育・国際理解教育

スーパーサイエンス校として

Okavama Ichinomiya Super Science High School

SSH
SuperScience
Highschool

課題研究

自然との関わりを意識した環境問題に通じるテーマ

- 太陽エネルギーによる発電効率の向上に関する研究
～太陽電池とペルティエ素子のハイブリッド、太陽電池の配置、垂鉛の光電効果～
- キチン・キトサンの応用～機能性バイオマス資源の可能性～
- 生分解性プラスチックの生成条件及び生分解性
- 色素増感太陽電池の研究～効率のよい色素を求めて～
- 樹木の葉のアレロパシー
～アレロパシーを用いた除草剤としての利用の可能性～

Okavama Ichinomiya Super Science High School

SSH
Super Science High School

I 環境教育

～取り組み②「蒜山夏季宿泊研修」(理数科1年)～

<活動内容>

- ・神庭の滝周辺のニホンザルの生態観察(大阪大学)
- ・蒜山高原の地層観察(岡山理科大学)
- ・蒜山高原の自然観察および調査

Okavama Ichinomiva Super Science High School

SSH
Super Science High School

II 国際理解教育

取り組み① JICA中国との連携

取り組み② 海外からの訪問団の受け入れ


取り組み③ 韓国スタディーツアー

取り組み④ サイエンスイングリッシュキャンプ

Okavama Ichinomiva Super Science High School

神庭の滝にて
ニホンザル生態観察

蒜山高原の地史を学ぶ
地層観察




Okavama Ichinomiva Super Science High School

II 国際理解教育

～取り組み① JICA中国との連携～

- ・国際理解シンポジウム
青年海外協力隊員による
講演(1・2年生)
- ・JICA中国訪問(希望者)



貿易ゲーム等を通して世界の現状を学習

Okavama Ichinomiva Super Science High School

自然観察・調査

ポスター発表




Okavama Ichinomiva Super Science High School

II 国際理解教育

～取り組み② 海外からの訪問団の積極的な受け入れ～

2010年度
台湾の高校生46名

2011年度
中国の高校生22名(10月)
韓国の高校生30名程度(12月)



Okavama Ichinomiva Super Science High School

SSH
Super Science High School

Ⅱ 国際理解教育

～取り組み③ 韓国スタディーツアー～

【目的】


- (1) 韓国の高校・大学との連携の下、英語による研究発表や意見交換、交流活動等を行うことで、英語力を高め、海外においても研究内容や自己の考えを論理的に述べる力を育成する。
- (2) 世界のリーディングカンパニーであるサムスン電子本社や広報館を訪問し、グローバルな視野で最先端の科学技術について学習する。
- (3) 慶南科学高校、晋州教育大学との交流を通して、将来グローバルに活躍し、国際貢献できる科学者・技術者に必要な資質や人的ネットワークを築く。
- (4) 韓国の科学技術や文化等について学習することで異文化理解を深め、将来国際社会で活躍するための資質を養う。

Okavama Ichinomiva Super Science High School

SSH
Super Science High School

～慶南科学高校との交流～

晋州市の慶南科学高校を訪問し、交流行事や課題研究の発表会を行いました。英語での研究発表や質疑応答ができるか不安でしたが、積極的にコミュニケーションを取り、心に残る良い交流ができました。



Okavama Ichinomiva Super Science High School

SSH
Super Science High School

～韓国スタディーツアー～

【研修内容】平成23年8月1日～4日(3泊4日)

8月1日 企業・研究所訪問プログラム

- サムスン「Samsung d' light」「デジタルパビリオン」

8月2日 慶南科学高等学校との交流プログラム

- 学校紹介・交流行事など
- 課題研究ポスター発表会(英語)

8月3日 晋州教育大学でのプログラム

- 講義「創造性と化学教育」及びフィールドワーク

8月4日 ソウル市内研修

- ソウル市内観光・仁川国際空港施設見学

Okavama Ichinomiva Super Science High School

SSH
Super Science High School

～晋州教育大学訪問～

晋州教育大学では、「創造性と化学教育」「晋州城フィールドワーク」の2つの研修講座を受講しました。教育における“創造性”の大切さ、や晋州城にまつわる日本と韓国の歴史について学びました。



Okavama Ichinomiva Super Science High School

SSH
Super Science High School

～企業・研究所訪問～

サムスンd' lightやデジタルパビリオンでは、最新の科学技術に触れました。電力の消費を抑え、環境への負荷を軽減するための様々なIT技術が開発されており、近未来の生活を体験することができました。



Okavama Ichinomiva Super Science High School


SSH
Super Science High School

～韓国との恒常的交流～

今後の予定

2011年 12月 慶南科学高校生約30名が本校訪問

2012年 3月 生徒約40名が慶南科学高校訪問




Okavama Ichinomiva Super Science High School

SSH
Super Science High School

Ⅱ 国際理解教育

～取り組み④ サイエンスイングリッシュキャンプ～

- 全校生徒1000人規模を対象としたキャンプ
- サイエンスコミュニケーションの他、英語ポスター作成・発表の訓練をし、全校生徒の英語コミュニケーション能力の育成を図る。



Okavama Ichinomiva Super Science High School

SSH
Super Science High School

～フィリピン研修～

【研修内容】平成23年7月31日～8月5日

7月31日 出国・移動

8月 1日 風力発電所(バンガイ・ウインド・ファーム)見学

8月 2日 JICA訪問・トンド地区/バランガイ128訪問

8月 3日 ケソン市ケムレス社訪問
Sitero Francisco Memorial National High School 訪問

8月 4日 マクバン地熱発電所訪問
フィリピン大学付属ロスバノス校訪問

8月 5日 帰国

Okavama Ichinomiva Super Science High School

SSH
Super Science High School

Ⅲ 環境&国際理解教育

取り組み① フィリピン研修

取り組み② シンガポール方面への修学旅行

Okavama Ichinomiva Super Science High School

SSH
Super Science High School

～フィリピンの新エネルギー施設を視察～



Okavama Ichinomiva Super Science High School

SSH
Super Science High School

Ⅲ 環境&国際理解教育

～取り組み① フィリピン研修～


【目的】
開発途上国における再生可能なエネルギー開発、外貨獲得のために破壊された自然環境の再生、経済発展に伴って増大するゴミ処理などの取り組みと科学技術の課題について研修し、科学や国際貢献に関するものの見方や考え方の基礎を身につけさせ、将来、グローバルに国際貢献できる科学者や技術者を養成する。

Okavama Ichinomiva Super Science High School

SSH
Super Science High School

～トンド地区訪問～

閉鎖されたごみ山で生活している人たちに会いました。驚いたのは、マニラ市内の平均収入よりも、ごみ山で得る収入の方が多いということです。ただし、環境はやはり劣悪で、子供たちの衛生面・栄養・教育がとても心配です。ただ子供たちはとても無邪気で、訪れた私たちを温かく迎えてくれました。




Okavama Ichinomiva Super Science High School

SSH
Super Science High School

～JICA事務所訪問～

フィリピンでの援助の状況を学習しました。教育・医療のみならず、インフラの整備に多大な貢献がなされてきました。訪問時はちょうど雨季に当たり、雨が降ると道路に水があふれてすぐに危険な状態になりました。登下校が危険なので学校もしょっちゅう休校になるそうです。




Okavama Ichinomiya Super Science High School

SSH
Super Science High School

～環境について学ぶ～

- マングローブ観察
東南アジア特有の自然環境について学びました。
- 「neWATER」訪問
下水から飲料水を作るまでのプロセスを学びました。
- 「エアログリーン」訪問
土壌が十分にない環境で植物を栽培する実験場を見学しました。




Okavama Ichinomiya Super Science High School

SSH
Super Science High School

～現地学生との交流～

- Sitero Francisco Memorial National High School 訪問
- University of Philippines, Los Banos 校訪問

自然エネルギーや日本の原子力発電所の事故について話しました。たくさん話をした後は、敷地内の農業試験場の一角にマンゴーの木を一緒に植えました。




Okavama Ichinomiya Super Science High School

SSH
Super Science High School

～国際理解～

- シンガポールの日系企業訪問
様々な国籍の人と共に働く難しさと楽しさなど、貴重なお話を聞くことができました。
- Brother & Sister プログラム
各グループに一人ずつ現地の大学生に入って頂き、色々な話をして交流しました。



Okavama Ichinomiya Super Science High School

SSH
Super Science High School

Ⅲ 環境&国際理解教育

～取り組み② シンガポール方面修学旅行～

【研修内容】

- ① マングローブ観察
- ② ニューウォーター(水の循環・再生工場)訪問
- ③ エアログリーン(空中栽培実験場)訪問
- ④ 日系企業訪問
- ⑤ Brother & Sister プログラム

Okavama Ichinomiya Super Science High School

SSH
Super Science High School

～ポスター発表～

修学旅行で学んだことをポスターにまとめ、発表しました。



Okavama Ichinomiya Super Science High School

SSA
Sustainable Science Academy

IV 地域貢献




親子わくわく教室（日食観察）

みらいとあくしゅ（中山小）




Okavama Ichinomiya Super Science High School

SSA
Sustainable Science Academy

岡山一宮高校のESD

4つの基本テーマ

- (1) 地球規模の問題に対する国連システムの理解
- (2) 人権、民主主義の理解と促進
- (3) 異文化理解
- (4) 環境教育

岡山一宮高校のテーマ

- 環境教育
“科学”を軸に、持続可能な社会を構築するための知識や教養を身に付ける。
- 国際理解教育
国際社会で広く活躍し、貢献できる人材になるための態度と教養を身に付ける。

Okavama Ichinomiya Super Science High School



岡山大学

編集・発行：岡山大学

〒700-8530 岡山市北区津島中 3-1-1

岡山大学大学院教育学研究科 ESD 協働推進室

TEL : 086-251-7617